
さいたま市

大木戸遺跡Ⅳ

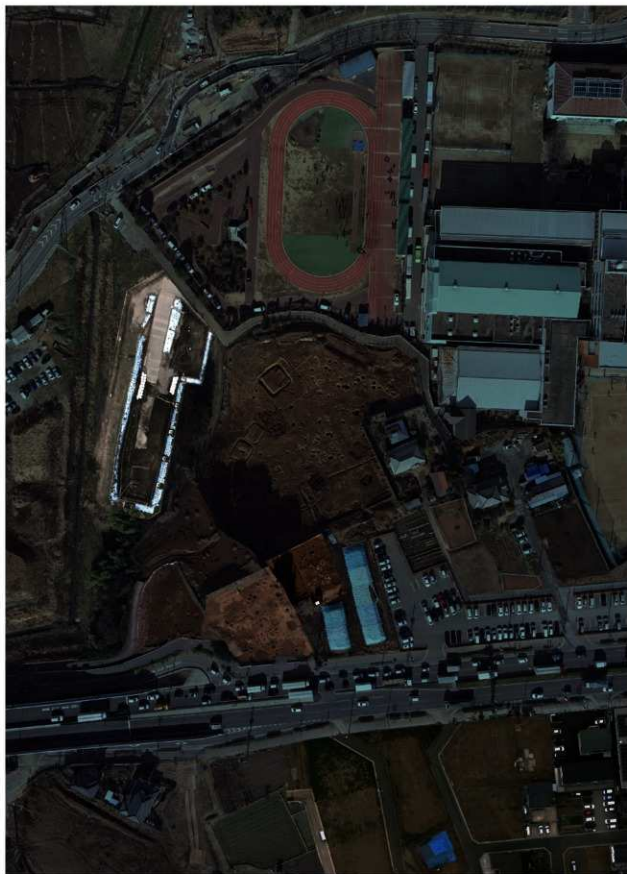
大宮西部特定土地区画整理事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告

(第1分冊)

2018

独立行政法人 都市再生機構

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 大木戸遺跡全景（合成）



1 縄文時代後期の土器群



2 古墳時代前期初頭の土器群

序

埼玉県は首都東京に隣接し、高次の都市機能と交通利便性を兼ね備えながら、ゆとりや潤いをもたらす自然環境にも恵まれています。

現在、JR西大宮駅周辺では、独立行政法人都市再生機構による大宮西部特定土地区画整理事業が行われ、さいたま市西部の複合拠点として、魅力ある都市機能と自然環境との調和を目指した新しい街づくりが推進されています。

さて、大宮西部特定土地区画整理事業地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数所在しています。今回発掘調査を実施した大木戸遺跡もその一つです。発掘調査は同区画整理事業に伴う事前調査であり、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

大木戸遺跡は、これまでの発掘調査によって旧石器時代から江戸時代にわたる人びとの暮らしや土地利用の推移が明らかとなり、地域の歴史を紐解くうえで貴重な成果が積み重ねられています。今回の報告は、台地上に点在する複数の調査地点を対象としたものです。豊かな自然を背景に展開した狩猟・採集社会の縄文時代後期の集落や、水稲耕作による農耕社会の確立した弥生時代後期から続く古墳時代前期の集落など、各時代における集落景観の変遷が明らかになりました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部、さいたま市教育委員会並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成30年3月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 塩野谷孝志

例 言

1. 本書は、さいたま市西区に所在する大木戸遺跡第6・10～17・19・21次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。
大木戸遺跡 (№12-425)
第6次調査
さいたま市西区大字指扇3831-1他
平成19年12月3日付け 教生文第2-74号
第10次調査
さいたま市西区大字指扇3894-3他
平成22年6月26日付け 教生文第2-16号
第11次調査
さいたま市西区大字指扇3901-3
平成22年8月10日付け 教生文第2-27号
第12次調査
さいたま市西区大字指扇3900-2他
平成23年3月7日付け 教生文第2-61号
第13次調査
さいたま市西区大字指扇3975-1他
平成23年12月12日付け 教生文第2-62号
第14次調査
さいたま市西区大字指扇3887他
平成25年5月5日付け 教生文第2-6号
第15次調査
さいたま市西区大字指扇3981-1他
平成25年5月27日付け 教生文第2-14号
第16次調査
さいたま市西区大字指扇3980-1他
平成25年11月14日付け 教生文第2-46号
第17次調査
さいたま市西区大字指扇3890-1他
平成26年10月24日付け 教生文第2-46号
第19次調査
さいたま市西区大字指扇3968-2他

- 平成27年2月23日付け 教生文第2-57号
第21次調査
さいたま市西区大字指扇3980-1他
平成27年7月1日付け 教生文第2-21号
3. 発掘調査は、大宮西部特定土地地区画整理事業に先立つ埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
 4. 各事業の委託事業名は、下記のとおりである。
発掘調査事業(平成19・22・23・25～27年度)
第6次調査
「平成19年度大宮西部特定土地地区画整理事業
地内埋蔵文化財発掘調査委託」
第10・11次調査
「平成22年度大宮西部特定土地地区画整理事業
地内埋蔵文化財発掘調査委託」
第12次調査
「平成22年度大宮西部特定土地地区画整理事業
地内埋蔵文化財発掘調査委託(その2)」
第13次調査
「平成23年度大宮西部特定土地地区画整理事業
地内埋蔵文化財発掘調査業務委託」
第14・15・16次調査
「平成25年度大宮西部特定土地地区画整理事業
地内埋蔵文化財発掘調査委託」
第17・19次調査
「平成26年度大宮西部特定土地地区画整理事業
地内埋蔵文化財発掘調査委託(その2)」
第21次調査
「平成27年度大宮西部特定土地地区画整理事業
地内埋蔵文化財発掘調査委託」
整理・報告書作成事業(平成28・29年度)
「平成28年度大宮西部特定土地地区画整理事業

地内埋蔵文化財発掘調査（整理）委託」

「平成29年度大宮西部特定土地地区画整理事業
地内埋蔵文化財発掘調査（整理）委託」

5. 発掘調査・整理報告書作成事業はⅠ－3に示した組織により実施した。

第6次調査は、平成19年11月26日から平成20年1月31日まで、剣持和夫・植田雄己が担当した。

第10次調査は、平成22年6月1日から8月31日まで、細田 勝・木戸春夫が担当した。

第11次調査は、平成22年7月28日から8月31日まで、細田・木戸が担当した。

第12次調査は、平成23年3月1日から3月31日まで、細田・木戸が担当した。

第13次調査は、平成23年12月1日から平成24年3月31日まで、木戸・青木 弘が担当した。

第14次調査は、平成25年4月1日から5月31日まで、岩瀬 護・松浦 誠が担当した。

第15次調査は、平成25年5月27日から9月30日まで、細田・赤熊浩一・岩瀬・上野真由美・青木・松浦・魚水 環・滝澤 誠が担当した。

第16次調査は、平成25年9月24日から平成26年3月31日まで、昼間孝志・剣持・赤熊・青木・砂生智江・魚水が担当した。

第17次調査は、平成26年11月1日から平成27年1月31日まで、上野・松浦が担当した。

第19次調査は、平成27年2月1日から2月28日まで、上野・松浦が担当した。

第21次調査は、平成27年7月1日から12月31日まで、大谷 徹・青木・中川莉沙が担当した。

整理・報告書作成事業は、平成28年10月1日から平成30年3月31日まで実施した。このうち、平成28年10月1日から平成29年3月31日までは西井幸雄・水村雄功、平成29年4月1

日から平成30年1月31日までは大谷、2月1日から3月31日までは金子直行が担当し、平成30年3月22日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第445集として印刷・刊行した。

6. 発掘調査における基準点測量は、第6次調査を株式会社G I S関東、第10～13次調査を株式会社ビッソ測量設計、第14～17次調査を株式会社本州、第19次調査を中央航業株式会社、第21次調査を株式会社サクラプランニング・株式会社ビッソ測量設計にそれぞれ委託した。
7. 発掘調査における空中写真は、第6次調査を株式会社G I S関東、第10・11・13・15～19次調査を中央航業株式会社、第21次調査を株式会社東京航業研究所にそれぞれ委託した。
8. 巻頭図版の遺物集合写真は、小川忠博氏に委託した。
9. 出土炭化材の樹種同定と放射性炭素年代測定（AMS測定）は、株式会社バレー・ラボに委託した。
10. 発掘調査における写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は大谷が行った。
11. 出土品の整理・図版作成は、主に大谷・金子・西井・水村が行い、縄文土器について細田、陶磁器について村山 卓の協力を得た。
12. 本書の執筆は、Ⅰ－1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が、縄文時代を金子が、古墳時代を吉田 稔・福田 聖・青木が、近世を村山が、その他は大谷が行った。
13. 本書の編集は大谷・金子が行った。
14. 本書にかかる諸資料は平成30年4月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
15. 発掘調査や本書の作成にあたり、下記の機関、方々から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします（敬称略）。
- さいたま市教育委員会　さいたま市遺跡調査会
青木文彦　石原祐介　小倉 均　柿沼幹夫
笹森紀己子　柳田博之　山田尚友　吉岡卓真

凡 例

1. 大木戸遺跡全体におけるX・Yの数値は、日本測地系(旧測地系)による国土標準平面直角座標第IX系(原点北緯36° 00' 00"、東経139° 50' 00")に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位は、すべて座標北を示す。

なお、各調査区の基準座標値と北緯・東経は、次頁に表記したとおりである。

2. 調査で使用したグリッドの設定は、座標値X = -7500.000m, Y = -23400.000mを基点(A 1-A 1グリッド)とし、大宮西部特定土地区画整理事業地内全域をカバーする100×100mの大グリッドを設定し、その中を10×10mの中グリッドに細分した。
3. グリッドの表記は、100m方眼の大グリッド名を冒頭に記載し、ハイフンで結んで10m四方の中グリッド名を示した。例えばM6-F 2グリッド(第13次調査B区)のように呼称した。
4. 大グリッドの名称は、北から南方向にアルファベット(A・B・C…)、西から東方向に数字(1・2・3…)を付し、アルファベットと数字を組み合わせた。中グリッドは北西杭を基準に北から南方向にA～J、西から東方向に1～10とし、100グリッドに区分した。
5. 遺構の略号は以下のとおりである。
S J…堅穴住居跡 S B…掘立柱建物跡
S K…土壇 S E…井戸跡 S D…溝跡
S T…火葬跡 S I…堅穴状遺構
F P…が穴 S C…集石土壇 畝…畝跡
S X…性格不明遺構 P…ピット・柱穴
6. 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。ただし、一部例外もあり、それについては図中に縮尺とスケールを示した。

調査区位置図 1 : 1500

調査区全体図 1 : 400

遺構図 1 : 60 1 : 30

遺物実測図・拓影図

縄文土器・石器 1 : 4 1 : 3 2 : 3
土師器・須恵器 1 : 4 陶磁器 1 : 3
石製品 1 : 3 金属器 2 : 3
銭貨 2 : 3

7. 遺物実測図の表記方法は以下のとおりである。
・赤彩範囲(網10%) 被熱範囲(網50%)
・土器・陶磁器の2次利用範囲は拓本または断面図に「—」で示した。
8. 遺構図中の網掛けは各遺構図に内容を示した。
9. 遺構断面図に表記した水準数値は、すべて海拔標高(単位m)を表す。
10. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。
・口径・器高・底径はcm単位である。
・()内の数値は推定値を示す。
・[]内の数値は残存高を示す。
・胎土は土器中に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを記号で示した。
A : 雲母 B : 片岩 C : 角閃石 D : 長石
E : 石英 F : 軽石 G : 砂粒子
H : 赤色粒子 I : 白色粒子 J : 針状物質
K : 黒色粒子 L : その他(シャモット)
・残存率は器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。
・焼成は良好・普通・不良の3段階に分けて示した。
・色調は『新版標準土色帖』に従った。
・備考には、注記No・煤の付着・生産地・年代等を示した。
・土器・陶磁器の生産地については、胎土によって判断した。特定できないものについては、瀬戸美濃系など「系」を付けて表記した。
11. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1/50,000地形図(大宮)、さいたま市発行の1/2,500都市計画図を編集の上使用した。

12. 本書に掲載した遺構番号は、原則として調査時のものを採用した。ただし、遺構名称を変更したもの（例えばピットから土壇）や、新規

に遺構と判断したものなど、調査時とは異なる名称の遺構が一部に存在しているので、以下に一覧を示す。

各調査区の基準座標値及び北緯・東経一覧表

調査次数	区名	グリッド名	X座標	Y座標	北緯	東経
第6次調査		L 6 - I 9	-8680.000m	-22820.000m	35° 55' 17.3637"	139° 34' 49.5596"
第10次調査	A区	M 6 - F 7	-8750.000m	-22840.000m	35° 55' 15.0904"	139° 34' 48.7690"
第10次調査	B区	N 6 - A 5	-8800.000m	-22860.000m	35° 55' 13.4662"	139° 34' 47.9762"
第12次調査	A区	N 6 - D 4	-8830.000m	-22870.000m	35° 55' 12.4918"	139° 34' 47.5804"
第13次調査	B区	M 6 - F 2	-8750.000m	-22890.000m	35° 55' 15.0862"	139° 34' 46.7742"
第14次調査		L 6 - H 3	-8670.000m	-22880.000m	35° 55' 17.6832"	139° 34' 47.1648"
第15次調査		L 5 - I 2	-8680.000m	-22990.000m	35° 55' 17.3494"	139° 34' 42.7773"
第16次調査		L 5 - H 3	-8670.000m	-22980.000m	35° 55' 17.6747"	139° 34' 43.1752"
第17次調査		L 5 - I 8	-8680.000m	-22930.000m	35° 55' 17.3544"	139° 34' 45.1711"
第19次調査		N 6 - C 2	-8820.000m	-22890.000m	35° 55' 12.8453"	139° 34' 46.8904"
第21次調査	B区西側	L 6 - G 3	-8660.000m	-22880.000m	35° 55' 18.0077"	139° 34' 47.1638"
第21次調査	B区東側	L 6 - G 4	-8660.000m	-22870.000m	35° 55' 18.0085"	139° 34' 47.5628"
第21次調査	C区北側	L 5 - J 5	-8690.000m	-22960.000m	35° 55' 17.0274"	139° 34' 43.9752"
第21次調査	C区南側	M 5 - B 6	-8710.000m	-22950.000m	35° 55' 16.3792"	139° 34' 44.3763"

※旧座標系：D系 座標系原点：緯度36° 00' 00.0000" 経度139° 50' 00.0000"

遺構名等変更一覧表

次数	新	旧
6次	SE 1	SK 25
	SK 31	新規
	SK 32	新規
	SK 33	新規
	SK 34	新規
	SK 35	新規
	SK 36	新規
	SK 37	新規
	SK 38	SK 18
	SK 39	SK 30
	SD 1 a	SD 12
	鉄跡 1	SD 17 ~ 19
	鉄跡 2	SD 6 ~ 9・11・13 ~ 16
13次A区	鉄跡 1	SD 4 一部
13次D区	SK 13	S J 1 一部
16次	SK 48	SE 1
	SK 49	SE 2
	矢倉	SK 20
17次	SB 4 - 11 - P 1	L 5 I 7 - P 16
	SB 4 - 11 - P 2	L 5 I 7 - P 1
	SB 4 - 11 - P 3	L 5 I 8 - P 6
	SB 4 - 11 - P 4	L 5 I 8 - P 5

次数	新	旧
17次	SB 4 - 11 - P 5	L 5 I 7 - P 19
	SB 4 - 11 - P 6	L 5 I 7 - P 7
	L 5 H 8 - P 7	SB 4 - 10 - P 1
	L 5 H 8 - P 10	SB 4 - 10 - P 2
	L 5 H 8 - P 16	SB 4 - 10 - P 3
	SK 4 - 68	SB 4 - 10 - P 4
	L 5 H 7 - P 21	SB 4 - 10 - P 5
	L 5 H 7 - P 17	SB 4 - 10 - P 6
	L 5 H 7 - P 6	SB 4 - 10 - P 7
	L 5 H 7 - P 11	SB 4 - 10 - P 8
	SB 1 砂跡	SP 13
21次C区	SB 1 - P 1	M 5 A 5 - P 1
	SB 1 - P 2	L 5 J 5 - P 3
	SB 1 - P 3	S J 2 - P 22
	SB 1 - P 4	S J 2 - P 25
	SB 1 - P 5	S J 2 - P 15
	SB 1 - P 6	M 5 A 6 - P 17
	SB 1 - P 7	SK 41
	SB 1 - P 8	M 5 A 5 - P 15
	SB 1 - P 9	M 5 A 5 - P 16
	SB 1 - P 10	M 5 A 5 - P 12
	SB 1 - P 11	M 5 A 5 - P 13

目 次

(第1分冊)

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	2. 縄文時代の遺構と遺物	58
1. 発掘調査に至る経過	1	(1) 土壌	58
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	(2) グリッド出土遺物	58
(1) 発掘調査	2	3. 近世の遺構と遺物	60
(2) 整理・報告書作成	4	(1) 土壌	60
3. 発掘調査・報告書作成の組織	5	(2) 溝跡	64
II 遺跡の立地と環境	7	(3) 畝跡	70
1. 地理的環境	7	(4) 性格不明遺構	73
2. 歴史的環境	9	(5) ビット	73
III 遺跡の概要	15	(6) グリッド出土遺物	75
1. 事業地内の遺跡の概要	15	VI 第13次調査	77
2. 大木戸遺跡の概要	21	1. 概要	77
3. 大木戸遺跡の基本層序	24	2. 縄文時代の遺構と遺物	79
IV 第6次調査	28	(1) 堅穴住居跡	79
1. 概要	28	(2) 土壌	79
2. 縄文時代の遺構と遺物	29	(3) 集石土壌	90
(1) 土壌	29	(4) グリッド出土遺物	91
(2) グリッド出土遺物	30	3. 近世の遺構と遺物	94
3. 古墳時代の遺構と遺物	33	(1) 土壌	94
(1) 堅穴住居跡	33	(2) 井戸跡	100
4. 近世の遺構と遺物	39	(3) 溝跡	100
(1) 土壌	39	(4) 畝跡	109
(2) 井戸跡	45	(5) ビット	110
(3) 溝跡	46	(6) グリッド出土遺物	113
(4) 畝跡	50	VII 第14次調査	115
(5) ビット	50	1. 概要	115
V 第10・11・12次調査	55	2. 縄文時代の遺構と遺物	115
1. 概要	55	(1) 土壌	115

(2) グリッド出土遺物	122	(3) グリッド出土遺物	266
3. 平安時代の遺構と遺物	123	4. 近世の遺構と遺物	266
(1) 土壌	123	(1) 掘立柱建物跡	266
4. 近世の遺構と遺物	124	(2) 土壌	266
(1) 土壌	124	(3) 溝跡	268
(2) 溝跡	133	(4) ビット	272
(3) ビット	134	(5) グリッド出土遺物	273
(4) グリッド出土遺物	137	X 第19次調査	274
VIII 第15・16次調査	138	1. 概要	274
1. 概要	138	2. 近世の遺構と遺物	274
2. 縄文時代の遺構と遺物	140	(1) 土壌	274
(1) 竪穴住居跡	140	(2) 溝跡	276
(2) 炉穴	144	(3) ビット	278
(3) 埋甕	147	(4) グリッド出土遺物	280
(4) 土壌	147	(第2分冊)	
(5) 集石土壌	166	XI 第21次調査	281
(6) 遺物包含層	166	1. 概要	281
3. 古墳時代の遺構と遺物	207	2. 縄文時代の遺構と遺物	283
(1) グリッド出土遺物	207	(1) 竪穴住居跡	283
4. 近世の遺構と遺物	208	(2) 炉穴	288
(1) 土壌	208	(3) 炉跡	291
(2) 井戸跡	216	(4) 土壌	293
(3) 溝跡	216	(5) グリッド出土遺物	300
(4) 硬砂層露頭	222	3. 古墳時代の遺構と遺物	308
(5) ビット	223	(1) 竪穴住居跡	308
(6) グリッド出土遺物	223	(2) 竪穴状遺構	316
IX 第17次調査	224	(3) 土壌	316
1. 概要	224	(4) グリッド出土遺物	317
2. 縄文時代の遺構と遺物	225	4. 近世の遺構と遺物	318
(1) 竪穴住居跡	225	(1) 掘立柱建物跡	318
(2) 掘立柱建物跡	237	(2) 土壌	318
(3) 炉穴	237	(3) 井戸跡	331
(4) 土壌	237	(4) 溝跡	334
(5) グリッド出土遺物	246	(5) 火葬跡	337
3. 古墳時代の遺構と遺物	255	(6) ビット	337
(1) 竪穴住居跡	255	(7) グリッド出土遺物	338
(2) 土壌	266	XII 自然科学分析	344

1. 炭化材樹種同定	344
2. 放射性炭素年代測定	347
Ⅲ 調査のまとめ	350
1. 大木戸遺跡の調査成果	350

2. 各時代における大木戸遺跡の様相	353
--------------------------	-----

写真図版

挿 図 目 次

(第1分冊)	
第1図 埼玉県の地形	7
第2図 大木戸遺跡周辺の地形	8
第3図 周辺の遺跡(旧石器・縄文時代)	11
第4図 周辺の遺跡(弥生時代以降)	12
第5図 大宮西部特定土地区画整理事業地内の 遺跡分布	16
第6図 事業地内遺跡調査地点位置図(1)	18
第7図 事業地内遺跡調査地点位置図(2)	19
第8図 大木戸遺跡調査地点位置図	21
第9図 大木戸遺跡全体図(1)	22
第10図 大木戸遺跡全体図(2)	23
第11図 基本層序(調査地点西側)	25
第12図 基本層序(調査地点北側)	26
第13図 基本層序(調査地点南側)	27
<第6次調査>	
第14図 第6次調査区全体図	28
第15図 第26号土壌	29
第16図 第26号土壌出土遺物	29
第17図 グリッド出土遺物(1)	31
第18図 グリッド出土遺物(2)	32
第19図 第1号住居跡(1)	34
第20図 第1号住居跡(2)	35
第21図 第1号住居跡遺物出土状況	36
第22図 第1号住居跡出土遺物	36
第23図 第2号住居跡・出土遺物	37
第24図 第3号住居跡	38
第25図 第4号住居跡	39
第26図 土壌(1)	40
第27図 土壌(2)	41
第28図 土壌出土遺物	42
第29図 土壌(3)	43
第30図 第1号井戸跡・出土遺物	45
第31図 第1～3号溝跡	47
第32図 第1・2号溝跡出土遺物	48
第33図 第4・5号溝跡	49
第34図 第10号溝跡	49
第35図 第1・2号畝跡	50
第36図 ビット分布図(1)	51
第37図 ビット分布図(2)	52
<第10・11・12次調査>	
第38図 第10・11・12次調査区全体図	55
第39図 第10・11・12次調査区分割図(1)	56
第40図 第10・11・12次調査区分割図(2)	57
第41図 第10次A区第3号土壌・出土遺物	58
第42図 第10次グリッド出土遺物	59
第43図 第10次A区土壌	61
第44図 第10次B区・第11次土壌	62
第45図 第12次A区土壌	64
第46図 第12次B区土壌	64
第47図 第10次A区第1～14号溝跡	66
第48図 第10次A区第1・2号溝跡出土遺物	67
第49図 第10次B区・第11次第1・2号溝跡	67
第50図 第12次A区第1～4号溝跡	68
第51図 第12次B区第1・2号溝跡	69
第52図 第12次B区第1号溝跡出土遺物	69
第53図 第10次A区第1・2・4号畝跡	70
第54図 第10次A区第3号畝跡	71
第55図 第10次A区第3号畝跡出土遺物	71
第56図 第12次A区第1～3号畝跡	72

第57図	第10次A区第1号性格不明遺構	73
第58図	ビット分布図(1)	73
第59図	ビット分布図(2)	74
第60図	第10次A区ビット出土遺物	75
第61図	第10次グリッド出土遺物	76
<第13次調査>		
第62図	第13次調査区全体図	78
第63図	第13次調査区分割図(1)	79
第64図	第13次調査区分割図(2)	80
第65図	第13次調査区分割図(3)	81
第66図	D区第1号住居跡	82
第67図	D区第1号住居跡出土遺物	83
第68図	D区第11・13号土壌	83
第69図	D区第11号土壌遺物出土状況	84
第70図	D区第11号土壌出土遺物	85
第71図	D区第13号土壌遺物出土状況	86
第72図	D区第13号土壌出土遺物(1)	87
第73図	D区第13号土壌出土遺物(2)	88
第74図	D区集石土壌	90
第75図	D区集石土壌出土遺物	90
第76図	A・B区グリッド出土遺物	91
第77図	D区グリッド出土遺物	92
第78図	A区第1～5号土壌	94
第79図	A区第1号土壌出土遺物	95
第80図	B区第1～6号土壌	96
第81図	C区第1号土壌	97
第82図	D区第1・3・4・6～10・12号土壌	98
第83図	D区第1・6・10号土壌出土遺物	99
第84図	D区第1号井戸跡	100
第85図	A区第1～6号溝跡	101
第86図	A区第1号溝跡出土遺物	102
第87図	B区第1号溝跡	103
第88図	B区第1号溝跡出土遺物	104
第89図	C区第1号溝跡	104
第90図	C区第2号溝跡	105
第91図	C区第2号溝跡出土遺物	105
第92図	D区溝跡(1)	106

第93図	D区溝跡(2)	107
第94図	D区第1・5～7号溝跡出土遺物	108
第95図	A区第1・2号畝跡	109
第96図	A区第1号畝跡出土遺物	109
第97図	ビット分布図(1)	110
第98図	ビット分布図(2)	110
第99図	ビット分布図(3)	111
第100図	ビット分布図(4)	112
第101図	B・D区グリッド出土遺物	114
<第14次調査>		
第102図	第14次調査区全体図	115
第103図	土壌(1)	117
第104図	土壌(2)	118
第105図	土壌出土遺物(1)	119
第106図	土壌出土遺物(2)	120
第107図	グリッド出土遺物(1)	121
第108図	グリッド出土遺物(2)	122
第109図	第33号土壌	123
第110図	第33号土壌出土遺物	123
第111図	土壌(1)	125
第112図	土壌(2)	126
第113図	土壌(3)	127
第114図	土壌(4)	129
第115図	土壌出土遺物(1)	130
第116図	土壌出土遺物(2)	131
第117図	第1号溝跡	133
第118図	第1号溝跡出土遺物	134
第119図	ビット分布図	135
第120図	ビット出土遺物	136
第121図	グリッド出土遺物	137
<第15・16次調査>		
第122図	第15・16次調査区全体図	139
第123図	第1・2号住居跡	141
第124図	第1・2号住居跡遺物出土状況	142
第125図	第1号住居跡出土遺物(1)	143
第126図	第1号住居跡出土遺物(2)	144
第127図	第2号住居跡出土遺物	145

第128図 第15次第1～14号炉穴	146	第161図 第15次遺物包含層出土遺物 (12)	181
第129図 第16次第1号埋甕・出土遺物	148	第162図 第15次遺物包含層出土遺物 (13)	182
第130図 第15次第5・8・20号土壌	149	第163図 第15次遺物包含層出土遺物 (14)	183
第131図 第16次第1・7・13・15号土壌	149	第164図 第15次遺物包含層出土遺物 (15)	184
第132図 第16次第1号土壌出土遺物	150	第165図 第15次遺物包含層出土遺物 (16)	185
第133図 第16次第2号土壌	150	第166図 第15次遺物包含層出土遺物 (17)	186
第134図 第16次第8～10号土壌	151	第167図 第15次遺物包含層出土遺物 (18)	187
第135図 第16次第8号土壌遺物出土状況		第168図 第15次遺物包含層出土遺物 (19)	188
(1)	152	第169図 第15次遺物包含層出土遺物 (20)	189
第136図 第16次第8号土壌遺物出土状況		第170図 第15次遺物包含層出土遺物 (21)	190
(2)	153	第171図 第15次遺物包含層出土遺物 (22)	191
第137図 第16次第8号土壌遺物出土状況		第172図 第16次遺物包含層出土遺物 (1)	198
(3)	154	第173図 第16次遺物包含層出土遺物 (2)	199
第138図 第16次第8号土壌出土遺物	155	第174図 第16次遺物包含層出土遺物 (3)	200
第139図 第16次第9・10号土壌出土遺物	156	第175図 第16次遺物包含層出土遺物 (4)	201
第140図 第16次第16・17号土壌	156	第176図 第16次遺物包含層出土遺物 (5)	204
第141図 第16次第17号土壌出土遺物	157	第177図 第16次遺物包含層出土遺物 (6)	205
第142図 第16次第19・21・23～28・30号土壌	159	第178図 第15・16次グリッド出土遺物	208
第143図 第16次第29・31・33・34・36～41号 土壌	160	第179図 第15次土壌・第1号井戸跡	209
第144図 第16次第42～49号土壌	161	第180図 第16次土壌	210
第145図 第16次土壌出土遺物 (1)	162	第181図 第16次第1～3号溝跡 (1)	212
第146図 第16次土壌出土遺物 (2)	163	第182図 第16次第1～3号溝跡 (2)	213
第147図 第16次第32号土壌	164	第183図 第16次溝跡出土遺物 (1)	214
第148図 第15・16次遺物包含層 (1)	167	第184図 第16次溝跡出土遺物 (2)	215
第149図 第15・16次遺物包含層 (2)	168	第185図 第15・16次北側硬砂層露頭 (1)	217
第150図 第15次遺物包含層出土遺物 (1)	170	第186図 第15・16次北側硬砂層露頭 (2)	218
第151図 第15次遺物包含層出土遺物 (2)	171	第187図 第15・16次南側硬砂層露頭	219
第152図 第15次遺物包含層出土遺物 (3)	172	第188図 第15・16次ピット分布図 (1)	220
第153図 第15次遺物包含層出土遺物 (4)	173	第189図 第15・16次ピット分布図 (2)	220
第154図 第15次遺物包含層出土遺物 (5)	174	第190図 第15・16次ピット分布図 (3)	221
第155図 第15次遺物包含層出土遺物 (6)	175	第191図 第15・16次グリッド出土遺物	223
第156図 第15次遺物包含層出土遺物 (7)	176	<第17次調査>	
第157図 第15次遺物包含層出土遺物 (8)	177	第192図 第17次調査区全体図	224
第158図 第15次遺物包含層出土遺物 (9)	178	第193図 第4-12号住居跡	225
第159図 第15次遺物包含層出土遺物 (10)	179	第194図 第4-15号住居跡	226
第160図 第15次遺物包含層出土遺物 (11)	180	第195図 第4-19号住居跡	227
		第196図 第4-20号住居跡	228

第197図 第4-12・15・19・20号住居跡出土 遺物	229	第221図 第4-6A・B号住居跡	258
第198図 第4-21号住居跡(1)	230	第222図 第4-8号住居跡・出土遺物	258
第199図 第4-21号住居跡(2)・出土遺物	231	第223図 第4-9号住居跡	259
第200図 第4-22号住居跡(1)	232	第224図 第4-16号住居跡	260
第201図 第4-22号住居跡(2)	233	第225図 第4-16号住居跡遺物出土状況	261
第202図 第4-22号住居跡出土遺物	234	第226図 第4-16号住居跡出土遺物	262
第203図 第4-9号掘立柱建物跡	235	第227図 第4-17号住居跡	264
第204図 第4-1号炉穴	236	第228図 第4-17号住居跡出土遺物	265
第205図 第4-1号炉穴出土遺物	236	第229図 第4-18号住居跡	265
第206図 土塋(1)	238	第230図 第4-68号土塋	266
第207図 土塋(2)	239	第231図 グリッド出土遺物	266
第208図 第4-79・83号土塋遺物出土状況	240	第232図 第4-11号掘立柱建物跡	267
第209図 第4-81・92・93号土塋遺物出土 状況	241	第233図 第4-69・71・78号土塋	267
第210図 土塋出土遺物(1)	242	第234図 第17次・第21次C区溝跡(1)	269
第211図 土塋出土遺物(2)	243	第235図 第17次・第21次C区溝跡(2)	270
第212図 土塋出土遺物(3)	244	第236図 第17次・第21次C区溝跡出土遺物	271
第213図 グリッド出土遺物(1)	249	第237図 ビット分布図	272
第214図 グリッド出土遺物(2)	250	第238図 ビット出土遺物	273
第215図 グリッド出土遺物(3)	251	第239図 グリッド出土遺物	273
第216図 グリッド出土遺物(4)	252	<第19次調査>	
第217図 グリッド出土遺物(5)	253	第240図 第19次調査区全体図	274
第218図 第4-3号住居跡	255	第241図 第1～9号土塋	275
第219図 第4-6A号住居跡	256	第242図 第1～6号溝跡	277
第220図 第4-6B号住居跡	257	第243図 第3・5号溝跡出土遺物	278
		第244図 ビット分布図	279
		第245図 グリッド出土遺物	280

表 目 次

〈第1分冊〉		第28表	C区土壌一覧表	97
第1表	発掘調査・整理報告書作成工程表	第29表	D区第1・6・10号土壌出土遺物 観察表	99
第2表	周辺の遺跡一覧	第30表	D区土壌一覧表	99
第3表	大木戸遺跡の調査経過	第31表	A区第1号溝跡出土遺物観察表	102
〈第6次調査〉		第32表	B区第1号溝跡出土遺物観察表	104
第4表	出土石器観察表	第33表	C区第2号溝跡出土遺物観察表	105
第5表	第1号住居跡出土遺物観察表	第34表	D区溝跡出土遺物観察表	108
第6表	第2号住居跡出土遺物観察表	第35表	A区第1号畝跡出土遺物観察表	109
第7表	土壌出土遺物観察表	第36表	ビット一覧表	113
第8表	土壌一覧表	第37表	B・D区グリッド出土遺物観察表	114
第9表	第1号井戸跡出土遺物観察表	〈第14次調査〉		
第10表	第1・2号溝跡出土遺物観察表	第38表	出土石器観察表	122
第11表	ビット一覧表	第39表	第33号土壌出土遺物観察表	124
〈第10・11・12次調査〉		第40表	土壌出土遺物観察表	131
第12表	出土石器観察表	第41表	土壌一覧表	132
第13表	第10次A区土壌一覧表	第42表	第1号溝跡出土遺物観察表	134
第14表	第10次B区・第11次土壌一覧表	第43表	ビット出土遺物観察表	136
第15表	第12次A区土壌一覧表	第44表	ビット一覧表	136
第16表	第12次B区土壌一覧表	第45表	グリッド出土遺物観察表	137
第17表	第10次A区第1・2号溝跡出土遺物 観察表	〈第15・16次調査〉		
第18表	第12次B区第1号溝跡出土遺物 観察表	第46表	出土石器観察表	205
第19表	第10次A区第3号畝跡出土遺物 観察表	第47表	グリッド出土遺物観察表	208
第20表	第10次A区ビット出土遺物観察表	第48表	第15次土壌一覧表	211
第21表	第10次ビット一覧表	第49表	第16次土壌一覧表	211
第22表	第12次ビット一覧表	第50表	第16次第1・2号溝跡出土遺物 観察表	216
第23表	第10次A・B区グリッド出土遺物 観察表	第51表	第15次ビット一覧表	222
〈第13次調査〉		第52表	第16次ビット一覧表	222
第24表	出土石器観察表	第53表	グリッド出土遺物観察表	223
第25表	A区第1号土壌出土遺物観察表	〈第17次調査〉		
第26表	A区土壌一覧表	第54表	出土石器観察表	254
第27表	B区土壌一覧表	第55表	第4-8号住居跡出土遺物観察表	259
		第56表	第4-16号住居跡出土遺物観察表	263
		第57表	第4-17号住居跡出土遺物観察表	265

第58表	グリッド出土遺物観察表	266
第59表	土壌一覧表	268
第60表	第17・21次溝跡出土遺物観察表	271
第61表	ビット出土遺物観察表	273
第62表	ビット一覧表	273
第63表	グリッド出土遺物観察表	273

〈第19次調査〉

第64表	土壌一覧表	276
第65表	第3・5号溝跡出土遺物観察表	278
第66表	ビット一覧表	280
第67表	グリッド出土遺物観察表	280

写真図版目次

（第1分冊）

巻頭図版1	1	大木戸遺跡全景（合成）
-------	---	-------------

巻頭図版2

1	縄文時代後期の土器群
2	古墳時代前期初頭の土器群

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

独立行政法人都市再生機構（旧都市基盤整備公団埼玉地域支社／のち住宅都市整備公団 以下「公団」という）はさいたま市（旧大宮市）北西部で大宮西部特定土地区画整理事業を施行している。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係機関との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

本事業の計画段階における埋蔵文化財の所在及び取扱いについては、昭和63年8月17日付けし21-21号で、公団首都圏都市開発本部開発本部長（当時）より埼玉県教育委員会教育長あて照会があった。文化財保護課（当時）では、平成元年1月14日付け教文第1106号で、計画地内には埋蔵文化財包蔵地が15箇所所在することから、取扱いについて別途協議が必要である旨、回答した。

区画整理事業地内の埋蔵文化財については、公団埼玉地域支社長（当時）より平成10年7月9日付けさ25-4号で教育長あて「埋蔵文化財の所在及び取扱い」について照会があった。以後、事業の進捗に合わせ取扱いを決定するための試掘調査を文化財保護課（当時、現在は生涯学習文化財課）が実施してきた。

大木戸遺跡のうち本報告に係る部分については、地点ごとに試掘調査の依頼を受け、それぞれ記録保存のための発掘調査が必要な旨の回答を行った。

本事業に係る発掘調査に先立ち、平成12年9月1日付けで「大宮西部地区埋蔵文化財に関する協定書」が公団、埼玉県教育委員会、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（現公益財団法人埼玉

県埋蔵文化財調査事業団 以下「事業団」）の三者により締結され、発掘調査については、事業団が実施機関としてあたることとなった。発掘調査の実施にあたっては、関係機関で調査方法、調査期間等の協議が行われ、その結果、平成19・22・23・25～27年度に発掘調査が実施された。

文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知は、平成12年9月1日付けさ24-11号、平成13年3月26日付けさ24-27号で公団埼玉地域支社長から県教育長あて提出され、それに対する保護上必要な勧告は平成12年9月26日付け教生文第4-426号、及び平成13年4月9日付け教生文第4-986号で行った。また、第92条の規定による発掘調査届が事業団理事長から提出された。

発掘調査の届出に対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知番号は次の通りである。

平成19年12月3日付け	教生文第2-74号
平成22年6月26日付け	教生文第2-16号
平成22年8月10日付け	教生文第2-27号
平成23年3月7日付け	教生文第2-61号
平成23年12月12日付け	教生文第2-62号
平成25年5月5日付け	教生文第2-6号
平成25年5月27日付け	教生文第2-14号
平成25年11月14日付け	教生文第2-46号
平成26年10月24日付け	教生文第2-46号
平成27年2月23日付け	教生文第2-57号
平成27年7月1日付け	教生文第2-21号

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

今回報告する大木戸遺跡第6・10～17・19・21次調査は、大宮西部特定土地区画整理事業に先立ち、平成19・22・23・25～27年度にわたって実施した。

以下、調査年次ごとに発掘調査の経過について見ていくことにする。

平成19年度（第6次調査）

第6次調査は、平成19年11月26日から平成20年1月31日まで実施した。調査地点は遺跡範囲の中央部北寄りに位置し、国道16号西大宮バイパス線の北側、埼玉栄高校のグラウンドを見おろす、台地北縁にあたる。調査面積は1,134㎡である。

11月末に発掘事務所の設置、発掘器材の搬入、調査区の囲柵工事を実施した。12月上旬から中旬にかけて重機による表土掘削作業を行い、遺構測量用の基準点測量及びグリッド杭打設作業を実施した。並行して人力による遺構確認及び精査に着手し、1月中旬まで遺構精査・測量・写真撮影などの記録作成作業を行い、1月下旬に航空機による空中写真撮影を実施した。

1月下旬までに遺構の精査・記録作成作業を終了し、1月末にすべての作業を終了した。

平成22年度（第10・11・12次調査）

第10次調査は、平成22年6月1日から8月31日まで実施した。調査区はA・B区の2箇所で、調査面積は1,599㎡である。

第11次調査は、第10次調査B区の西側隣接地を平成22年7月28日から8月31日まで実施した。調査面積は132㎡である。

調査地点は遺跡範囲の中央部に位置し、国道16号西大宮バイパス線の南側で、台地の奥にあたる。

6月上旬に発掘事務所を設置し、発掘器材を搬入した。併せて調査区に囲柵を設置し、重機による表土掘削作業をA区からB区の順に実施した。

表土掘削作業終了後、6月中旬からは人力によ

る遺構確認作業に着手した。6月下旬、基準点測量及びグリッド杭の打設作業を行い、8月中旬まで遺構の精査・測量・写真撮影などの記録作成作業を実施した。並行して7月下旬からは第11次調査に着手した。8月中旬には航空機による空中写真撮影を実施し、8月下旬までに遺構の記録作成作業を行った。8月末にすべての作業を終了した。

第12次調査は、平成23年3月1日から3月31日まで実施した。調査地点は、第10次調査B区・第11次調査区の隣接地で、現道に境にA・B区の2箇所に分かれる。調査面積は648㎡である。

3月上旬に発掘事務所を設置した。併せて調査区に囲柵を設置し、安全対策を行った後、重機による表土掘削作業を開始した。3月上旬には基準点測量と並行して、人力による遺構確認作業を行い、遺構の精査・測量・写真撮影など記録作成作業を行った。3月中旬に高所作業車による写真撮影を実施した。3月下旬に調査区を重機で埋戻し、すべての作業を終了した。

平成23年度（第13次調査）

第13次調査は、平成23年12月1日から平成24年3月31日まで実施した。調査区はA～D区の4箇所に分けられ、調査面積は5,750㎡である。調査地点は、遺跡範囲の中央部の国道16号西大宮バイパス線の北側にA区、南側にB～D区が位置する。このうち調査面積の広いD区は、調査区を南と北に二分して反転しながら調査を行った。調査工程は、大きくA・C区、D区南側、D区北側・B区の順で実施した。

12月上旬、A区から重機による表土掘削作業を開始した。A区の表土掘削作業終了後、引き続きC区の表土掘削作業を行い、並行して、人力による遺構確認作業を行った。その後、遺構の精査・測量・写真撮影等の記録作成作業を順次進めた。

12月下旬からD区南側の表土掘削作業を開始し、12月末に表土掘削を終了した。

第1表 発掘調査・整理報告書作成工程表

発掘調査	面積	平成19年度	平成22年度	平成23年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
第6次調査 (第12地点)	1,134㎡	■							
第10次調査	1,599㎡		■						
第11次調査	132㎡		■						
第12次調査	648㎡			■					
第13次調査	5,750㎡			■					
第14次調査	398㎡				■				
第15次調査	2,203㎡				■				
第16次調査	551㎡				■				
第17次調査	502㎡					■			
第19次調査	480㎡						■		
第21次調査	1,558㎡						■		
整理・報告書作成作業								■	

1月上旬から直ちにD区南側の調査に着手し、1月下旬には調査を終了し、1月末から2月中旬にかけて重機によるD区の反転作業及びB区の表土掘削作業を行った。終了後、D区北側の調査に着手し、遺構の精査・実測・写真撮影等の記録作成作業を進めた。2月下旬には調査の終了したA区の埋戻しを行った。また、調査の進捗状況を見ながら航空機による空中写真撮影を1月下旬と2月下旬の2回実施した。

3月中旬から下旬にかけて、B・C・D区の埋戻しを重機で行い、すべての作業を終了した。

平成25年度（第14・15・16次調査）

平成25年度は、第14・15・16次調査を平成25年4月から平成26年3月にかけて実施した。

第14次調査は、平成25年4月1日から5月31日まで実施した。調査面積は398㎡である。

第15次調査は、平成25年5月27日から9月30日まで実施した。調査面積は2,203㎡である。

第16次調査は、第15次調査に継続して、隣接地を平成25年9月24日から平成26年3月31日まで実施した。調査面積は551㎡である。

第14次調査は、4月上旬に重機による表土掘

削を行い、4月中旬から遺構確認作業に着手した。遺構の精査・測量・写真撮影を進め、5月上旬には高所作業車を使用して写真撮影を行った。5月下旬に調査区を埋戻し、調査を終了した。

第14次調査終了後、台地から低地に移行する斜面地部分の第15次調査に着手した。5月末に調査区の周りに防塵ネット及びガードフェンスを設置した。重機による表土掘削を6月上旬まで実施し、並行して人力による遺構確認を行い、遺構の精査を開始した。その後、6月末から7月上旬にかけて低地部分の表土掘削作業を開始した。9月初め空中写真撮影を行い、9月中旬に調査を終了した。

引き続き、第15次調査区の東側隣接地にあたる第16次調査を9月末から10月初めにかけて実施した。台地部分の表土掘削作業終了後、11月上旬から中旬にかけて道路部分のアスファルトを撤去し、12月下旬から1月上旬にかけて、道路部分の表土掘削を行った。遺構の精査・測量・写真撮影の記録作成作業を進めた。また、第15次調査で一部露出していた硬砂層の露頭部分の測量委託を1月中旬に実施した。1月下旬には航空機による空中写真撮影を行い、1月末に調査を終了し、2月上旬

に重機により調査区を埋戻した。

平成26年度（第17・19次調査）

第17次調査は、平成26年11月1日から平成27年1月31日まで実施した。調査面積は502㎡である。

第19次調査は、平成27年2月1日から2月28日まで実施した。調査面積は480㎡である。

第17次調査は、第4地点の隣接地にあたる。11月上旬から重機により表土掘削作業を開始した。掘削終了後、人力による遺構確認を行い、順次、遺構の精査・測量・写真撮影を行った。第4地点で検出された遺構の続きの調査となった。1月中旬に空中写真撮影を実施し、1月末に調査区を埋戻し、作業はすべて終了した。

引き続き、第19次調査に着手し、2月初めに囲柵の設置、重機による表土掘削作業を行った。終了後、人力による遺構の確認、遺構精査・測量・写真撮影等を行い、空中写真撮影を2月中旬に実施し、2月下旬にすべての作業を終了した。

平成27年度（第21次調査）

第21次調査は、平成27年7月1日から12月31日まで実施した。調査面積は1,558㎡である。調査区はA・B・C区の3箇所に分かれる。調査工程は、C区、A・B区の順で実施した。

7月上旬、C区から調査に着手した。囲柵工事を行い、7月上旬から下旬にかけて重機による表土掘削作業を行った。並行して遺構の確認、遺構精査・測量・写真撮影等の記録作業を順次行い、10月中旬に航空機による空中写真撮影を実施した。10月下旬にC区の調査を終了し、引き続き、A・B区の調査に着手した。

11月初めにA区、B区の順で表土掘削作業を実施した。同時に2箇所の調査を進め、記録作成作業を実施し、12月初めに空中写真撮影を行った。12月中旬までに調査を終了し、調査区を重機で埋戻し、12月下旬に事務所を撤去し、すべての作業を完了した。

（2）整理・報告書作成

整理・報告書の作成作業は、平成28年10月1日から平成30年3月31日まで実施した。

平成28年度

平成28年10月から平成29年3月まで出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業を行った。12月から3月まで、接合した遺物の実測図を作成し、計測値・特徴等を記録した。1月から3月まで、遺物実測図のトレースを行い、必要に応じて拓本を採った。また、3月に遺物の写真撮影を行い、写真図版を作成した。

同時に、発掘調査で記録した遺構の断面図や平面図等を照合し、修正を加え第二原因図を作成した。その後、第二原因図をスキャナーでコンピューターに取り込み、画像編集ソフトを用いて遺構ごとにトレースし、土層説明等を組み込んで、印刷用の版下とした。

平成29年度

平成29年4月から9月まで出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業を行った。接合・復元を終了した遺物の中から特徴的な遺物を抽出し、遺物実測図や拓本作業を行った。遺物実測図が完成したもののから順次トレース作業を行うとともに、遺物図の版下を作成した。遺物写真は11月に撮影し、遺構・遺物写真図版を作成した。

同時に、発掘調査で記録した図面は4月から整理を行い、7月まで第二原因図を作成した。第二原因図は完成したもののから順次トレース・版下作成を11月まで行った。6月から整理の終了した調査地点の原稿を執筆し、併せて割付・編集作業を行った。1月末に原稿を印刷業者に入稿した。

報告書は、2月上旬から3月上旬にかけて3回の校正を経て印刷を行い、3月22日に事業団報告書第445集『太木戸遺跡IV』を刊行した。

なお、図面や写真などの記録類や遺物は、3月に整理・分類のうえ、埼玉県文化財収蔵施設の収蔵庫へ仮収納した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成19年度（発掘調査）

理 事 長	刈 部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	岸 本 洋 一	調 査 部 長	村 田 健 二
総務部		調査部副部長兼資料活用部副部長	磯 崎 一
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志	主 事	植 田 雄 己
総 務 課 長	松 盛 孝 孝		
主幹兼企画課長	鷗 持 和 夫		

平成22年度（発掘調査）

理 事 長	藤 野 龍 宏	調査部	
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	調 査 部 長	小 野 美代子
総務部		調 査 部 副 部 長	昼 間 孝 志
総 務 部 副 部 長	金 子 直 行	調 査 第 二 課 長	細 田 勝
総 務 課 長	田 中 雅 人	主 査	木 戸 春 夫

平成23年度（発掘調査）

理 事 長	藤 野 龍 宏	調査部	
常務理事兼総務部長	根 本 勝	調 査 部 長	小 野 美代子
総務部		調 査 部 副 部 長	鷗 持 和 夫
総 務 部 副 部 長	金 子 直 行	調査監兼調査第一課長	富 田 和 夫
総 務 課 長	矢 島 将 和	主 査	木 戸 春 夫
		主 事	青 木 弘

平成25年度（発掘調査）

理 事 長	中 村 英 樹	調査部	
常務理事兼総務部長	大 嶋 紳一郎	調 査 部 長	昼 間 孝 志
総務部		調 査 部 副 部 長	鷗 持 和 夫
総 務 部 副 部 長	富 田 和 夫	調査監兼調査第一課長	細 田 勝
総 務 課 長	藤 倉 英 明	調査監兼調査第二課長	赤 熊 浩 一
		主 査	岩 瀬 譲
		主 査	上 野 真由美
		主 事	青 木 弘
		主 事	松 浦 誠
		主 事	砂 生 智 江
		主 事	魚 水 環
		主 事	滝 澤 誠

平成26年度（発掘調査）

理 事 長	樋 田 明 男	調 査 部	
常務理事兼総務部長	大 嶋 紳一郎	調 査 部 長	昼 間 孝 志
総務部		調 査 部 副 部 長	富 田 和 夫
総 務 部 副 部 長	瀧 瀬 芳 之	主幹兼調査第二課長	木 戸 春 夫
総 務 課 長	藤 倉 英 明	主 査	上 野 真由美
		主 事	松 浦 誠

平成27年度（発掘調査）

理 事 長	樋 田 明 男	調 査 部	
常務理事兼総務部長	木 村 博 昭	調 査 部 長	金 子 直 行
総務部		調 査 部 副 部 長	富 田 和 夫
総 務 部 副 部 長	瀧 瀬 芳 之	主幹兼調査第二課長	田 中 広 明
総 務 課 長	安 田 孝 行	主 幹	大 谷 徹
		主 事	青 木 弘
		主 事	中 川 莉 沙

平成28年度（報告書作成）

理 事 長	塩野谷 孝 志	調 査 部	
常務理事兼総務部長	木 村 博 昭	調 査 部 長	金 子 直 行
総務部		調 査 部 副 部 長	細 田 勝
総 務 部 副 部 長	黒 坂 禎 二	主幹兼整理第二課長	山 本 靖
総 務 課 長	曾 川 浩 二	主 幹	西 井 幸 雄
		主 事	水 村 雄 功

平成29年度（報告書作成）

理 事 長	塩野谷 孝 志	調 査 部	
常務理事兼総務部長	川 目 晴 久	調 査 部 長	赤 熊 浩 一
総務部		調査部副部長兼整理第二課長	吉 田 稔
総 務 部 副 部 長	黒 坂 禎 二	主幹兼整理第一課長	大 谷 徹
総 務 課 長	曾 川 浩 二	主 任 専 門 員	金 子 直 行

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

大木戸遺跡は、JR川越線西大宮駅の北に広がる旧石器時代から近世にわたる複合遺跡である。さいたま市北西部の西区指扇に所在し、大宮台地の西縁にあたる。かつては屋敷林を備えた旧家と畑の混在する景観が周辺に広がっていたが、現在はさいたま市西部の複合拠点としての新しい街づくりが大きく進展している。

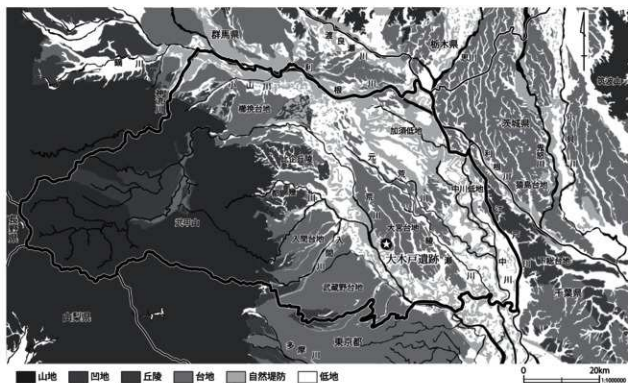
埼玉県の地形を俯瞰してみると、起伏の有無により大きく三つの地形環境に分けることができる（第1図）。すなわち、盆地と周辺の山地からなる秩父地域、それに連なる丘陵と武蔵野面に相当する台地からなる中部地域、荒川・中川両低地帯と立川面の低台地が展開する東部地域（いわゆる埼玉平野）である。

大宮台地は、埼玉平野の中央に位置する荒川と中川の両低地に挟まれた南北約25km、東西約18kmの低台地である。その中心を貫流する元荒川を境

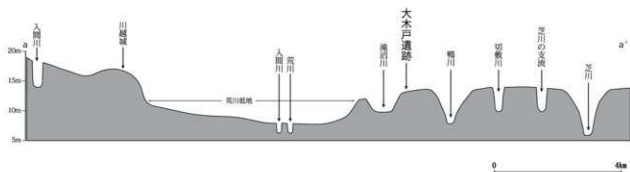
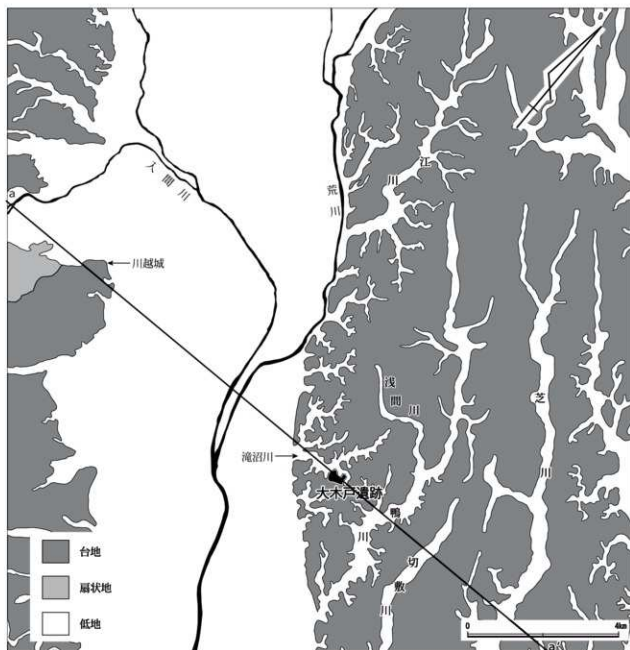
として西側に大宮主台と安行支台、東側は蓮田・岩槻・白岡・慈恩寺の各支台に大別される。標高は大宮主台北方の北本市高尾周辺が最も高く、関東造盆地運動の影響により北と東に向かって緩やかに傾斜している。そのため、荒川低地に面する西側縁辺部は明瞭な崖線が見られるのに対し、東側は低地との比高差がほとんどなく、崖線が不明瞭なまま低地へと移行している。

大木戸遺跡は、大宮台地西縁で荒川に流れ込む鴨川と江川の中間に位置し、滝沼川によって樹枝状に開析された標高約15.5mの台地上に立地する。清河寺付近を水源に南流してきた滝沼川が、大きく流れを西に変える地点に位置し、現在の荒川本流までの距離は約3.2kmである。

遺跡の南西約3.3kmの地点で荒川と入間川が合流し、対岸は川越台地の東端にあたる。荒川を挟んだ台地間の距離はおよそ6kmである（第2図）。



第1図 埼玉県の地形



第2図 大木戸遺跡周辺の地形

2. 歴史的環境

大木戸遺跡（1）の位置する大宮台地周辺には、旧石器時代から近世に至る遺跡が数多く分布している（第3・4図）。

旧石器時代

大宮台地における旧石器時代の登録遺跡は、およそ250箇所にのぼる。ほとんどが後期旧石器時代後半の遺跡で、A T降灰以前の前半期の遺跡は極端に少ない。

後期旧石器時代後半期の岩宿Ⅱ期（武蔵野台地第Ⅴ～Ⅳ層下部段階）では、殿山遺跡（106）で黒曜石製のナイフ形石器と共に玉髄製の国府型ナイフ形石器が複数出土している。天沼遺跡（122）や西大宮バイパス№4～6遺跡（16・17・1）でも、横長剥片を素材とした国府型ナイフ形石器に類似する製品が出土している。

これに対し、砂川期及びナイフ形石器終末期（武蔵野台地第Ⅳ層上部）の遺跡は、鴨川や流沼川、中堀川などの中小河川によって開析された台地内陸に分布している。前戸崎遺跡（103）からはナイフ形石器や挟入削器等、チャート製の石器群が出土しており、剥片類と石核の接合資料が注目される。在家遺跡（112）では、複数の石器集中が検出され、黒曜石やガラス質黒色安山岩からなるナイフ形石器・槍先形尖頭器・削器・彫器等多様な石器が出土している。B-53号遺跡（39）からも石器集中が1箇所検出されている。

こうした遺跡分布の様相の中、後期旧石器時代前半の遺跡群が流沼川流域に集中して発見されていることは特筆される。西大宮バイパス№5遺跡（17）では、ガラス質安山岩を主体とする石器群に台形様石器が伴って出土している。同№6遺跡（1）では、ガラス質安山岩の剥片類や石核の接合資料が出土している。清河寺前原遺跡（12）では、台形様石器を多数含む黒曜石主体の石器群が発見されており、大宮台地で最初に人が住み始めた場所のひとつと考えられている。

縄文時代

草創期の遺跡は数少ないものの、西大宮バイパス№4遺跡（16）では、栃木県高原山産と推定される黒曜石製の槍先形尖頭器と未製品が直径1.5mの範囲に7点がまとまり、その北東に約2m離れて1点出土している。他の石器群からは明確に分布域が分かれており、その出土状況から単独の埋置遺構（デポ）と考えられている。その他にも大丸山遺跡（61）からは、撚糸文を横位施文した多縄文系の土器が出土しており、縄文時代の最初の段階から人々の足跡が残されている。

早期の遺跡では、大丸山遺跡（61）で撚糸文系と押型文系土器群が、西大宮バイパス№4遺跡（16）で撚糸文系・沈線文系・押型文系土器群の良好な資料が出土しているが、遺跡の分布は全体的に希薄で、かつ住居跡も認められないことから、遊動性の高い生活様式であったと想定される。

早期末の本遺跡周辺では、古入間湾の海進とともに地点貝塚が多く形成されている。その中には学史的にも貴重な調査例も知られている。

昭和3年（1928）には、大山史前学研究所による縄文土器編年研究目的の調査として、五味貝戸貝塚（62）が発掘された。出土した資料から「指扇式」が提唱されたが、支持は広からず、その後「茅山式」に含められるようになった。

昭和45年（1970）には榎本金之丞・佐藤達夫の両氏により、縄文海進の上限を明らかにする目的で平方貝塚（121）が発掘されている。貝層は淡水産のヤマトシジミを主体とし、鹹水産のハイガイ、マガキ、ハマグリなどが含まれ、出土土器は茅山上層式と花積下層式をつなぐものとして注目された。早期末の地点貝塚としては、薬師耕地前遺跡（124）があり、住居跡の覆土から貝ブロックが検出されている。また、殿山遺跡（106）や稲荷台遺跡（123）では、この時期の住居跡が検出されている。こうした定住的な集落の形成が見

られ始める一方で、西大宮バイパス№.5 遺跡 (17) やB-53 遺跡 (39)、下加遺跡 (48) などのように、炉穴のみが発見される遺跡も多い。

この地域における貝塚の形成は、前期前半にも継続しているものの、大宮台地東部の綾瀬川流域や荒川対岸の武蔵野台地に比べるとその数は極端に少なく、貝塚の形成は停滞してしまう。しかし、その一方で比較規模の大きな集落の展開も見られるようになる。箕輪Ⅱ遺跡 (115) では、花積下層式期の住居跡、琵琶島貝塚 (56) では、関山式期の住居跡 2 軒、稲荷台遺跡 (123) と宿北Ⅱ遺跡 (116) でも関山式期の住居跡が調査されている。

前期の後半では、氷川遺跡 (102) で関山式期に加えて諸磯 a 式期の住居跡が 5 軒、上加遺跡 (40) と指扇下戸遺跡 (60) では、諸磯 b 式期の住居跡が検出されている。また、荒川低地を隔てた対岸の鷺森遺跡 (130) では、諸磯 a・b 式期の土壌墓群を伴う集落跡が調査されている。しかし、前期終末から中期初頭になると、在家遺跡 (112) や高木道下遺跡 (5) で住居跡が検出されているが、台地上での活動の痕跡はやや希薄である。

中期中葉になると、関東地方の他地域と同じように、遺跡数や住居跡軒数の増加が顕著となる。勝坂式期から加曾利 EⅢ式期の住居跡が 40 軒検出された、鴨川流域の下加遺跡 (48) が、周辺では最も規模の大きな集落と考えられる。その他に雨沼Ⅰ遺跡 (120) では、同時期の住居跡が 8 軒、西大宮バイパス№.4 遺跡 (16) では、勝坂式期の住居跡、指扇下戸遺跡 (60) では、同時期の土壌、前戸崎遺跡 (103) と白銀宮腰遺跡 (86) では、加曾利 EⅢ式期の住居跡がそれぞれ調査されている。

中期後葉から後期前葉にかけては、この地域に遺跡が集中する時期で、特徴的な柄鏡形住居跡が数多く検出されている。B-53 号遺跡 (39) では、中期の住居跡と後期初頭の柄鏡形住居跡が検出され、包含層から特異な瓢形注口土器が出土した。西大宮バイパス№.5 遺跡 (17) では、後期初

頭の柄鏡形住居跡 2 軒とともに石鐮の製作工程を復元できる良好な資料が出土している。下加遺跡 (48) では、大型石棒がまとまって出土した住居跡を含む加曾利 E 式終末期から埴之内式期にかけての柄鏡形住居跡 10 軒が調査されている。

後期前葉の集落跡は、他にも多く調査されている。指扇下戸遺跡 (60) では柄鏡形住居跡を含む集落、天沼遺跡 (122) では、住居跡・集石・土壌等が検出されている。区画整理事業地内でも、大木戸遺跡 (1) をはじめ、高木稲荷前遺跡 (8) や高木道下遺跡 (5) で柄鏡形住居跡が検出されている。

後期後半から晩期にかけては遺跡数が激減してしまうが、一つ一つの遺跡 (集落) が拠点的な性格を帯びるようになる。代表的な遺跡として、奈良瀬戸遺跡 (26) が挙げられる。また、在家遺跡 (112) では晩期終末期の大洞 A 式・千網式期の住居跡と土壌が検出されている。

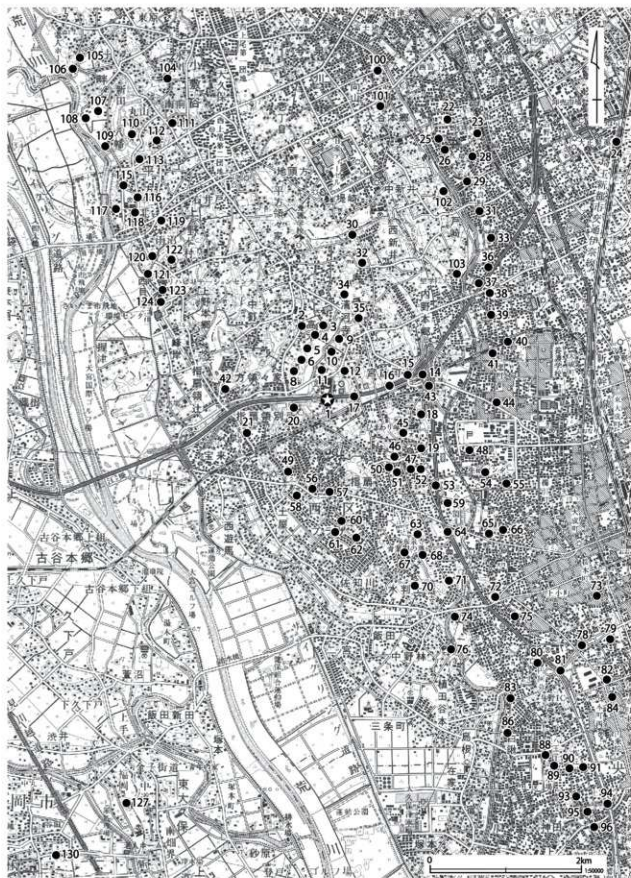
弥生時代

周辺地域における弥生時代の遺跡は少ない。中期後半では、内道西遺跡 (95) と諏訪坂遺跡 (96) から宮ノ台式期の住居跡が検出されている。

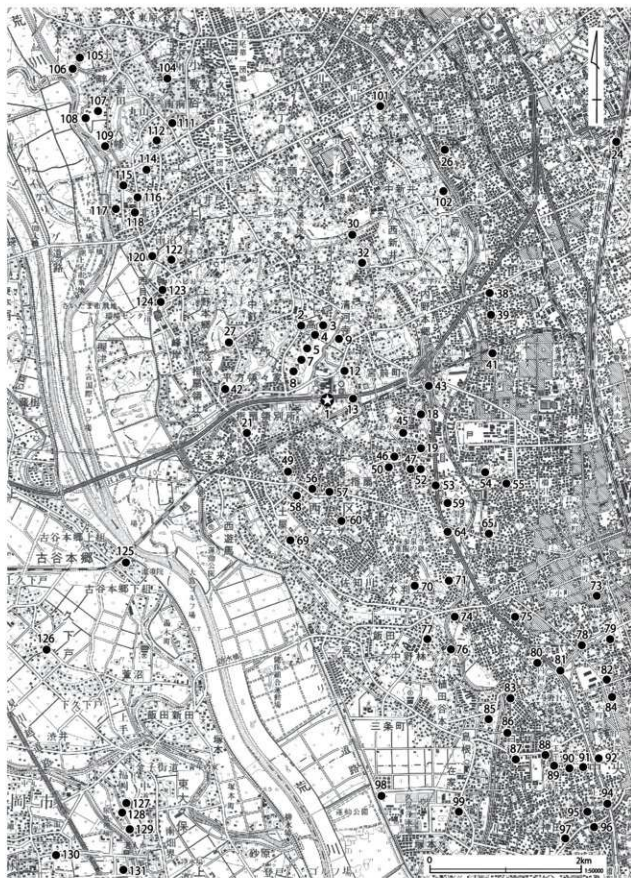
続く後期初頭から前半の遺跡は、大宮台地周辺では皆無に等しく、遺跡の空白地域となる。大きな気候変動がその要因であったと考えられている。後期後半には、自然堤防上の土屋下遺跡 (69) で、住居跡 49 軒・方形周溝墓 1 基などが検出され、大規模な環濠集落が形成されている。さらに、下流域の大久保条里遺跡 (98) に隣接する神田天神後遺跡、外東遺跡でも後期の住居跡や方形周溝墓が調査されている。

古墳時代

弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて、大宮台地西縁の荒川低地に面する台地上には、雲雀遺跡 (105)・畔古遺跡 (108)・稲荷台遺跡 (123) などの大規模な集落が出現する。それに呼応するように薬師耕地前遺跡 (124)・殿山遺跡 (106)



第3図 周辺の遺跡（旧石器・縄文時代）



第4図 周辺の遺跡(弥生時代以降)

第2表 周辺の遺跡一覧(第3・4図)

番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期
1	大木戸 (西大宮 BP №6)	旧、縄、弥、古、 平、中、近	46	C-65号	縄、平	90	苗塚	縄、古
2	高木永川	縄、近	47	C-62号	縄、古	91	与野西	縄、古、平
3	高木小川	縄、古	48	下加	旧、縄	92	寺田	奈
4	高木道下北	縄、中	49	C-45号	時期不明、塚	93	相野谷1号	旧、縄
5	高木道下	旧、縄、中、近	50	C-64号	縄、平	94	南上峰	縄、古、平
6	高木稲荷下	縄	51	C-63号	縄	95	内道西	旧、縄、弥、平
7	福田館跡	近	52	C-15号	縄、古、平	96	瀬訪坂	縄、弥、古
8	高木稲荷前	旧、縄、近	53	八幡耕地	縄、古	97	上大久保新田	弥、古、中、近
9	清河寺西原	縄、古	54	下加貝塚	縄、弥、古	98	大久保美里	平、中
10	清河寺丸山	縄	55	B-60号	縄、古、平	99	宿宮前	弥、古、奈、平、中
11	C-98号	縄	56	猪懸島貝塚	縄、古	100	向山	縄
12	清河寺前原	旧、縄、古	57	C-73号	縄、古	101	後耕地	縄、中、近
13	大塚古墳	古	58	猪懸島古墳	縄、古、近	102	水川	縄、奈、平
14	西大宮 BP №1	旧、縄	59	C-12号	縄、古、平	103	前戸崎	旧、縄
15	西大宮 BP №2	旧、縄	60	指扇下戸	縄、中	104	西通1	縄、中、近
16	西大宮 BP №4	旧、縄	61	大丸山	縄	105	雲雀	縄、古、近
17	西大宮 BP №5	旧、縄	62	五味貝戸貝塚	縄	106	殿山	旧、縄、古
18	C-16号	縄、古	63	C-59号	縄	107	八幡 (江川山古墳)	縄、古
19	C-66号	縄、平	64	下手	縄、弥、古	108	畔吉	旧、縄、古
20	C-39号	旧、縄	65	B-61号	縄、平	109	畔吉貝塚	縄、古
21	蔵沼	縄、弥、古、平	66	B-92号	縄	110	平方丸山	縄
22	B-37号	縄	67	C-58号	縄	111	小林	縄、平
23	B-44号	旧、縄	68	青葉園東	縄	112	在家	旧、縄、古、中、近
24	三番耕地	縄、古、近	69	土屋下	弥、奈、平	113	小塚II	旧、縄
25	山王	縄	70	原	旧、縄、弥、古、 奈、平	114	小塚	古
26	奈良瀬戸	縄、平	71	C-7号	縄、弥、平	115	箕輪II	縄、古
27	中釘陣屋跡	近	72	並木貝塚	縄	116	宿北II	縄、古、中、近
28	B-43号	縄	73	B-70号	縄、弥	117	箕輪I	旧、縄、中、近
29	B-45号	縄	74	水判土曜の内	縄、弥、古、奈、 平、中、近	118	宿北I	縄、古
30	C-93号	縄、古、平	75	若花	縄、弥、古、平	119	東谷	縄
31	B-46号	縄	76	林光寺	縄、古、奈、平	120	雨沼I	旧、縄、弥、古、 中、近
32	C-92号	縄、古、平	77	中野林袋	弥、奈、中	121	平方貝塚	縄
33	B-47号	縄	78	小村田	縄、近	122	天沼	旧、縄、古、中、近
34	C-23号	縄	79	B-67号	縄、弥、近	123	稲荷台	縄、弥、古、奈、平
35	天王	縄	80	山王東4号	縄、平	124	薬師耕地前	縄、弥、古
36	西谷裏	縄	81	小村田西	縄、近	125	瀬頭院	中
37	日進西谷	縄	82	小村田東	縄、古、平、中	126	前田	奈、平
38	B-50号	縄、平	83	西浦1号	縄、古、平	127	天神廻	縄、古
39	B-53号	旧、縄、古	84	与野東	縄、弥、古、平	128	城山	中、近
40	上加	縄	85	根切	古、平、中	129	川袋	古、平、中
41	B-55号	縄、古	86	白銀宮腰	旧、縄、古、奈、平	130	鷺森	縄、平、中、近
42	辻	縄、古	87	殿ノ前	古	131	伊佐島	弥、平、中、近
43	宮前	縄、平	88	八王子前原西	旧、縄、奈、平			
44	B-56号	縄	89	八王子前原	縄、平			
45	C-67号	縄、平						

では方形周溝墓群の造営が認められる。また、地域的な統合の進展を背景として、江川山古墳(107)や殿山古墳(106)などの前・中期の古墳が築造されている。

薬師耕地前遺跡では、古墳時代前期の住居跡と7基の方形周溝墓が検出されている。方形周溝墓の主体部からは、ガラス小玉・管玉・鉄剣等が出土し、周溝からは底部穿孔された壺形土器も出土している。薬師耕地前遺跡の北側に近接する稲荷台遺跡では、古墳時代前期の住居跡が多数検出されている。

荒川低地を眼下に望む殿山遺跡では、方形周溝墓が4基検出され、隣接して直径約40mの円墳である殿山古墳が所在する。殿山古墳の周溝からは、壺・埴などの土器と鉄鎌が出土しており、5世紀初頭の築造と推定され、方形周溝墓から古墳への築造過程をトレースすることができる。

近隣には、2面の倭鏡を出土した前期古墳の江川山古墳が所在し、威信財の授受に畿内王権との結びつきの強さが窺われる。

同じく大木戸遺跡(1)でも、弥生終末期から古墳出現期にかけて営まれた4基の方形周溝墓と台地上に展開する同時期の複数の住居跡群が調査され、集落の実態が明らかにされている。

中期から後期にかけては再び遺跡数が減少し、集落の形成はやや低調となる。周辺では、高木稲荷前遺跡(8)をはじめ、雨宮I遺跡(120)・宿北II遺跡(116)・天沼遺跡(122)など、6世紀末から7世紀にかけて、数軒程度で構成された小規模な集落が台地内陸部に点在している。

古墳群の分布は、荒川と鶴川との合流点付近に集中し、植水古墳群・側ヶ谷古墳群・大久保古墳群などが、河川沿いに連続して営まれている。

奈良・平安時代

根切遺跡(85)は旧入間川の流路によって形成された自然堤防上に位置し、奈良・平安時代の住居跡や掘立柱建物跡のほか、大規模な運河遺構な

ども検出されている。周辺の宿宮前遺跡(99)からは「川津」と墨書されている土器が住居跡から出土しており、付近に足立郡の郡津などの官衙施設が存在した可能性を示唆する。

中・近世

周辺には、中世開基と伝わる寺院が点在している。中でも清河寺は室町時代初頭に建立された古刹で、足利基氏開基とされ、足利氏や大田氏関係の文書が残されている。また、法願寺跡と伝えられる高木地蔵堂には、鎌倉時代から室町時代にかけての板碑のほか、寛文四年(1664)銘の鰐口が所蔵されている。戦国期の成立と推定される市場之祭文(武州文書)には「足立郡遊馬郷指扇村市祭成之」とあり、この頃当郷は遊馬郷に含まれ、市が開催されていたことが知られる。

江戸時代に編纂された新編武蔵風土記稿によれば当郷は差扇(さしおうぎ)領に属し、差扇村と記されている。元和9年(1623)旗本山内氏は足立郡のうち差扇領三千石を与えられた。元禄2年(1689)山内氏は土佐藩山内宗家を継ぐために転出し、差扇領は上知され、以後幕末まで幕府領であった。

差扇村は赤羽(赤羽根)・増永(升永)・大西・大木戸・下郷・五味ヶ谷戸(五味貝戸)・台の7組に分かれ、それぞれに名主・組頭が置かれていた。村は滝沼川の左岸に位置し、村内を通る主要道は「川越道」と「与野道」である。「川越道」は村域の北東、清河寺村、上内野村境を通過して、大木戸の南側を抜けて川越に至っている。「与野道」は清河寺村、上内野村境を南下すると与野、北上すると上尾宿に至る道である。

区画整理事業地内の各遺跡で江戸時代の区画溝や掘立柱建物跡・土壇・井戸跡が検出されており、土地利用の変遷の実態が明らかにされつつある。陣屋として地域支配の拠点であったと目される福田館跡(7)との関連性など、地域史を復元する上で重要である。

III 遺跡の概要

1. 事業地内の遺跡の概要

大宮西部特定土地区画整理事業は、独立行政法人都市再生機構により、平成10年度から事業が開始された。大宮西部地区は、JR川越線に沿った一帯の秩序ある発展のための、多様な都市機能をもつ新市街地として位置づけられている。東京都心から北西に約30km、大宮の中心部からは約4kmに位置する約115haの地区である。

国道16号西大宮バイパス線やJR川越線西大宮駅の開設により、便利さや快適性を備えた魅力ある都市機能と、ゆとりやうるおいをもたらす自然環境との調和を目指した街づくりが進められている。

事業地内の遺跡

当事業地内の中央を貫流する滝沼川を境として、右岸には高木氷川、高木小明、高木道下北、高木道下、高木稲荷下、福田館跡、高木稲荷前遺跡の7遺跡、左岸には清河寺西原、清河寺丸山、清河寺前原、C-98号、大木戸、西大宮バイパス№5遺跡、大塚古墳の7遺跡、合計14箇所の遺跡の所在が確認されている（第5図）。いずれも滝沼川、もしくはそれに注ぐ小支谷に面して立地する。

これまでに、当事業団が本事業に伴って調査した遺跡は、大木戸遺跡（事業団報告書355・405集）、清河寺前原遺跡（同366集）、高木道下遺跡・高木道下北遺跡（同406集）、高木稲荷前遺跡・高木氷川遺跡（同427集）の6遺跡である。

調査の方法とグリッドの設定

区画整理事業地内の発掘調査は、平成12年度の大木戸遺跡第2次調査を皮切りに、当事業団が継続的に調査を実施し、平成27年度の第20・21次調査をもって終了した。

まず調査にあたり、事業地内全体を覆うようにグリッドを設定した。グリッドは日本測地系（旧測地系）のX=-7500.000m、Y=-23400.000mを基準（A1-A1グリッド）に、100×100m

の大グリッドを設定し、北から南にA・B・C…、西から東に1・2・3…として設定した。

さらに、大グリッドの中を10×10mの中グリッド（基本グリッド）とし、北から南にA～J、西から東に1～10とし、100区画に分割した。従って、事業地内のグリッド表記は大グリッドと中グリッドを併記した形となる。具体的には、大グリッドと中グリッドをハイフンで連結した形態で表記した。例えば、L5-G3グリッドである。

周辺の地形と景観

事業地は大宮台地西縁部に位置し、荒川に流れ込む滝沼川によって樹枝状に開析された台地部と滝沼川の低地（宝来谷底平野）が織りなす、起伏に富んだ地形である。

木戸遺跡の所在する滝沼川左岸の方が全体に標高が高く、内陸部まで平坦地が広がっているのに対し、滝沼川右岸では、南側の高木稲荷前、高木道下遺跡の所在する台地先端部の方が標高が高く、北側の中釘川の谷奥に向かって緩やかな勾配をもっている。

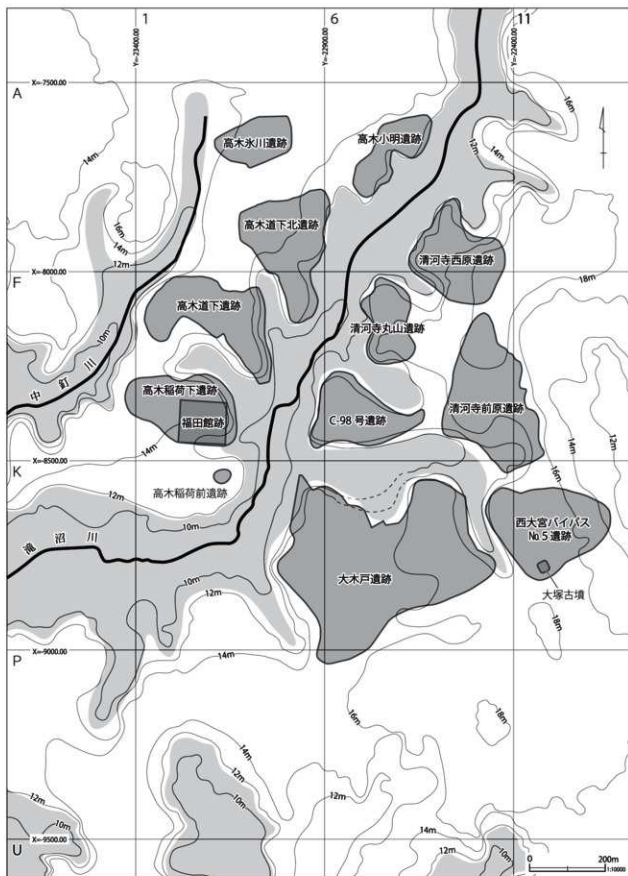
既往調査の概要

本事業に伴って調査された6遺跡の概要は、次のとおりである。

大木戸遺跡

大木戸遺跡は滝沼川左岸、清河寺前原遺跡の南側に位置する。遺跡範囲は、南北約530m、東西約600mにおよぶ、当事業地内最大規模の遺跡である。昭和61年の大宮市遺跡調査会（当時）による西大宮バイパス№6遺跡の調査（第1次調査）が最初に実施され、その後、当事業団が平成12年から平成27年まで、21回にわたり調査を継続的に実施してきた。

既報告分（第2～5次調査：西井ほか2008、第7～9次調査：新屋ほか2013）の調査では、旧石



第5図 大宮西部特定土地区画整理事業地内の遺跡分布

器時代の石器集中7箇所、縄文時代早期の炉穴23基、中期後半から後期前半の住居跡46軒、掘立柱建物跡3棟、集石土壇13基、土壇222基、弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡19軒、方形周溝墓4基、土壇1基、中・近世の掘立柱建物跡28棟、土壇549基、溝跡150条、井戸跡7基が検出された。

旧石器時代では、第1次調査で台地の東西両縁部から石器集中と礫群が検出されている。また、西縁の第3地点から後期旧石器時代前半の石器群、東縁にあたる第10地点から後期旧石器時代後半期の石器群が検出されている。

縄文時代では、早期の炉穴が第1・3・7・13地点から検出されているほか、中期後半には第1・5・7地点からなる東側エリアで加曾利EⅢ式期の集落の形成が始まり、称名寺1式期まで継続する。その一方で、第3・4・13地点からなる西側のエリアでは称名寺2式期から集落の形成が始まり、堀之内1・2式、加曾利B1・B2式期を通じて集落が継続される様相が窺われる。

弥生時代後期から古墳時代前期では、第4・13地点から複数の単位住居群で構成される集落域と4基の方形周溝墓からなる墓域が検出されている。

近世では、遺跡北側に迫り出す二つの台地突出部をそれぞれ奥部の平坦な部分から切り取るような溝が東西方向に掘られ、それに伴って掘立柱建物群が見られる。この二つのグループとは別に、台地奥の第2地点から「コ」字状に柵列で囲まれた掘立柱建物群が検出されている。

清河寺前原遺跡

清河寺前原遺跡は、滝沼川左岸のやや奥まった箇所に立地している。調査は、平成12年度から平成14年度にかけて、4次にわたって実施された。調査では、旧石器時代の石器集中18箇所、縄文時代早期の炉穴25基、後期の集石土壇1基、土壇5基、近世の掘立柱建物跡1棟、土壇76基、溝跡36条が検出された。

旧石器時代では4枚の文化層を検出した。第1

文化層は槍先形尖頭器を主体とする石器群（立川ロームⅢ層）、第2文化層はナイフ形石器終末期の石器群（同Ⅲ～Ⅳ層）、第3文化層は岩宿Ⅱ期の石器群（同Ⅳ層）、第4文化層は後期旧石器時代前半の石器群（同Ⅶ～Ⅸ層）である。

第4文化層では、径15mの範囲に11箇所の石器集中が密集する環状ブロック群を検出した。出土した1,400点の石器の内1,000点は良質な黒曜石である。関東地方において黒曜石原産地との関係を検討する上で貴重な資料である。

縄文時代早期の炉穴群は、台地の南西側縁辺部に集中して25基検出されている。

近世は、第2地点で掘立柱建物跡、溝跡、土壇等の配置から、整然とした区画溝を伴う畠跡が検出され、土地利用の一端が明らかになった。

高木稲荷前遺跡

高木稲荷前遺跡は、南流してきた滝沼川が大きく荒川方面に向きを変える右岸の台地先端部に位置する。平成26年度に調査が実施され、縄文時代後期初頭の住居跡2軒、古墳時代後期終末の住居跡2軒、近世の溝跡6条、土壇38基、ピット44基が検出された。

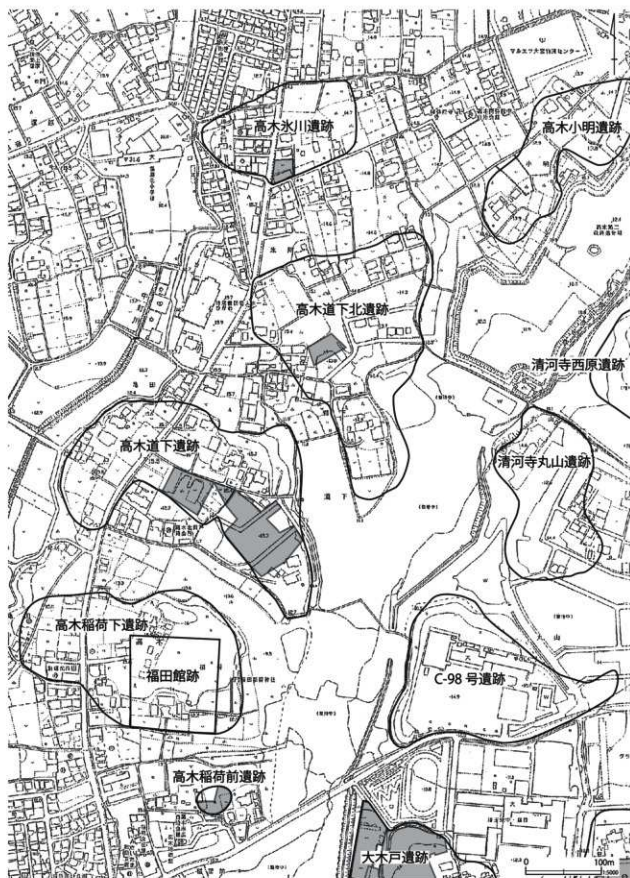
縄文時代では、埋甕を伴う柄杓形住居跡が2軒検出されている。古墳時代では、カマドを付設する住居跡が2軒検出され、カマドの袖部に補強材として土師器の長胴甕が用いられていた。

高木道下遺跡

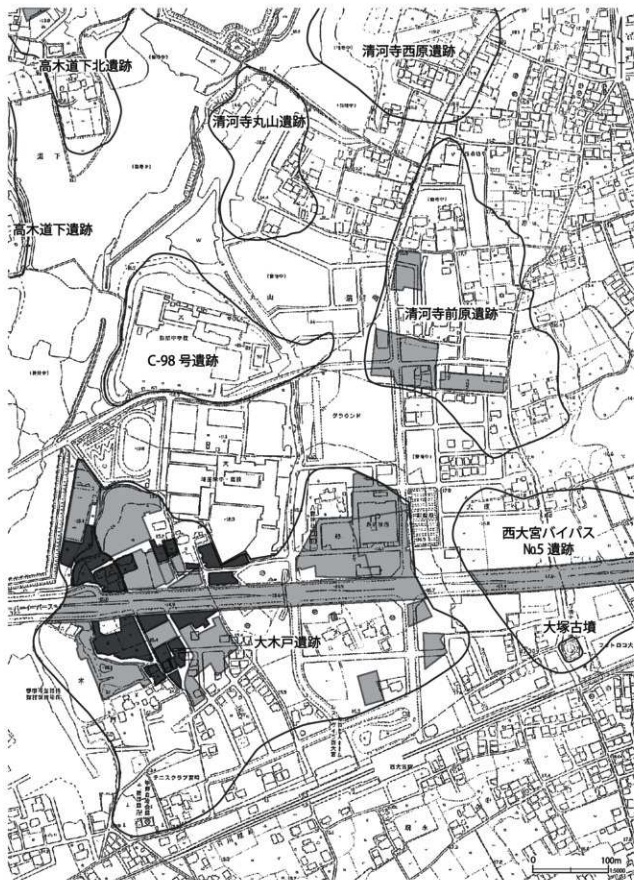
高木道下遺跡（C-99号）は、滝沼川右岸の支谷に面した台地上に位置する。平成19・20年度に調査が実施され、旧石器時代の礫群2箇所、縄文時代の住居跡10軒、埋甕1基、炉穴1基、集石土壇3基、土壇60基、中世の井戸跡4基、近世の溝跡31条、土壇52基、ピット210基が検出された。

旧石器時代では、立川ロームⅢ・Ⅳ層に相当する層位から礫群2箇所が検出された。

縄文時代の遺構は、台地中央部から前期末の住居跡が単独で検出された。中期後半の住居跡5軒



第6図 事業地内遺跡調査地点位置図(1)



第7図 事業地内遺跡調査地点位置図（2）

は、単独埋甕とともに支谷に面する台地南側縁辺部に帯状に分布していた。後期初頭から前葉の住居跡4軒は、台地南東端部の低地寄りに集中して検出された。いずれも柄鏡形住居である。

中・近世の遺構は調査区全体に広く分布している。17世紀初頭の織部平向付、志野皿などの茶陶が含まれ、遺跡の性格を考える上で注目される。

高木道下北遺跡

高木道下北遺跡は、小支谷を隔て、高木道下遺跡の北東約200mの台地上に立地する。平成18年度に調査が実施され、中世末の竪穴状遺構1基、地下式竪穴3基、溝跡6条、井戸跡2基、土壇32基、ピット222基が検出された。

遺物は15世紀後半から16世紀前半を中心とする青磁の破片、常滑焼の甕、古瀬戸や瀬戸美濃の天目茶碗、灰釉小皿、折縁鉢、播鉢などの陶磁器、かわらけ、焙烙などの在産土器、石臼、砥石、板碑などの石製品、銭貨がある。

なお、鋳造に関連した遺構は検出されていないが、土壇から鉄鍋の鋳型が出土しており、近傍での鉄製品生産が窺われる。

高木氷川遺跡

高木氷川遺跡は、滝沼川右岸の台地上に立地し、中釘川の谷奥に面する縄文時代中期の集落跡である。平成27年に調査が実施され、縄文時代中期後半の住居跡4軒、土壇3基、近世の土壇41基、ピット4基が検出された。

縄文時代では、土器片囲い炉をもつ住居跡が検出されている。また、覆土中に土器片や石器がまとまって廃棄された住居跡も見つかっている。中期後半の加曽利EⅢ式期が主体である。

この他に区画整理事業地内を横断する一般国道16号バイパス（西大宮バイパス）の建設工事に先立ち、路線内の4遺跡が大宮市遺跡調査会によって昭和58年度以降、平成5年度までの間、調査が実施された。この4遺跡のうち、事業地内には西大宮バイパス№5遺跡と現在、大木戸遺跡に名称

変更された西大宮バイパス№6遺跡が所在する。

西大宮バイパス№5遺跡

滝沼川右岸に位置し、台地奥まで湾入する谷を隔て大木戸遺跡の東側に対峙している。昭和60・62年度に調査が実施され、旧石器時代の石器集中箇所や炭化物物集中箇所のほか、縄文時代は後期初頭の柄鏡形住居跡2軒、早期の炉穴15基、集石土壇3基、土壇49基、近世の溝跡8条が検出された。

西大宮バイパス№6遺跡

大木戸遺跡の中央部を東西に横断するように、昭和61・62年度、平成5年度と3箇年にわたって断続的に調査が実施された。

旧石器時代では、遺跡の東側と西側の台地縁辺部から石器ブロックと礫群が検出されている。第Ⅲ層から第Ⅴ層に3枚の文化層が確認され、ナイフ形石器などが出土した。

縄文時代では、中期後半の住居跡3軒、後期中葉の住居跡1軒、早期の炉穴4基、土壇144基が検出された。後期中葉の住居跡は方形プランのもので、注口土器が出土している。

この他に弥生時代の住居跡1軒、近世の掘立柱建物跡4棟、土壇23基、柵列2列、溝跡16条、竪穴状遺構、ピット群が見つかっている。

以上、事業地内における既往調査の概要を見てきたが、これら以外にも本調査に至っていない遺跡が、事業地内には幾つか所在している。

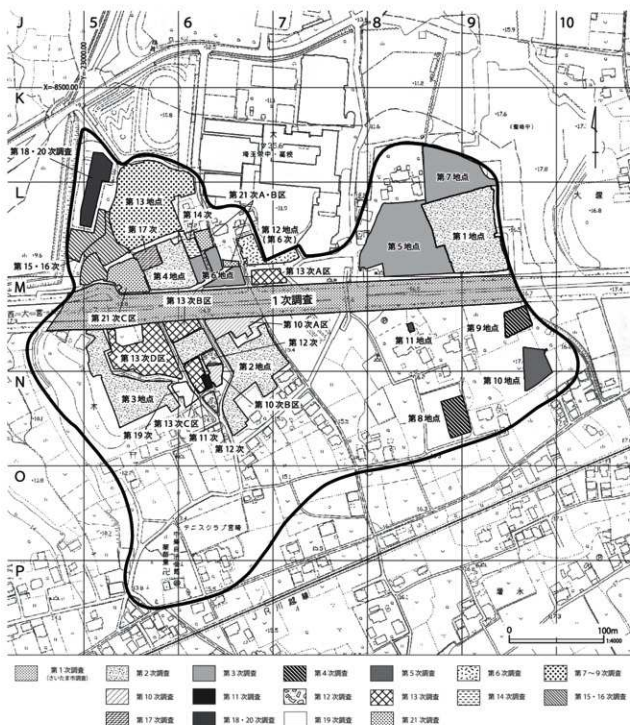
滝沼川右岸には、縄文時代・古墳時代後期の集落跡の高木小町遺跡をはじめ、縄文時代早期の炉穴が発見された高木稲荷下遺跡、江戸初期の陣屋跡の伝承を残す福田館跡が所在する。また、滝沼川左岸には縄文時代・古墳時代の集落跡の清河寺西原遺跡、同じく縄文時代の集落跡である清河寺丸山遺跡、縄文時代早期の土器片が採集されているC-98号遺跡、さらに、西大宮駅の北東約350mには、昭和33年に埼玉県指定史跡に指定されている方墳大塚古墳が所在する。

2. 大木戸遺跡の概要

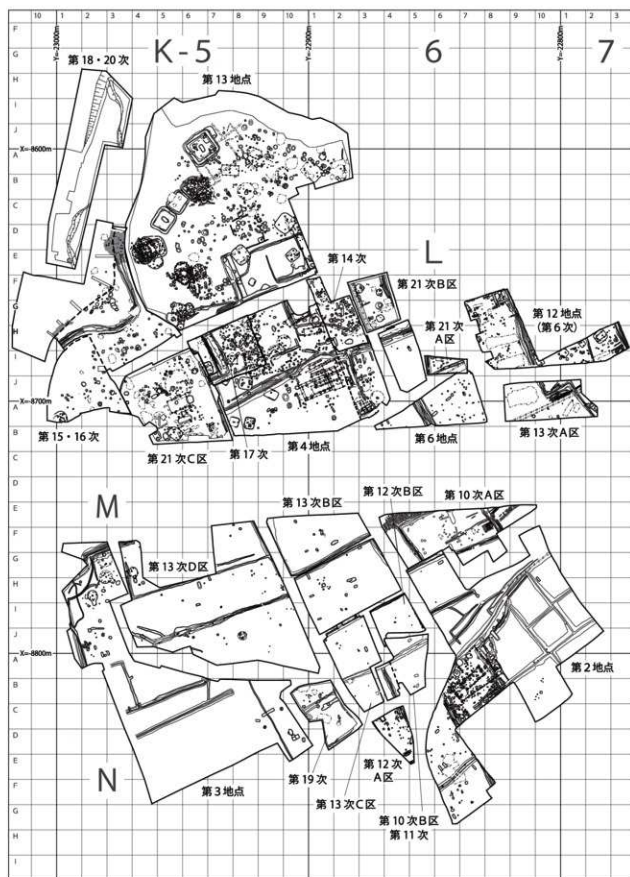
前述したように、大木戸遺跡は現在までに21次にわたって調査が実施されている。第8図にこれまでに調査の実施された調査地点位置図と、第3表に調査経過の一覧を示した。

大木戸遺跡の調査は、昭和61年の大宮市遺跡調

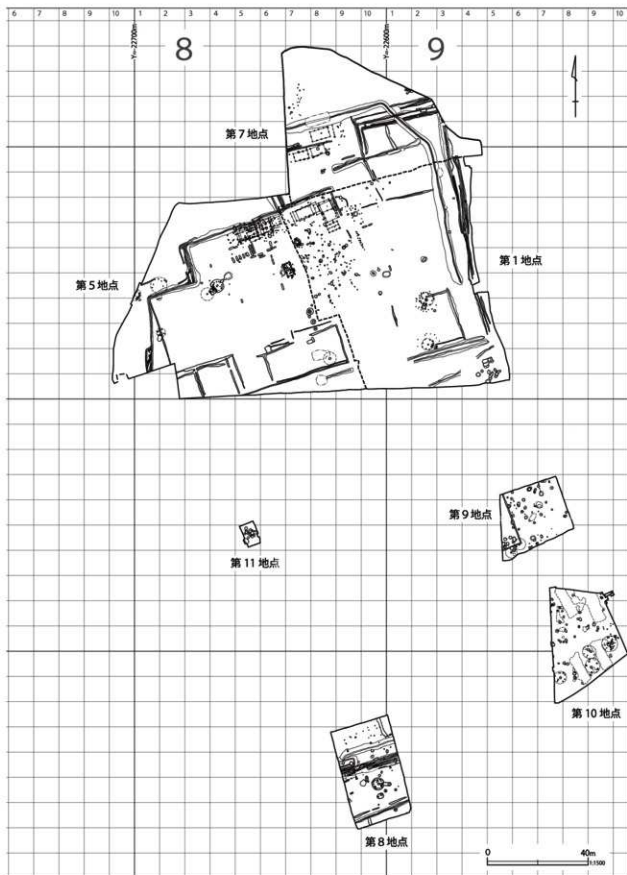
査会（当時）による西大宮バイパスNo.6遺跡の発掘調査（第1次調査）を端緒とし、その後、当事業団が大宮西部区画整理事業に伴う事前調査として、平成12年度から平成27年度にかけて継続的に調査を実施してきた。



第8図 大木戸遺跡調査地点位置図



第9図 大木戸遺跡全体図(1)



第10図 大木戸遺跡全体図(2)

第3表 大木戸遺跡の調査経過

調査回数	地点・地区名	調査年度	調査原因	調査主体者	報告書
第1次調査	一般国道16号 (西大宮バイパス)	昭和61・62年度 平成5年度	道路建設	大宮市遺跡調査会	大宮遺跡48集 (1995年)
第2次調査	第1～4地点	平成12年度	区画整理	(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	埼玉文355集 (2008年)
第3次調査	第5～7地点	平成13年度	〃	〃	〃
第4次調査	第8・9地点	平成16年度	〃	〃	〃
第5次調査	第10・11地点	平成17年度	〃	〃	〃
第6次調査	第12地点	平成19年度	〃	〃	埼玉文445集 (2018年) : 本書
第7次調査	第13地点	平成20年度	〃	〃	埼玉文405集 (2013年)
第8次調査	※第7次同一地点	平成21年度	〃	〃	〃
第9次調査	※第7次同一地点	〃	〃	〃	〃
第10次調査	A・B区	平成22年度	〃	〃	埼玉文445集 (2018年) : 本書
第11次調査	〃	〃	〃	〃	〃
第12次調査	A・B区	〃	〃	〃	〃
第13次調査	A～D区	平成23年度	〃	〃	〃
第14次調査	〃	平成25年度	〃	(公財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団	〃
第15次調査	〃	〃	〃	〃	〃
第16次調査	〃	〃	〃	〃	〃
第17次調査	〃	平成26年度	〃	〃	〃
第18次調査	※第20次同一地点	〃	〃	〃	埼玉文444集 (2018年)
第19次調査	〃	〃	〃	〃	埼玉文445集 (〃) : 本書
第20次調査	※第18次同一地点	平成27年度	〃	〃	埼玉文444集 (〃)
第21次調査	A～C区	〃	〃	〃	埼玉文445集 (〃) : 本書

【報告書】

- 1 大宮市遺跡調査会 1995『西大宮バイパスNo.6 遺跡』大宮市遺跡調査会報告 第48集
- 2 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2008『大木戸遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第355集
- 3 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2013『大木戸遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第405集
- 4 (公財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2018『大木戸遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第444集
- 5 (公財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2018『大木戸遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第445集 : 本書

本書は、既報告の第2～5次調査及び第7～9次調査分と、並行して整理・報告書作成事業を実施した第18・20次調査分を除く、第6・10～17・19・21次調査の報告書である。

大木戸遺跡では、これまでの調査によって後期旧石器時代前半期の良好な石器群をはじめ、縄文

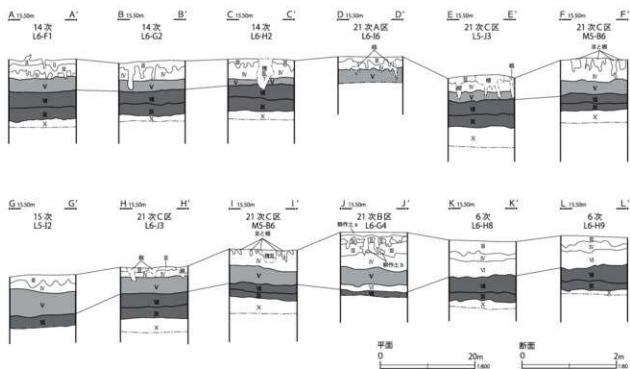
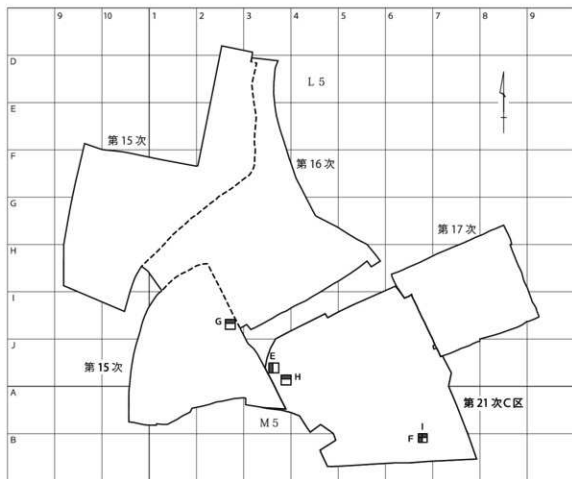
時代早期の炉穴群、台地上に展開する後期集落と低地に広がる水辺空間、弥生時代後期から古墳時代前期に継続する集落と方形周溝墓群、近世の掘立柱建物跡や井戸・土壌からなる屋敷地と、その周囲に広がる畠などの耕作地からなる近世集落の実態が明らかにされている。

3. 大木戸遺跡の基本層序

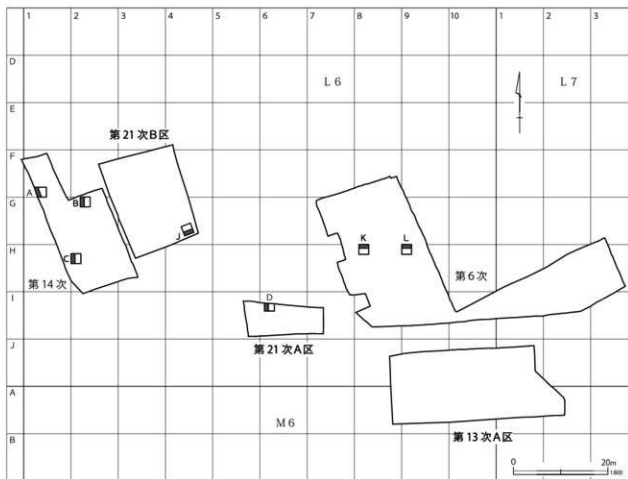
大宮台地周辺は南関東系の降下火山灰と北関東系の降下火山灰の交差点にあたり、どちらの供給源からも遠距離である。そのため、立川ローム層の堆積は1.5m程度と薄く層位区分を難しくしているが、基本的には武蔵野台地の標準層位に対比される。加えて、当該地域はソフトローム(第Ⅲ層)が厚い地域でもあり、地点によっては第2暗色帯の直上までソフト化している地点やハード

ローム(第Ⅳ層)の薄い地点が認められる。

大木戸遺跡は遺跡範囲が広いこと、地点により層厚及び堆積状況が異なり、どこまでソフトローム化しているのかによって第1暗色帯(第Ⅴ層)と第2暗色帯の間の層位(第Ⅵ層)が明確な地点と分層不能な地点がある。また、第2暗色帯の上下分層(第Ⅶ・Ⅷ層)ができる地点と、不明確な地点も認められる。



第11图 基本層序 (調査地点西側)



第12図 基本層序（調査地点北側）

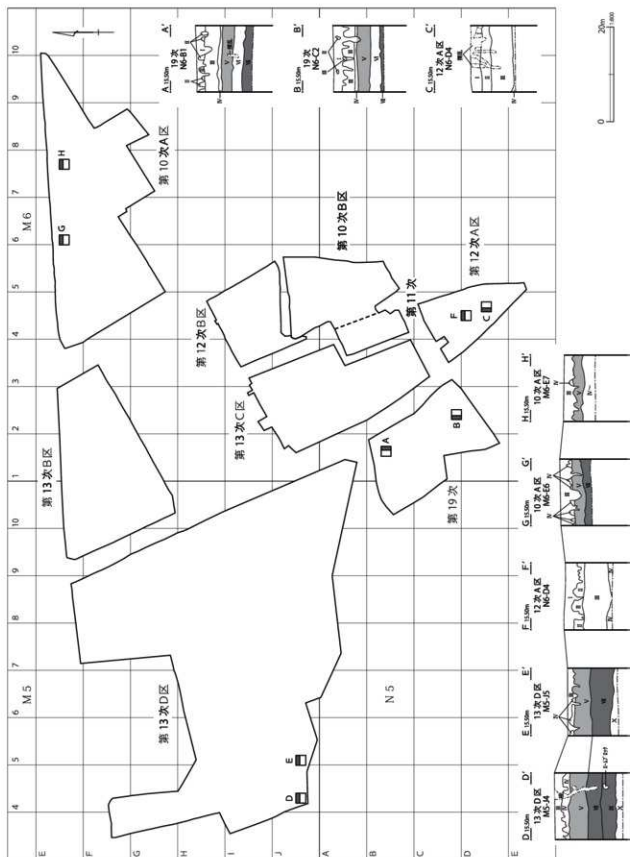
各調査地点における試掘坑の土層断面図を第11～13図に示した。

第11・12図は、今回報告する国道16号西大宮バイパス線の北側に位置する調査地点である。台地平坦部の第14次調査区と第21次調査A・C区を結んだ南北方向のA～F断面図では、台地肩部に寄った第21次調査C区（E・F断面図）で標高が下がっているほか、ほぼ水平にロームが堆積していることが分かる。これに対し、第15次調査区から第21次調査B・C区、第6次調査区を結ぶ東西方向のG～L断面図では、滝沼川が開析した沖積低地に向かって緩やかに傾斜していることが読み取れる。

第13図は、今回報告する国道16号西大宮バイパス線の南側に位置する調査地点である。台地内陸部の第19次調査区と第12次調査A区を結ぶ南北方

向のA～C断面図では、第VI層が比較的明瞭に分離できた。台地縁辺部の第13次調査D区と第12次調査B区、第10次調査A区を結ぶ東西方向のD～H断面図では、台地縁辺部に近いD・E断面図でローム層の堆積が厚くなっているのに対し、台地奥部のG・H断面図では層厚が薄くなっている。

これまでの大木戸遺跡の調査では、西大宮バイパス線部分の第1次調査で台地の東西両縁部から石器集中と礫群が検出されたのをはじめ、台地部西縁の第3地点から後期旧石器時代前半期の石器群、遺跡東縁にあたる第10地点からも後期旧石器時代後半期の石器群が検出されている。そのため、旧石器時代の遺構・遺物の所在確認を目的に各調査地点で試掘坑を設定して調査を行ったが、今回報告する調査地点には、良好な旧石器時代の遺構・遺物が検出された地点はなかった。



第13图 基本層序（調査地点南側）

IV 第6次調査

1. 概要

第6次調査の調査地点は、遺跡範囲の北側中央部に位置し、国道16号西大宮バイパス線の北側にあたる。

大木戸遺跡の範囲は、南北約530m、東西約600mと広く、東側は滝沼川に注ぐ湧水によって谷が形成され、北側はその谷が蛇行して複雑に入り組んでいる。

現在、谷部は埼玉栄高校の校舎とグラウンドに姿を変え、旧地形を復元することは難しいが、遺跡を載せる台地の北縁は、あたかも駱駝の瘤のように、西側と東側に北側に大きく張り出している。

第6次調査区は、この駱駝の瘤状に張り出した西側の張り出部の東縁の付け根付近にあっている。調査区の形状はL字形を呈していることから、便宜的に屈曲部を境に西側調査区と東側調査区に分けて呼称する。

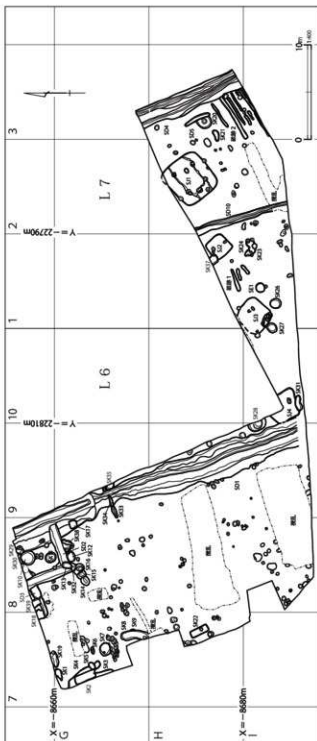
調査面積は1,134m²である。

現道を挟んで、南側に第13次調査A区、南西側に第6地点、西側に第21次調査A区がそれぞれ隣接している。

なお、調査時は第12地点と呼称して調査を実施した。

検出された遺構は、縄文時代中期の土壌1基、古墳時代前期の堅穴住居跡4軒、近世の土壌37基、井戸跡1基、溝跡6条、畝跡2箇所、ビット189基である。

第6次調査の大きな成果としては、調査区屈曲部から東側調査区にかけて、主軸方位を揃え、列状に並んだ住居跡群が検出されたことから、周辺の地形を踏まえ、古墳時代前期集落の東限をおおよそ把握することができた点が挙げられる。



第14図 第6次調査区全体図

2. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 土壌

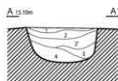
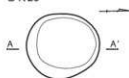
第26号土壌 (第15・16図)

東側調査区の中央部西寄りのL7-11グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は掘り込みの深い、円筒形である。規模は、長径1.15m、短径1.02m、深さ0.55mである。覆土にロームブロックを多量に混入することから人為的な埋戻し

が考えられる。覆土中層から、土器片がまとまって出土した。出土土器から中期終末から後期初頭にかけての所産と判断される。

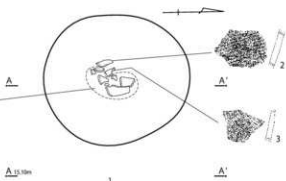
第16図1～3が出土した。1は胴部で括れ、緩く内湾する口縁部が開くキャリバー形の器形を呈する。口縁部に幅狭の無文帯を沈線で区画し、胴上半部に細沈線でやや湾曲する鋸歯状のモチーフ

SK26

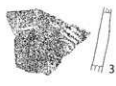


SK26

- | | | |
|------------|---------|----------------------|
| 1 黒褐色土 | 非常に固くする | 粘性あり |
| 2 にぶい黄褐色土 | 非常に固くする | 粘性あり |
| 2' にぶい黄褐色土 | 非常に固くする | ロームブロック (φ2~10cm) 多量 |
| 3 明黄褐色土 | 非常に固くする | 非常に固くする |
| 4 黒褐色土 | 非常に固くする | ロームブロック (φ10cm大) 多量 |



第15図 第26号土壌



第16図 第26号土壌出土遺物

を描いている。地文には無節L縄文が充填施文されている。2・3は同一個体の胴部破片である。

(2) グリッド出土遺物

縄文土器 (第17・18図1～32)

1は無文の口縁部が直線的に立ち、胴部で緩く括れる器形を呈するものと思われる。口縁部は横位の微隆起線で区画され、胴部に磨消縄文で抱球状のカニ鉋状モチーフが描かれる。磨消縄文による鉋の上端は連結せず、口縁部の区画微隆起帯とも接していない。鉋の内側は球形状モチーフが区画帯から垂下する状態で、モチーフの外側に地文RL縄文が縦位方向に充填施文されている。また、口縁部区画帯の微隆起帯の上には、横位のLR縄文が施される。

2は1と同様に、口縁部無文帯が微隆起帯というよりも、断面三角形の隆帯で区画されるものである。沈線の文様は不明であるが、1より細い原体の縄文LRが縦位に施文されている。

3は幅狭な口縁部無文帯が断面三角形の隆帯で区画されるもので、地文にLR縄文を縦位施文するものである。2に類似するが、施文される縄文が異なる。

4は微隆起線帯で幅狭口縁部無文帯が区画されるもので、地文にRL縄文が施文される。

5～14は沈線のモチーフが描かれる胴部破片である。5・8は括れ部を境に文様が分れ、下向きと上向きの三角文が上下に対向するモチーフが描かれる。また、8には縦位沈線の垂下する破片が接合することから、縦位方向の懸垂文的なモチーフに挟まれて、上下対向の三角文が施文されている可能性が高い。下向きの三角文には無節Lが充填されており、上向きの三角文内には縄文充填は見られない。6も同一個体の可能性が高い。

7はJ字状のモチーフ内にLR縄文が充填施文されるもので、J字文下にも沈線モチーフが続くようである。

9は三角形の先端が丸くなるU字状のモチーフ

が施文され、19も曲線的な文様が描かれている。

11～14は磨消縄文による無文帯が垂下してモチーフを描くものである。

15～24は断面三角形の隆帯でモチーフを描く土器である。15・16は胴部にU字状モチーフを隆帯で描き、17～24は懸垂文状に隆帯が垂下する。地文は15・16がRL、他はLR縄文である。17・19～21・23・24は微隆起線状の隆帯が使用される。

25～27は両耳壺系の土器で、25には橋状把手の付け根が残る。地文にLR縄文を縦位施文する。

28は底部破片で、底径は8.6cmと小さいが、無文の胴部に大型の沈線懸垂文が垂下する深鉢の底部と思われる。

以上、中期末葉の加曾利EIV式の新段階を中心とした土器群で、後期初頭に入る可能性が高い。

29～31は縄文時代後期の堀之内1式土器に比定される土器群である。

29は口縁に沈線が巡らされるが、整然とした施文ではない。胴部の整形も縦位のケズリ状を呈し、丁寧なナデ整形は施されていない。

30は波状口縁部の波頂部の破片で、突起部に穿孔が穿たれる。波頂部はこの穿孔を囲むように沈線で縁取りが施される。小さな鉢の可能性もある。

31は横位の沈線区画下に、2本平行の沈線で斜行するモチーフが描かれている。

32は無文の胴部破片であろう。

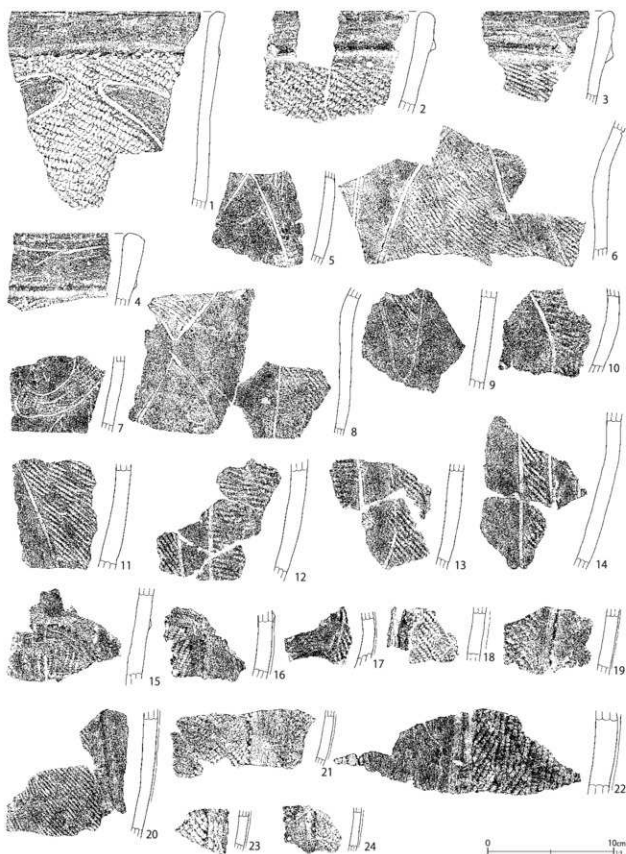
土製品 (第18図33)

33は壺の蓋である。約半分が現存するが、2個対の穿孔を縦位の楕円状に繋ぐもので、反対側も同様のモチーフになるものと思われる。推定径9.4cm、高さ3.1cmを測る。

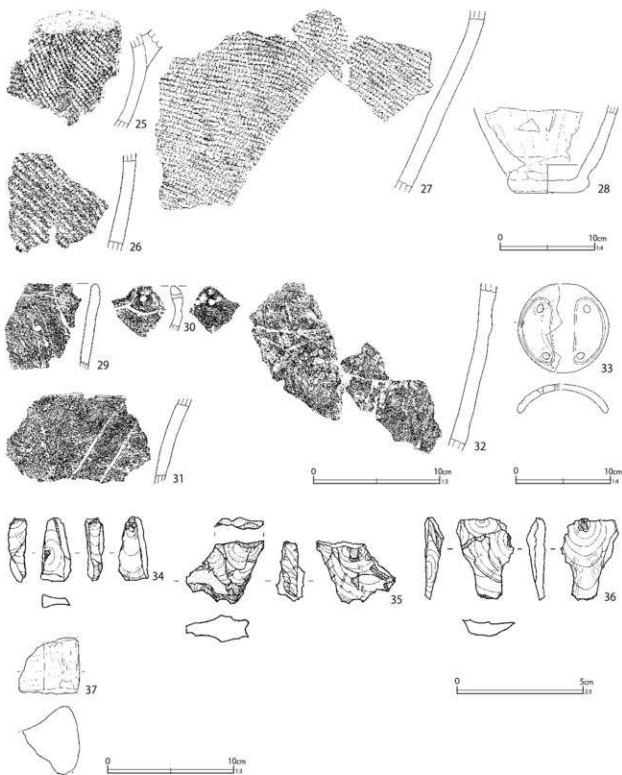
石器 (第18図34～37)

34～36は剥片である。34・36はチャート、35は黒曜石を素材とし、35のエッジには使用の痕跡が認められる。

37は安山岩製の石皿で、側縁の一部が残っているのもで、被熱されている可能性が高い。



第17図 グリッド出土遺物(1)



第18図 グリッド出土遺物(2)

第4表 出土石器観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
第18図34	微細剥離のある剥片	チャート	2.5	1.1	0.7	2.1	6次 SK7	9-1
第18図35	加工痕のある剥片	黒曜石	2.5	2.4	1.1	5.1	6次 SD1・4区	9-1
第18図36	剥片	チャート	3.2	2.0	0.7	4.0	6次 SD1・3区	9-1
第18図37	石皿	安山岩	[4.5]	[4.9]	5.4	116.3	6次 SK20 欠損 被熱か	9-2

3. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

古墳時代の遺構は、遺跡の中央北縁部で北から浅く湾入する支谷を臨む台地縁辺部に位置する。周囲には当該期の遺構はなく、やや離れた台地西側縁辺部にまとまって住居跡群が分布している。

検出された遺構は、古墳時代前期の竪穴住居跡4軒である。後世の削平で大部分を消失しているが形状は良好に遺存しており、緩やかな崖線に沿って、約5mの間隔で小型から中型の竪穴住居跡が同一方向に配置されている。

第1号住居跡（第19～22図）

東側調査区東端、L7-H2グリッドに位置する。平面形態は隅丸方形である。炉跡、柱穴、入口施設の位置から、南西壁側が入口と推定される。

主軸方位はN-52°-Eで、規模は主軸方向4.85m、直行軸方向4.53m、深さが0.34mである。

覆土の下層に焼土ブロックを多量に含み、炭化材が検出されたことから、焼失住居跡の可能性がある。

床面は、主柱穴間軸線から外側が1段高く貼床された、所謂「ベッド状遺構」となっている。炉跡は、中央からやや北東寄りに位置し、規模は径0.57×0.42m、深さ0.05mの楕円形の地床炉である。炉床は良く焼けていた。

柱穴はP1・2・3・4が該当し、4本主柱穴となる。長径0.46×0.66m、深さ0.27×0.58mで、柱は抜き取られている。

南東壁側中央のP5は、入口施設に関連する柱穴と推定される。径0.59m、深さ0.50mで2段掘り込みである。壁溝、貯蔵穴などの施設は検出

されなかった。

床面下を調査したところ掘り方が検出された。主柱穴の外側から壁際にかけて深さ0.1m前後の素掘りにロームブロックと黒色土で、床面を構築している。

本調査区で最も多くの遺物が出土した。東側コーナーを除く各コーナーから出土している。北側コーナーからは、壺1・無頸壺1・高坏1が出土した。南側コーナーからは、壺1、台付甕1、鉢1が出土した。中央から西側コーナーにかけては、高坏1、鉢1が出土した。

第22図1は小型の壺胴部片で、ミガキ調整後赤彩されている。2は大型の壺胴部片で、調整は1と同様である。3は無頸壺で複合口縁を呈し、丁寧なミガキが施されている。4は台付甕である。口端部刻目で外反口縁が縦位ハケ調整、胴部が横位ハケ調整を施している。外面に煤が付着している。5は高坏坏部で丁寧なミガキを施し赤彩している。6は内湾口縁の高坏である。脚部外面のミガキと坏部のヘラナデ調整後、内外面赤彩を施している。7は小型の鉢で、器形はコップ状である。内外面赤彩を施している。8は小型の鉢で、塊状を呈している。器壁が薄く、丁寧なミガキが施されている。

第2号住居跡（第23図）

東側調査区の中央、L7-H1グリッドに位置し、第1号住居跡の西側約3.8mに隣接する。

平面形態は隅丸方形で、炉跡、柱穴、貯蔵穴等は検出されず、入り口方向は不明であった。

主軸方位はN-46°-Eで、規模は主軸方向2.23m、直行軸方向2.23mと等しく、深さは

0.13mと浅い。

第37号土壌によって南東コーナーが一部壊されているが、炉跡、柱穴、貯蔵穴、入口施設を検出することはできなかった。ただし、北西側に浅い焼土の分布範囲が検出されているので、短期間、炉跡として使用された可能性が推定される。

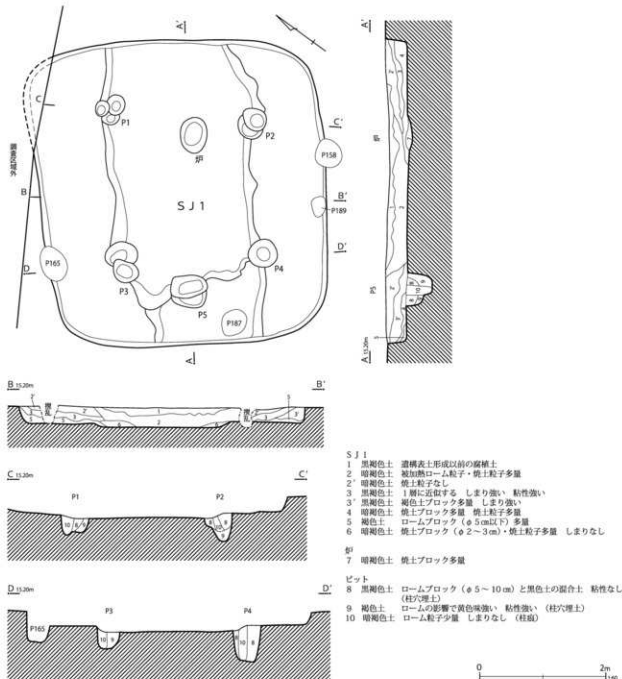
覆土は、ロームブロックを含む自然堆積土である。床面は概ね平坦で、厚さ0.05m程の貼床が

施されていた。

遺物は、第23図1の壺が出土した。複合口縁の壺口縁部である。口縁部は直立気味で丁寧な横位のミガキが施されている。

第3号住居跡（第24図）

東側調査区中央のやや西寄り、L 6-110、L 7-H・I 1グリッドに位置する。幾つかのビットと重複している。平面形態はやや不整の隅



第19図 第1号住居跡（1）

丸方形である。炉跡、柱穴、貯蔵穴の位置から入口は南西壁側と推定される。

主軸方位は $N-45^{\circ}-E$ で、規模は主軸方向3.30m、直行軸方向3.07m、深さは0.10mと浅い。

覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積土である。床面は平坦であった。

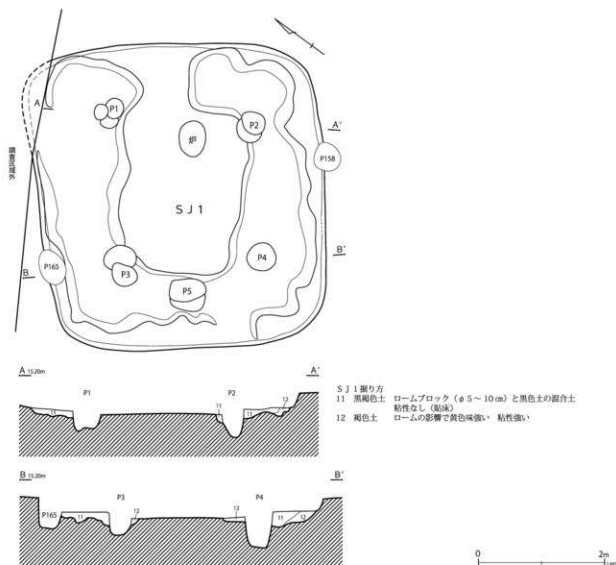
炉跡が床面中央よりやや北東の2箇所で見出された。平面形態はいずれも楕円形である。炉跡1は残存長径0.25m、短径0.27m、深さ0.03mと極めて浅い。炉跡2は長径0.42m、短径0.23m、深さ0.15mである。炉床面は比較的良く焼けて

いた。

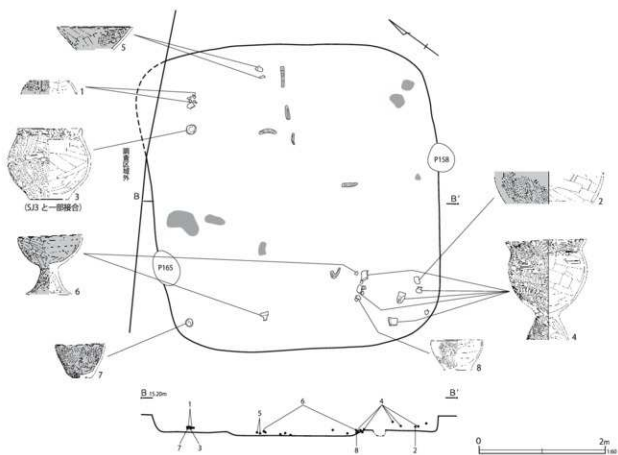
柱穴、壁溝は検出されなかった。

貯蔵穴は、南西壁から南側コーナーにかけての2箇所で見出された。P1・2の周囲には幅0.20mの周堤帯が見出された。P1は長径0.44m、短径0.37m、深さ0.28mの円形の2段掘り込みである。P2は長径0.47m、短径0.40m、深さ0.12mの楕円形の2段掘り込みである。

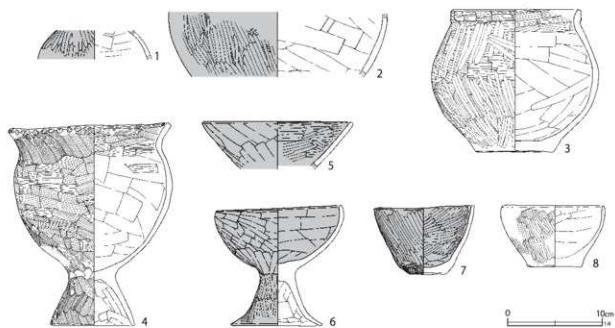
床面下を調査したところ、掘り方が検出された。住居跡の床面中央より径2.50mの範囲を、深さ0.10m前後に素掘りし、黒色土とロームブロックを混ぜて床面を構築していた。



第20図 第1号住居跡（2）



第 21 図 第 1 号住居跡遺物出土状況



第 22 図 第 1 号住居跡出土遺物

第5表 第1号住居跡出土遺物観察表 (第22図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	—	[3.2]	—	H I	25	良好	褐	外面赤彩 №5・7	—
2	土師器	壺	—	[7.0]	—	E H L	5	普通	にぶい褐	外面赤彩痕 №11	—
3	土師器	壺	13.0	15.1	8.2	E I L	70	良好	にぶい黄褐	無頸壺 S J1 №3 胴部上半: S J3 №1 ~ 14	6-3
4	土師器	台付甕	16.5	21.3	8.3	H L	80	良好	橙	内外面煤 №12・13・15・16・19 1区	6-4
5	土師器	高坏	(15.5)	[5.0]	—	E H L	25	良好	赤褐	内外面赤彩 №9・10	—
6	土師器	高坏	13.2	[12.5]	(9.3)	E L	70	良好	橙	坏部内外面・脚部外面赤彩 №2・17	6-5
7	土師器	鉢	10.1	7.0	3.8	E H L	95	普通	にぶい褐	内外面赤彩痕 №1 2区	6-6
8	土師器	鉢	(10.6)	6.5	5.4	H L	20	普通	明赤褐	№21	6-7

遺物は北東コーナーから第1号住居跡から出土した無頸壺の同部上半分が破片となって出土した。住居跡間接合資料として注目される。

第4号住居跡 (第25図)

東側調査区と西側調査区の境、L 6-I 10グリッドに位置する。第31号土壌に壊され、北西側コーナー付近は調査区域外にかかる。内部施設は、柱穴1基のみで、入口方向は不明であった。

平面形態は逆台形に近い。主軸方位はN-24°-Wで、規模は主軸方向2.90m、直行軸方向1.40

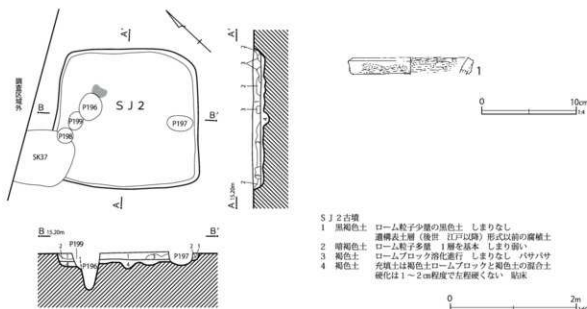
m、深さは0.18mである。

覆土はローム土を主体とし、黒色土を含む自然堆積土であった。

床面はやや凹凸が認められ、一部貼床が検出された。炉跡、壁溝、貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴は南壁寄りで1基検出された。P 1は長径0.58m、短径0.36m、深さ0.30mの楕円形であった。

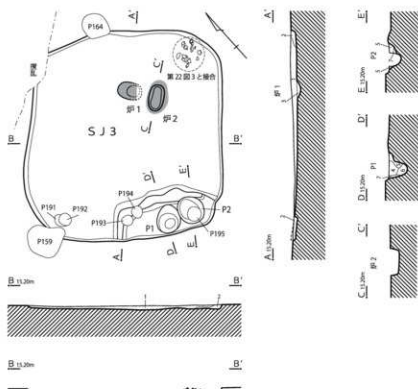
遺物は出土していない。



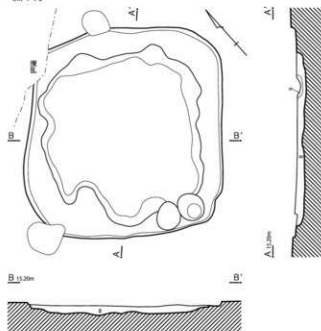
第23図 第2号住居跡・出土遺物

第6表 第2号住居跡出土遺物観察表 (第23図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(12.0)	[1.8]	—	E H L	10	良好	明赤褐		6-8



掘り方



SJ3
1 黒褐色土 遺構表土層（近世削平以降の堆積）形成以前の腐植土層
2 褐色土 ローム土主体

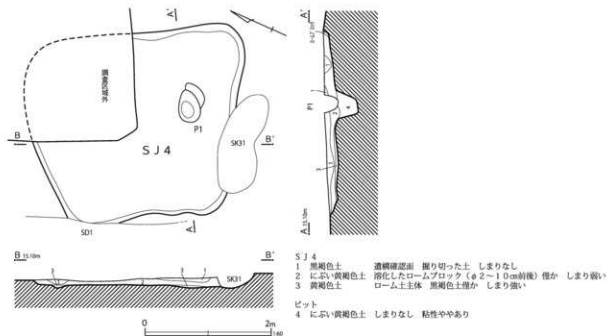
P1
3 褐色土 焼土粒子多量 炭化物微量

ビット
4 暗褐色土 ローム粒子少量 しまりなし
5 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量 しまりあり
6 黒褐色土
7 褐色土 ローム土主体

掘り方
8 黒褐色土 ロームブロック（φ 5 cm以下）と褐色土の混合土
9 赤褐色土 炉の影響で赤焼化

0 2m 1:100

第24図 第3号住居跡



第25図 第4号住居跡

4. 近世の遺構と遺物

(1) 土壌

調査区内から土壌37基が検出された(第26～29図)。

土壌は不整形を呈するものが多く、明確な時期や性格を特定することは難しい。分布は、第1・4号溝跡の周辺や西側調査区の北半部にややまとまる傾向が窺われる。このうち覆土の状態や出土遺物を伴い、帰属時期をある程度判別できた近世以降の土壌を第26・27図に、時期を特定することのできなかったものを第29図に掲載した。

なお、土壌の形態や規模、重複関係については第8表に一括した。以下、遺物を出土した土壌を中心に概要を説明する。

第2号土壌 (第26・27図)

L6-G7グリッドに位置し、第3～5号土壌と重複する。平面形は長方形で、壁面は一部オーバーハングする。規模は長軸2.20m、短軸0.84m、深さ0.25mである。長軸方位はN-20°-Wを指す。

実測・図示できなかったが、瀬戸美濃系磁器細片(碗ないし杯)、産地不詳陶器片各1が出土しており、いずれも近代の所産である。他にかわらけ口縁部細片、体部細片各1が出土している。

土壌の時期は近代以降の可能性が高い。

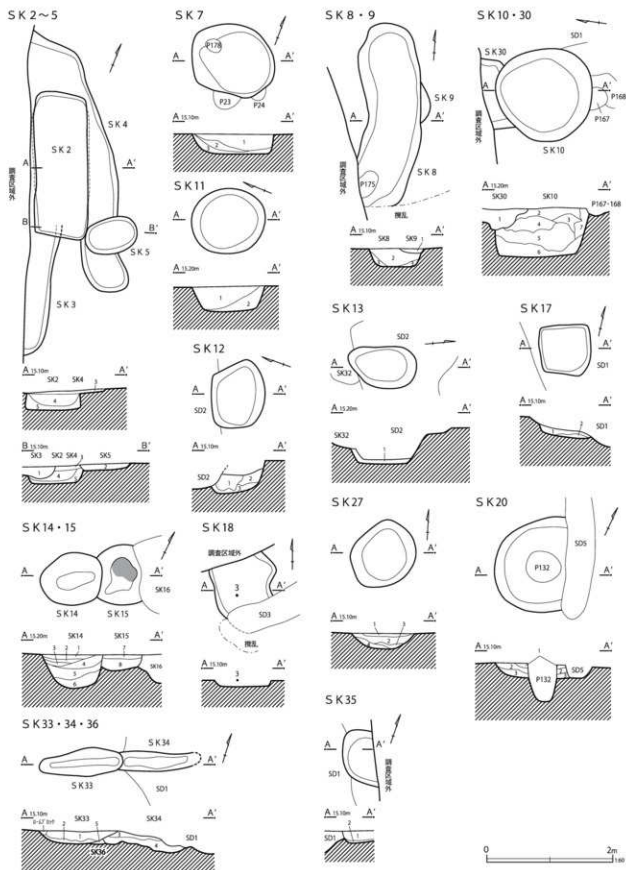
第3号土壌 (第26・27図)

L6-G7グリッドに位置する。第2号土壌と重複し、西側が調査区域外にかかるため平面形は明確でない。不整形あるいは長方形であろう。規模は長軸1.90m以上、短軸0.40m以上、深さ0.19mである。長軸方位はN-17°-Wを指す。覆土に炭化木片が含まれている。

遺物は出土していない。

第4号土壌 (第26・27図)

L6-G4グリッドに位置する。第2・5号土壌と重複し、西側が調査区域外にかかるため、平面形は明確でない。規模は長軸4.14m以上、短軸0.35m以上、深さ0.06mである。長軸方位はN-38°-Wを指す。



第26図 土坑(1)

SK 2~5	炭化木片 しまりやや弱い 粘性あり 1 褐色土 しまりあり 粘性やや弱い 2 黒褐色土 しまりあり 粘性やや弱い 3 灰黄褐色土 しまりあり 粘性やや弱い 4 暗褐色土 しまりあり 粘性あり 5 褐色土 ロームブロック しまりあり 粘性あり	SK 13	1 暗褐色土 ローム溶化混入 しまり弱い 粘性あり
SK 7	1 暗褐色土 ロームブロック (φ3~10cm大) 多量 しまりやや弱い 粘性やや弱い 2 黒褐色土 ローム土 しまりあり 粘性やや弱い 3 褐色土 ローム主体 しまりやや弱い 粘性やや弱い	SK 14・15	1 褐色土 ロームブロック (2cm大) しまりあり 粘性やや弱い 2 褐色土 ローム土主体 しまりあり 粘性やや弱い 3 褐色土 ロームブロック (2~5cm大) しまりやや弱い 粘性やや弱い 4 褐色土 ローム土主体 暗褐色土多量 しまりやや弱い 粘性やや弱い 5 褐色土 ローム土主体 暗褐色土少量 しまりやや弱い 粘性やや弱い 6 暗褐色土 しまりやや弱い 粘性やや弱い 7 暗褐色土 しまりやや弱い 粘性あり 8 にぶい黄褐色土 しまりやや弱い 粘性やや弱い 下部には焼土粒子混入
SK 8・9	1 褐色土 しまりあり 粘性やや弱い 2 黒褐色土 しまりやや弱い 粘性やや弱い 3 黄褐色土 しまりやや弱い 粘性やや弱い 壁面ロームの崩落土	SK 17	1 暗褐色土 炭化物少量 灰色土主体 しまりあり 粘性あり 2 褐色土 ロームブロック主体 粘性強い
SK 10・30	1 褐色土 ローム粒子多量 灰褐色土粒子少量 炭化物少量 茶褐色土主体 2 暗褐色土 灰色土粒子 炭化物 しまりなし 3 暗褐色土 黒色味強い 4 暗褐色土 大型のロームブロック (φ5cm) 多量 炭文となる しまり弱い 5 暗褐色土 ローム少量 しまり強い 溶化進行している 6 暗褐色土 溶化したロームブロック主体 粘性強い 7 褐色土 ロームブロック主体	SK 20	1 灰黄褐色土 しまり弱い 粘性強い 2 灰黄褐色土 ロームブロック (φ2~5cm大) 黒褐色土多量 3 褐色土 ローム主体 黒褐色土多量 しまり強い 粘性あり
SK 11	1 暗褐色土 ロームブロックやや多量 2 灰黄褐色土 ロームブロックやや少量	SK 27	1 黒褐色土 しまり弱い 2 暗褐色土 しまり弱い 粘性強い 3 にぶい黄褐色土 ロームブロック (φ1cm大) 微量 しまり強い 粘性やや弱い 4 黄褐色土 ロームにブロック混入
SK 12	1 暗褐色土 灰色ブロック土 ローム粒子少量 しまりなし 2 暗褐色土 ロームやや多量 しまりあり 粘性あり 3 にぶい黄褐色土 壁・底のブロック溶化層	SK 33・34・36	1 暗褐色土 灰色土とロームブロック (大型) の混入土 2 褐色土 ハードローム土主体 壁・底の溶化層 しまり強い 粘性強い 3 褐色土 ブロック 灰色土・未溶化ローム粒子多量 4 暗褐色土 大型ロームブロック (φ5cm) 多量 5 暗褐色土 ローム主体 しまり強い 粘性強い
		SK 35	1 暗褐色土 ローム粘土・灰色土粒多量 茶褐色土主体 2 褐色土 ロームブロック (ハード) よりなる壁・底の崩落土

第27図 土壌 (2)

実測・図示できなかったが、京都信楽系陶器小杉碗の体部片と瓦質土器焙烙 (平底) 細片 (底部・口縁部各1) が出土している。19世紀初頭以降に帰属する。

第5号土壌 (第26・27図)

L6-G7グリッドに位置し、第4号土壌と重複する。平面形は楕円形である。規模は長径0.84m、短径0.56m、深さ0.10mである。長軸方位はN-50°-Eを指す。

遺物は出土していない。

第7号土壌 (第26・27図)

L6-G7グリッドに位置する。平面形は不整形である。規模は長軸1.30m、短軸1.14m、深さ0.31mである。長軸方位はN-70°-Eを指す。

遺物は出土していない。

第8・9号土壌 (第26・27図)

L6-G7グリッドに位置する。第8号土壌は隅丸長方形の平面形で、規模は長軸2.92m以上、

短軸0.82m、深さ0.30mである。長軸方位はN-3°-Eを指す。

第9号土壌は、土層断面の観察から、第8号土壌を壊していることが判明した。形態や規模については不明である。

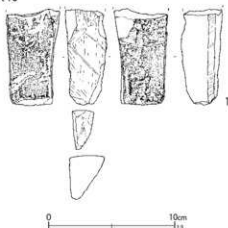
遺物は、瀬戸美濃系陶器天目茶碗の破片 (1個体分)、瀬戸美濃系陶器灰釉杯体部片、肥前系磁器杯 (体部丸形) 破片3、瓦質土器焙烙 (平底) 底部4が出土している。18世紀後半から19世紀前半頃の遺構と考えられる。

第10号土壌 (第26・27・28図1)

L6-F8グリッドに位置し、第30号土壌によって壁面の一部が壊されている。平面形は円形で、掘り込みは深く、筒形に近い断面形である。規模は長径1.51m、短径1.50m、深さ0.78mである。覆土は、ロームブロックを含む暗褐色土を主体とする自然堆積である。

第28図1は流紋岩製砥石で、折損している。側面には櫛歯状工具痕が残る。

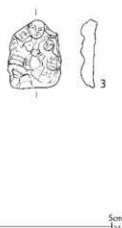
SK10



SK12



SK18



第28図 土壇出土遺物

第7表 土壇出土遺物観察表 (第28図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	石製品	砥石	長さ [7.5]	幅 3.3	厚さ 4.7	重さ 114.8 g				波紋岩 櫛歯状工具痕 SK10・4区	10-1
2	鉄製品	針	長さ [6.9]	幅 0.5 × 0.4	重さ 7.8 g					SK12	10-3
3	土製品	泥面子	長さ 2.7 幅 2.1 厚さ 0.6			K	95	良好	明赤褐色	SK18 No.1	10-2

第11号土壇 (第26・27図)

L 6-F 8 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形である。規模は長径1.19m、短径1.04m、深さ0.40mである。

遺物は出土しなかった。

第12号土壇 (第26・27・28図2)

L 6-G 8 グリッドに位置し、北壁の上部が第2号溝跡によって壊される。平面形は不整形である。規模は長軸1.00m、短軸0.89m、深さ0.30mである。長軸方位はN-71° -Eを指す。

第28図2は棒状鉄製品である。錆化が著しい。断面形は矩形で、下端はやや尖り気味となる。

実測・図示できなかったが、コンニャク判で絵付けされた肥前系磁器碗、肥前内野山窯系陶器の銅緑釉皿口縁部片2が出土している。18世紀前葉以降の遺構と考えられる。

第13号土壇 (第26・27図)

L 6-G 8 グリッドに位置し、第2号溝跡によって壊されている。平面形は楕円形である。規模は長径1.10m、短径0.67m、深さ0.22mである。長軸方位はN-18° -Eを指す。

遺物は出土していない。

第14号土壇 (第26・27図)

L 6-G 8 グリッドに位置する。第15号土壇と重複し、それを壊す。

平面形は楕円形で、掘り込みは深い。規模は長径1.00m、短径0.83m、深さ0.55mである。長軸方位はN-63° -Eを指す。

遺物は、平瓦片2が出土している。時期は近世以降である。

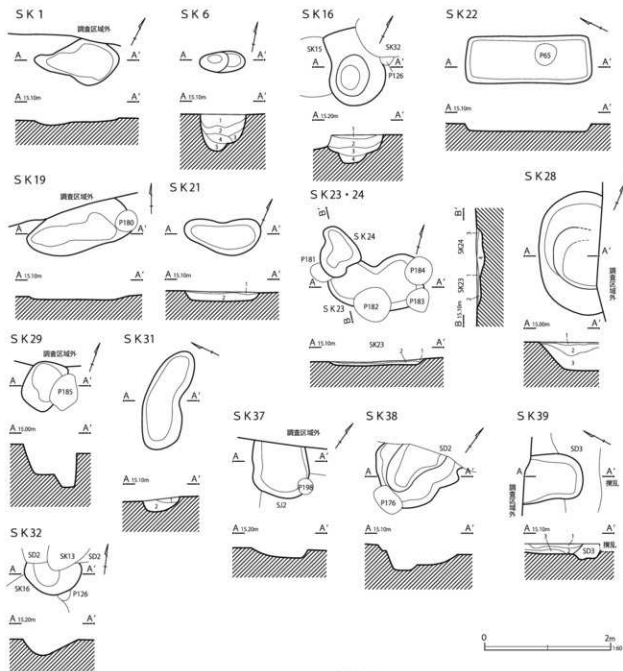
第15号土壇 (第26・27図)

L 6-G 8 グリッドに位置し、第14・16号土壇と重複する。平面形は円形と推定される。規模は長径0.63m以上、短径0.95m、深さ0.25mである。覆土の最下層には、焼土粒子の顕著な混入が認められた。

遺物は出土していない。

第17号土壇 (第26・27図)

L 6-G グリッドに位置する。平面形は方形で、掘り込みは浅い。規模は長軸0.82m、短軸0.77m、深さ0.10mである。長軸方位はN-75° -Eを指す。



- SK 6
- 1 褐色色土 ローム、粘土粒子をまんべんなく含む
しまりやや強い、粘性ややなし
 - 2 黄褐色色土 ローム主体で黒褐色土が塊状に混入する
しまりやや強い、粘性ややあり
 - 3 暗黄褐色色土 ローム主体 しまりやや強い、粘性あり
 - 4 黒褐色色土 ロームブロック少量 しまりやや強い、粘性ややなし
 - 5 にぶい黄褐色色土 しまりやや強い、粘性ややあり
- SK 16
- 1 暗褐色色土 しまりあり 粘性あり
 - 2 黄褐色色土 しまりやや強い、粘性あり
 - 3 黒褐色色土 しまりやや強い、粘性ややなし
 - 4 黒褐色色土 ロームブロック (φ 2~5cm大) しまりやや強い、粘性あり
- SK 21
- 1 しまり弱い 粘性弱い
 - 2 黄褐色色土 ローム土 しまり強い、粘性あり

- SK 23・24
- 1 暗褐色色土 しまり弱い、粘性弱い
 - 2 明黄褐色色土 ソフトローム主体 上層暗褐色土が一部混入
堆積ごく薄い しまりやや強い、粘性弱い
 - 3 灰黄褐色色土 黄褐色土の酸化ローム土 しまり弱い、粘性弱い
 - 4 黄褐色色土 溶化進行したローム土 しまり弱い
- SK 28
- 1 暗褐色色土 ローム粒子多量 均等に含む しまり弱い
 - 2 褐色色土 ソフトローム均等に含む しまりなし
 - 3 にぶい黄褐色色土 ロームブロック (φ 3~10cm大) 多量
溶化ローム層 粘性あり
- SK 31
- 1 暗褐色色土 ローム粒子若干 しまりなし
 - 2 黒褐色色土 しまり強い
- SK 39
- 1 暗褐色色土 しまりやや強い、粘性ややなし
 - 2 黄褐色色土 しまり弱い、粘性ややなし
 - 3 明褐色色土

第29図 土壌 (3)

第8表 土壌一覧表 (第26・27・29図)

番号	グリッド	平面形	長軸方位	長径 /m	短径 /m	深さ /m	重複遺構		
							土壌より古	土壌より新	不明
1	L6-F7	不整形	N-61°-E	1.34	(0.71)	0.10			
2	L6-F7	長方形	N-20°-W	2.20	0.84	(0.25)		SK3・4・5	
3	L6-F7	不整形	N-17°-W	(1.90)	(0.40)	0.19	SK2・4		
4	L6-F7	不整形	N-38°-W	(4.14)	(0.35)	0.06	SK2	SK3・5	
5	L6-F7	楕円形	N-50°-E	0.84	0.56	0.10	SK2・4		
6	L6-F7	楕円形	N-78°-E	0.72	0.34	0.57			
7	L6-F7	不整形	N-70°-E	1.30	1.14	0.31			P23・24・178
8	L6-F7	隅丸長方形	N-3°-E	(2.92)	0.82	0.30		SK9	P175
9	L6-F7	不整形	—	—	—	0.07	SK8		
10	L6-F8	円形	—	1.51	1.50	0.78		SK30・P167・168	
11	L6-F8	円形	—	1.19	1.04	0.40			
12	L6-F8	不整形	N-71°-E	1.00	0.89	0.30		SD2	
13	L6-F8	楕円形	N-18°-E	1.10	0.67	(0.22)		SK32・SD2	
14	L6-F8	楕円形	N-63°-E	1.00	0.83	0.55	SK15		
15	L6-F8	円形	—	(0.63)	0.95	0.25	SK16	SK14	
16	L6-F8	不整形	N-25°-W	1.22	0.89	0.44		SK15	SK32・P126
17	L6-F8	方形	N-75°-E	0.82	0.77	0.10		SD1	
18	L6-F8	不整形	N-0°	(0.72)	0.90	0.10			SD3
19	L6-F・F7	不整形	N-77°-E	(1.45)	(0.69)	0.06			P180
20	L7-H3	円形	—	(1.12)	1.50	0.22		SD5・P132	
21	L7-H2・3	楕円形	N-68°-E	1.20	0.52	0.14			
22	L6-H7	長方形	N-26°-W	2.00	0.75	0.12			P65
23	L7-H1	不整形	N-75°-E	1.50	0.85	0.06	SK24		P181・184
24	L7-H1	不整形	N-40°-W	0.70	0.65	0.13		SK23	P181
27	L6-H10、L7-H1	楕円形	N-55°-E	1.10	0.90	0.24			
28	L6-H19・10	楕円形	N-23°-W	1.96	(0.94)	0.44			
29	L6-F8	楕円形	N-10°-E	0.80	(0.44)	0.48		SD1	P185
30	L6-F8	不整形	N-9°-W	1.10	(0.20)	0.32	SK10		
31	L6-H10	不整形	N-85°-E	1.66	0.56	0.18			
32	L6-F8	円形	—	0.90	(0.40)	0.24			SK13・16・SD2・P126
33	L6-G9	不整形	N-70°-E	1.34	0.46	0.21	SK34		
34	L6-G9	不整形	N-70°-E	(1.13)	0.32	0.20		SK33・SD1	
35	L6-G9	方形	N-89°-E	(0.55)	(0.73)	0.19	SD1		
36	L6-G9	—	—	—	—	(0.05)			
37	L7-H1	不整形	N-35°-W	(0.87)	0.86	0.14	SJ2		P198
38	L6-F8	不整形	N-2°-W	(0.80)	1.15	0.40			SD2・P176
39	L6-F8	長方形	N-30°-W	(0.90)	0.72	0.15	SD3		

遺物には、銅版転写の磁器破片1が出土している。19世紀後半以降に帰属する。

第18号土壌 (第26・27・28図3)

L6-F7・8グリッドに位置する。北側は調査区域外に延び、南端は第3号溝跡によって削平されている。平面形は不整形である。規模は長軸0.72m以上、短軸0.90m、深さ0.10mである。掘り込みの浅い土壌で、底面からやや浮いた状態で、第28図3に示した泥面子が出土した。

その他に、棧瓦破片1が出土している。遺構の

時期は19世紀以降に降る可能性が高い。

第20号土壌 (第26・27図)

L7-H3グリッドに位置する。第5号溝跡によって東壁面が壊され、中心部にはピットが重複している。平面形は円形と推定される。規模は長径1.12m以上、短径1.50m、深さ0.22mである。遺物は出土していない。

第27号土壌 (第26・27図)

L6-H10、L7-H1グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は浅い皿形である。規

模は長径1.10m、短径0.90m、深さ0.24mである。長軸方位はN-55°-Eを指す。

第30号土壌 (第26・27図)

L6-F8グリッドに位置する。第10号土壌の北壁上部を削平し、調査区域外に北側は延びている。平面形は不整形と推定され、規模は長軸1.10m、短軸0.20m以上、深さ0.32mである。長軸方位はN-9°-Wを指す。

第33・34・36号土壌 (第26・27図)

L6-G9グリッドに位置する。溝状の土壌が長軸方位を描え、重複している。前後関係は、第33号土壌が、第34・36号土壌を壊している。

第33号土壌は、平面不整形を呈する溝状の土壌で、掘り込みは浅い。規模は長軸1.34m、短軸0.46m、深さ0.21mである。長軸方位はN-70°-Eを指す。

同様に、第34号土壌は平面不整形の溝状の土壌である。規模は長軸1.13m以上、短軸0.32m、深さ0.20mである。長軸方位はN-70°-Eを指す。

第36号土壌は、土層断面から存在が明らかになった土壌である。3基の土壌の中では最も構築時期が古い。遺物は出土していない。

第35号土壌 (第26・27図)

L6-G9グリッドに位置する。第1号溝跡に接し、東側は調査区域外に延びる。平面形は方形と推定される。規模は長軸0.55m以上、短軸0.73m以上、深さ0.19mである。長軸方位はN-89°-Eを指す。遺物は出土していない。

(2) 井戸跡

第1号井戸跡 (第30図)

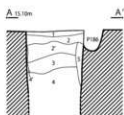
東側調査区中央のL7-I1グリッドに位置し、南端でビートを壊している。

平面円形を呈する素掘りの井戸で、ほぼ円筒形に掘り込まれている。規模は長径1.01m、短径0.92mで、深さ1.40mまで掘り下げを行ったが、安全対策のため、底面までは調査できなかった。

覆土は、にぶい黄褐色土を主体としている。上層は水平に堆積しているが、ロームブロックを多量に含む土砂が目立つことから、人為的な埋戻しと推定される。

覆土中から第30図1の寛永通寶(新寛永)が出土した。その他に、薄手硬質のかわらけ口縁部破片が出土している。所謂「江戸在地系かわらけ」と同じタイプと考えられる。遺物の内容から18世紀以降に廃絶したと考えられる。

SE1



SE1

- 1 黄褐色土 表土形成前までに堆積した腐食土 しまり強い
- 2 にぶい黄褐色土 溶化ローム土主体
- 2' 層を主体 ロームブロック(φ5cm大)多量
- 3 暗褐色土 しまり強い
- 3' 暗褐色土 2層を主体とするがブラックバンドを均一的に含む
- 4 にぶい黄褐色土 溶化ローム土
- 4' にぶい黄褐色土 壁際に堆積した4層に類似した土
- 5 褐色土 3層や2層の黄味の強いローム
- ローム土 壁の崩落土

第30図 第1号井戸跡・出土遺物

第9表 第1号井戸跡出土遺物観察表 (第30図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	銅製品	銭貨	縦 2.42	横 2.41	厚さ 0.17	重さ 3.6 g				寛永通寶 SE1	10-4

(3) 溝跡

第1号溝跡 (第31・32図1～7)

西側調査区の東壁沿って、南北方向に直線的に延びる溝跡である。L6-F8、G・H9、I9・10グリッドに位置する。走行方位は、わずかに西側に傾く、N-23°-Wを指す。第2号溝跡、第10・17・29・33～35号土城などと重複する。

規模は、検出長32.30m、幅1.30～3.80m、深さ0.24～1.28mである。溝跡の北側は断面逆台形状に1段深く掘り込まれ、壁面には鋤状工具によると思われる工具の掘削痕が残る。一方、南側の掘り込みは浅くなり、壁面の立ち上がりも緩やかである。

走行方向から、南側に隣接する第13次調査A区の第1号溝跡と同一の区画溝と考えられる。

第32図1は肥前系磁器の仏飯器で、18世紀後半～19世紀初頭の製品である。2は瀬戸美濃系陶器のはさみ皿で、大窯第1段階の所産である。3は志戸呂産陶器の灯明皿で17世紀後半～18世紀前半の製品である。4は瀬戸美濃系陶器の花瓶で、灰釉と鉄釉を掛け分ける。18世紀前半～半ばの製品である。5も瀬戸美濃系陶器で、内面に摺絵を施す皿である。18世紀前半～半ばを中心とした時期に位置づけられる。6は中世の板碑の転用品で、二次利用による擦痕が認められる。裏面の工具痕は板碑の成形痕と考えられる。7は流紋岩製砥石で、櫛歯状工具痕が残る。

その他に実測・図示できなかったが、須恵器杯・甕破片各1、肥前系磁器碗破片7、肥前系磁器杯(体部丸形)2、瀬戸美濃系磁器端碗破片1、京都信楽系陶器丸碗破片6、常滑焼甕破片3、瓦質土器焙烙(平底)破片25、土師質土器焙烙(丸底)破片2、かわかけ破片1、平瓦1が出土している。瀬戸美濃系磁器の出土から19世紀前半の埋没と考えられるが、肥前系磁器は、コンニャク判の染付を伴う碗や、所謂くわんか手

の粗製碗が見られる。京都信楽系陶器丸碗も多く、色絵・鉄絵の双方が認められる。

概ね18世紀から19世紀初頭に主たる機能時期が求められるであろう。

第2号溝跡 (第31・32図8)

西側調査区の北東隅部、L6-F・G8グリッドに位置する。ほぼ直角に屈曲する、断面逆台形の溝跡である。走行方位は、N-22°-WからN-67°-Eに向きを大きく変える。第1・3号溝跡や第12・13・32・38号土城などと重複する。土層断面の観察から、第1号溝跡の埋没後に掘削されたことが分かる。

規模は、検出長9.70m、幅0.90～1.40m、深さ0.40mである。遺物は、覆土中から陶磁器・瓦などが出土した。

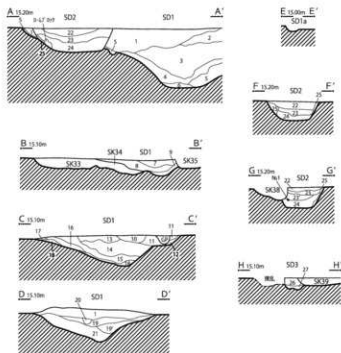
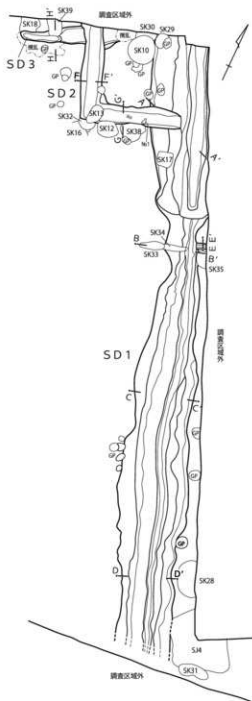
第32図8は瀬戸美濃系磁器の杯で19世紀後半の製品である。

その他に、肥前系磁器碗破片3、丸形の杯破片1・瀬戸美濃系磁器杯破片1、土瓶破片2・京都信楽系陶器丸碗破片1、杯(色絵)破片1・瀬戸美濃系陶器緑釉植木鉢底部片1・万古系陶器急須1個体・土師質土器甕口縁部片1、焙烙(丸底)底部片1・瓦質土器焙烙(平底)破片3、瓦片25が出土している。肥前系磁器碗は18世紀以前に遡り、一重・二重の網目文を施す破片が各1点認められる。ただし、総体的な遺物の様相は第1号溝跡より後出で、遺構の埋没時期も19世紀後半以降と考えられる。

第3号溝跡 (第31図)

西側調査区の北端、L6-F8グリッドに位置する。東西方向に走行する溝跡である。走行方位は、N-65°-Eを指す。第2号溝跡との新旧関係は不明であるが、第30号土城によって壊されている。規模は、検出長5.10m、幅0.90m、深さ0.24mである。

実測・図示できなかったが、瀬戸美濃系陶器半胴甕体部片1、近代の植木鉢破片が出土している。



SD1

- | | | |
|------------|-------------------------|---------------------|
| 1 灰黄褐色土 | ローム粒子多量 | しまり弱い |
| 2 にぶい黄褐色土 | ローム粒子多量 | しまり弱い |
| 3 褐色土 | 大型ロームブロック (ハード) 多量 | しまり弱い |
| 4 暗褐色土 | ローム粒子少量 | 灰色土 粘性あり |
| 5 暗褐色土 | ロームブロック | 壁の崩落土 |
| 6 褐色土 | ローム主体 | 壁・底の溶軟化層 |
| 7 にぶい黄褐色土 | ロームブロック (φ1~2cm) 多量 | 茶褐色土主体 |
| 8 暗褐色土 | ロームブロック (大型) 少量 | 褐色土主体 |
| 9 暗褐色土 | 壁の崩落土 | ロームブロック (φ2~3cm) 多量 |
| 10 黄褐色土 | ローム粒子少量 | しまりなし |
| 11 暗褐色土 | ローム粒子多量 | きわめて細かく黒色味強い |
| 12 にぶい黄褐色土 | ロームブロック多量 | 黄色味帯びる |
| 13 暗褐色土 | ローム粒子多量 | 灰色土粒子 |
| 14 褐色土 | ハードローム (φ5~10cm) ブロック主体 | しまりなし |
| 15 にぶい黄褐色土 | ローム溶化未進行 | 増反土 |
| 16 褐色土 | ロームブロック (φ2~3cm) 多量 | 褐色土主体 |
| 17 暗褐色土 | ロームブロック | 壁の崩落土 |
| 18 にぶい黄褐色土 | 炭化物 | しまりあり |
| 19 にぶい黄褐色土 | ロームブロック | 壁底の崩落土 |
| 20 暗褐色土 | ローム粒子多量 | しまり弱い |
| 21 暗褐色土 | ロームを均等に含む | 一部黒褐色土と互層状になる |
| | 混入した粘土ブロック層 | しまり弱い |
| | | しまりあり |

SD2

- | | | |
|------------|------------------------|---------|
| 22 暗褐色土 | ローム粒子・炭化物 | しまりなし |
| 23 灰黄褐色土 | 溶化進行したローム (ハード) ブロック多量 | しまりなし |
| 24 暗褐色土 | ロームブロック (大型) 少量 | |
| 25 にぶい黄褐色土 | ロームブロック | ローム粒子少量 |
| 26 褐色土 | ローム主体 | 壁の溶軟化層 |

SD3

- | | | |
|---------|---------|--------|
| 27 黄褐色土 | しまりやや強い | 粘性ややあり |
| | しまりやや強い | 粘性ややなし |



第31図 第1~3号溝跡

近世以降の溝跡だが、遺物量が少なく、詳細な時期を把握し得ない。

第4号溝跡 (第33図)

東側調査区東端のL7-G・H3グリッドに位置する。やや西に傾き、南北方向に走行する溝跡で、走行方位はN-24°-Wを指す。規模は検出長12.50m、幅1.95~2.45m、深さ0.48~0.60mである。

土層断面の観察から、東側のやや幅広の溝跡が埋没した後に、西側の断面箱葉研形の溝跡が掘削

されていることが分かる。掘り返しが行われていることから、耕作地などの区画溝と考えられる。

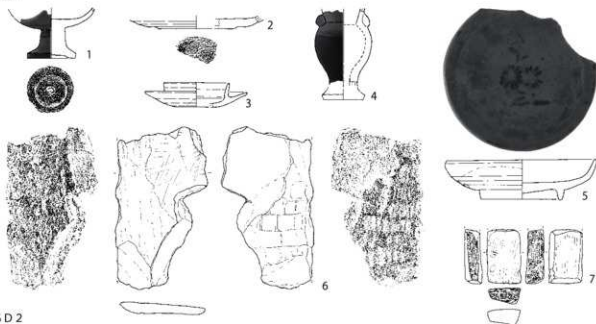
実測・図示できなかったが、くらわんか手の肥前系磁器碗破片1、瓦質土器焙烙(平底)底部片1が出土している。

遺物量が少なく、詳細な時期を把握し得ないが、概ね18世紀以降に埋没した溝跡であろう。

第5号溝跡 (第33図)

東側調査区の東端部、L7-H3グリッドに位置する。東側に隣接する第4号溝跡に並行する短

SD1



SD2

第32図 第1・2号溝跡出土遺物

第10表 第1・2号溝跡出土遺物観察表 (第32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版	
1	磁器	仏飯器	—	[4.0]	3.9	I K	85	良好	灰白	肥前系 SD1・2区	9-3	
2	陶器	皿	—	[1.0]	(6.0)	I K	15	普通	にぶい黄	瀬戸美濃系 SD1 (L6B9) SD1・4区	10-5	
3	陶器	灯明皿	(8.0)	2.0	(3.0)	H I	30	普通	にぶい黄	志戸呂系 鉄軸 SD1・3区	10-5	
4	陶器	花生	—	[6.1]	—	I	90	良好	灰黄	瀬戸美濃系 掛け分け軸 SD1・1区	9-4	
5	陶器	皿	11.8	3.3	6.4	D	95	良好	灰白	瀬戸美濃系 灰軸・鉄軸 SD1・2区	9-5	
6	石製品	板碑	長さ [12.8] 幅 [7.4] 厚さ [1.1] 重さ 125.6 g				船用砥石 緑泥片岩 磨耗した平ノミ状工具板 SD1					10-5
7	石製品	砥石	長さ [4.3] 幅 2.7 厚さ 1.4 重さ 24.6 g				流紋岩 SD1・2区					10-5
8	磁器	坪	—	[2.7]	(3.4)	K	20	普通	白	瀬戸美濃系 SD2	10-5	

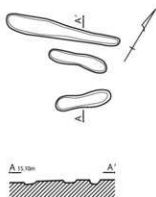
(4) 畝跡

第1号畝跡 (第35図)

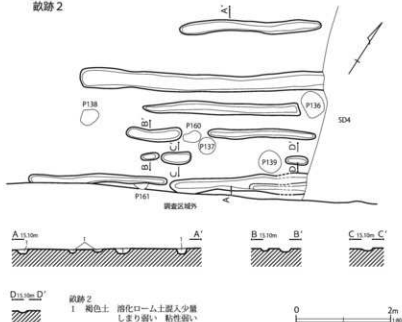
東側調査区のほぼ中央、L7-H・I1グリッドに位置する。東西方向に延びる3条の畝間溝が検出された。

畝跡の規模は、東西長2.48m、南北長1.76mの範囲である。畝間溝には長短が見られ、走行方向もやや不揃いである。溝の深さは6~10cmと全体に浅い。遺物は出土していない。

畝跡1



畝跡2



第35図 第1・2号畝跡

(5) ビット

ビットは調査区全体から189基検出された(第36・37図)。平面形は、円形もしくは楕円形のものが大半を占め、不整形のものを一部含む。規模は直径30~50cmのものが多く、深さは4~82cmと幅があるが、概ね20~50cmにまとまっている(第11表)。

覆土は暗褐色土や黒褐色土、灰褐色土が主体で、全体にしまりのないものである。

西側調査区では北側のL6-G7・8グリッドと南西隅のL6-I8グリッドにやや集中しているが、全体に散漫な分布を示している。唯一、L

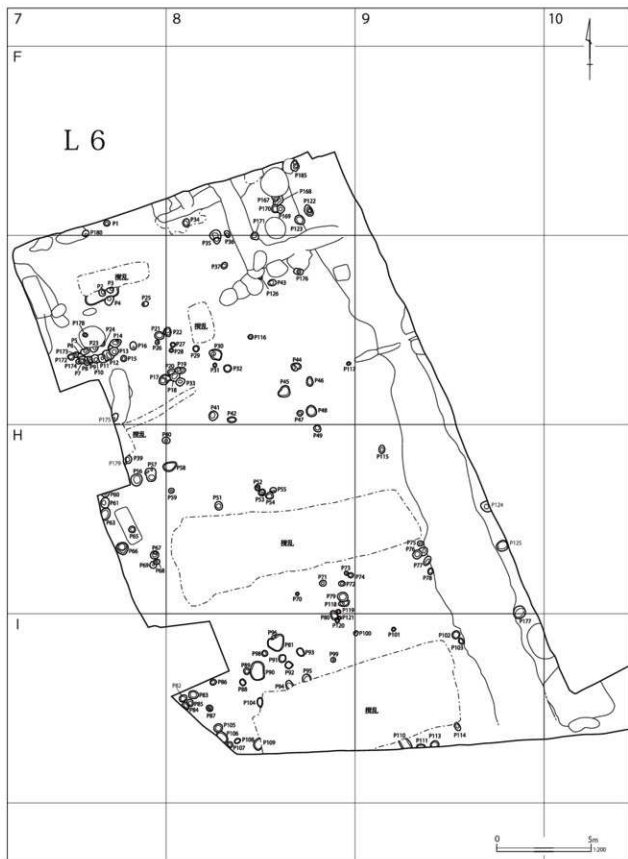
第2号畝跡 (第35図)

東側調査区の南東隅部、L7-H・I3グリッドに位置する。東西方向に延びる11条の畝間溝が検出された。畝跡の規模は、東西長5.85m、南北長3.83mの範囲である。畝間溝は同一方向を向き、概ね平行しているが、幅や長さはやや不揃いで、溝の途切れる箇所もある。溝の深さは4~10cmと浅く、覆土は、粘性の弱い褐色土を基調とする。遺物は出土していない。

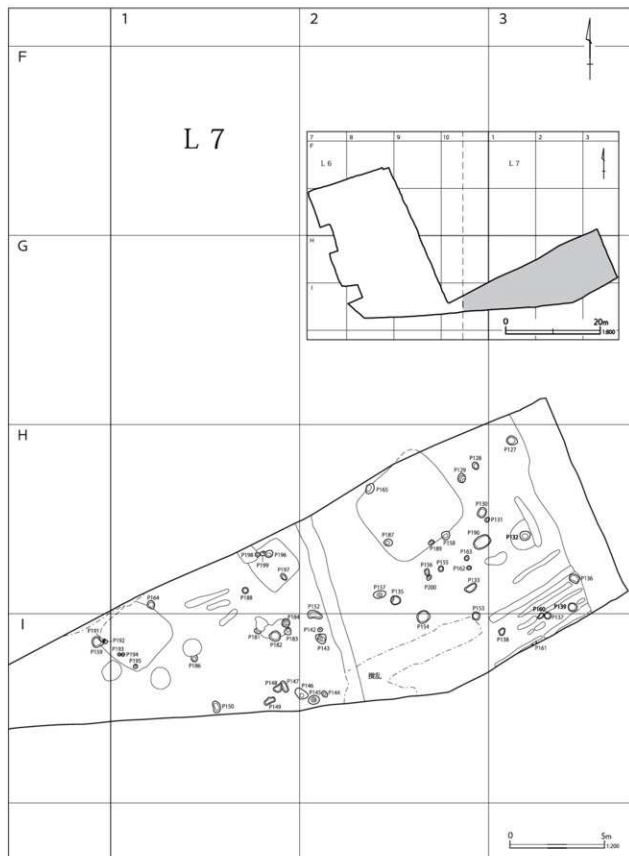
6-G7グリッドのP7~13の7基が列状に連続した状態で検出された。ビット底面の凹凸の連続性から畝跡の痕跡の可能性も考えられたが、明確にし得なかった。東側調査区では、第4・10号溝跡の周辺に偏りが見られる。

ビットの配列や配置、覆土の状態には、建物跡や欄列跡の存在を積極的に窺わせるような、規則性や柱痕跡を残すものはなかった。本調査区には建物が存在した可能性は低いと考えられる。

遺物を出土するものはほとんどなく、詳細な時期を判断することは難しい。覆土の状態から推して、近世以降に帰属するものと思われる。



第36図 ビット分布図(1)



第 37 図 ビット分布図 (2)

第11表 ビット一覧表

次数・区	グリッド	番号	長径/cm	短径/cm	深さ/cm
6次	L 6-F 7 (2)	1	31	30	37
		180	31	32	18
	L 6-F 8 (9)	34	43	34	14
		122	62	41	50
		123	54	43	22
		167	(25)	34	12
		168	60	(35)	9
		169	41	26	18
		170	41	(26)	14
		171	41	35	46
		185	56	43	(66)
	L 6-G 7 (26)	2	38	34	(42)
		3	36	30	(68)
		4	50	39	58
		5	43	29	23
		6	(15)	29	6
		7	42	(30)	26
		8	44	(20)	21
		9	4	(23)	16
		10	43	(34)	18
		11	40	49	28
		12	59	(29)	20
		13	64	43	27
		14	60	40	27
		15	34	31	21
		16	43	32	23
		17	(64)	46	31
		21	50	40	12
		23	42	(27)	20
		24	(26)	(11)	16
		25	35	22	24
		26	23	22	12
		172	36	32	8
		173	(25)	25	16
		174	25	(17)	15
		175	(37)	27	16
		178	25	20	25
	L 6-G 8 (26)	18	50	50	28
		19	55	31	31
		20	(28)	39	13
		22	49	34	17
		27	28	26	8
		28	21	20	5
		29	33	33	10
		30	69	52	8
		31	22	20	7
		32	42	40	7
		33	49	39	18
		35	71	55	20
		36	37	29	30
		37	36	31	13
		41	50	49	53
		42	46	30	14
		43	42	32	21
		44	52	39	21
		45	65	60	9
		46	50	35	12
		47	32	27	51
		48	60	53	7

次数・区	グリッド	番号	長径/cm	短径/cm	深さ/cm
6次	L 6-H 7 (12)	116	26	25	43
		117	22	17	5
		126	23	(13)	8
		176	49	(32)	22
		39	40	34	22
		56	64	62	22
		57	70	50	16
		60	(21)	40	12
		61	55	44	82
		63	67	50	18
		65	35	35	(38)
		66	67	64	27
	L 6-H 8 (17)	67	43	43	40
		68	28	28	48
		69	35	(28)	41
		179	(28)	(12)	10
		40	42	34	15
		49	39	34	7
		51	46	40	34
		52	31	26	27
		53	36	36	71
		54	41	35	34
		55	35	25	38
		58	74	48	9
		59	30	27	14
		70	18	18	10
		71	36	31	15
		72	35	25	18
		73	22	20	12
		74	29	25	9
		79	53	48	20
		118	60	(27)	33
		119	26	20	10
	L 6-H 9 (8)	75	34	26	13
		76	87	44	10
		77	55	30	10
		78	36	30	9
		115	43	30	12
		124	58	(44)	24
		125	(60)	56	46
		177	(60)	55	37
	L 6-I 8 (27)	80	45	35	17
		81	92	(71)	16
		82	41	33	8
		83	52	41	9
		84	40	25	8
		85	38	30	9
		86	34	27	12
		87	34	32	20
		88	35	31	8
		89	34	34	14
		90	98	74	9
		91	40	37	6
		92	38	36	8
		93	50	36	9
		94	(39)	39	19
		95	(38)	47	7
		96	21	(15)	15
		98	32	29	11

次数・区	グリッド	番号	長径 / cm	短径 / cm	深さ / cm
6次		99	25	24	23
		104	53	30	10
		105	49	43	16
		106	67	(36)	9
		107	33	29	14
		108	33	24	4
		109	(45)	52	9
		120	20	20	12
		121	18	16	11
	L 6- I 9 (8)	100	24	22	31
		101	21	18	11
		102	44	39	6
		103	36	26	6
		110	(52)	52	19
		111	45	(19)	13
		113	43	(31)	6
		114	46	28	19
	L 6- I 10 (3)	159	55	45	10
		191	(8)	15	10
		192	19	17	38
	L 7- H 1 (6)	164	44	40	11
		188	35	33	11
		196	45	36	57
		197	41	25	19
		198	25	24	17
		199	29	20	36
	L 7- H 2 (18)	128	40	34	10
		129	47	46	44
		130	52	42	7
		131	28	21	10
		133	65	37	10
		135	53	49	8
		152	80	40	7
		155	33	28	10
		156	37	25	11
		157	66	39	40

次数・区	グリッド	番号	長径 / cm	短径 / cm	深さ / cm
6次		158	47	41	46
		162	27	22	8
		163	27	24	10
		165	57	40	50
		187	45	39	-
		189	31	25	26
		190	94	65	11
		200	26	24	14
	L 7- H 3 (4)	127	57	47	13
		132	57	49	61
		136	54	42	15
		139	49	44	5
	L 7- I 1 (13)	146	69	46	56
		147	62	29	10
		148	(48)	29	13
		149	61	31	11
		150	62	36	15
		181	(21)	34	6
		182	58	55	12
		183	39	34	13
		184	44	43	21
		186	(31)	34	-
		193	17	16	-
		194	18	17	-
		195	22	21	26
	L 7- I 2 (6)	142	25	22	21
		143	56	50	29
		144	35	27	16
		145	59	44	40
		153	47	40	7
		154	72	63	9
	L 7- I 3 (4)	137	37	36	6
		138	42	30	9
		160	40	19	8
		161	(21)	19	4

V 第10・11・12次調査

1. 概要

第10・11・12次調査の調査地点は、遺跡範囲の南西部、国道16号西大宮バイパス線の南側に位置している。大グリッドでは、M6・N6グリッドにまたがる。

各調査地点の位置は、平成12年度に調査を実施した第2次調査の第2地点北側に第10次調査A区、その西側に第10次調査B区・第11次調査区、第12次調査A・B区がそれぞれ隣接する。

第10次調査区は、現道を境に2箇所に分かれており、便宜上、北側をA区、南側をB区と呼称して調査を行った。調査面積は1,599㎡である。

第10次調査で検出された遺構は、縄文時代の土壌1基、近世の土壌12基、溝跡15条、畝跡4箇所、性格不明遺構1基、ピット25基である。

第11次調査区は、第10次調査B区の西側隣接地にあたり、第10次調査と併行して調査を実施した。調査面積は132㎡である。

第11次調査で検出された遺構は、近世の土壌1基、溝跡2条である。なお、検出された2条の溝跡は第10次調査B区から続く区画溝で、同一のものである。

第12次調査区は、現道によって2箇所に分かれており、便宜的に南側をA区、北側をB区と呼称した。ちょうど第10次調査B区・第11次調査区を南北に挟み込むような形である。調査面積は648㎡である。

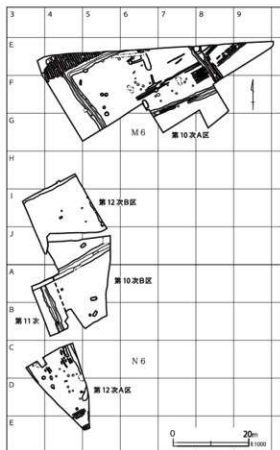
第12次調査で検出された遺構は、近世の土壌6基、溝跡6条、畝跡3箇所、ピット21基である。遺構の大半はA区に分布している。

第10・11・12次調査区は、台地の奥に入るとためか、縄文時代前期の土壌が1基検出されているほかは、近世の遺構が主体であった。

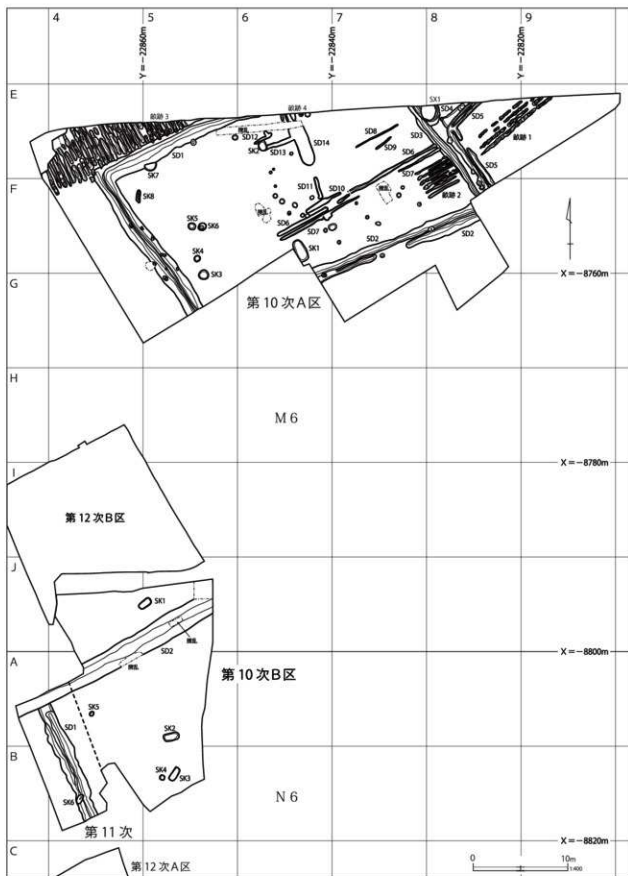
各調査区から、方形ないし長方形に区画された区画溝が見つかり、台地奥の平坦部の土地

利用の一端が明らかになった。区画された範囲内には、土壌が散漫に分布する程度であった。ただし、第10次調査A区では、数条から数10条の平行する畝間溝をもつ畝跡が4箇所で見つかり、注目される。調査区の制約のため全容を把握することはできなかったが、第1号畝跡の様相から推して、周辺には大規模な耕作地が広がっていたことを窺わせるものである。

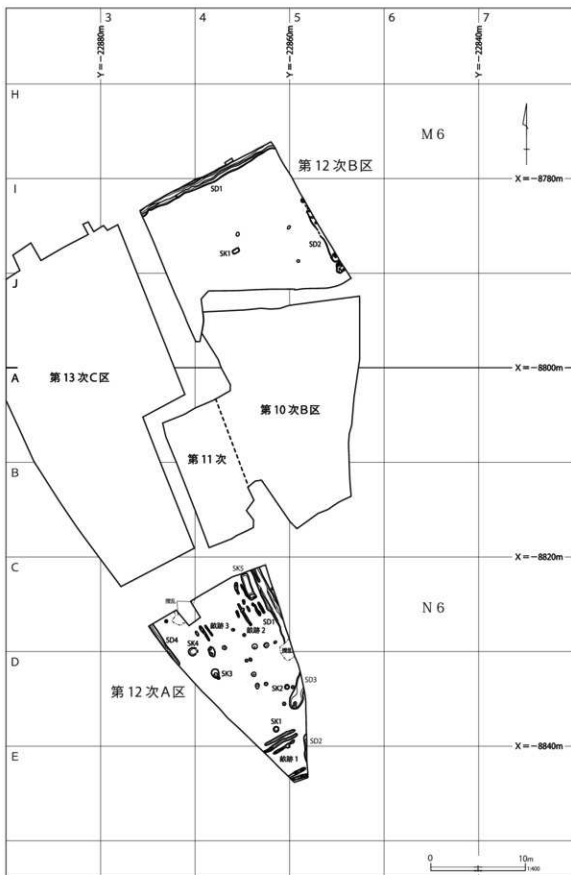
隣接する第2地点の調査において、北側を溝跡で直線的に区切り、周囲を「コ」字状の柵列によって囲んだ4間×2間の大型の掘立柱建物跡が検出されており、周辺に広がる方形区画とともに、屋敷地周辺の土地利用のあり方を復元する上で貴重な成果を挙げることができた。



第38図 第10・11・12次調査区全体図



第39图 第10・11・12次調査区分割图(1)



第 40 図 第 10・11・12 次調査区分割図 (2)

2. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 土壌

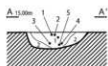
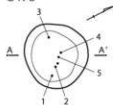
縄文時代の遺構は、第10次調査A区から土壌1基を検出した。台地の奥まった場所に単独で位置するもので、周囲には縄文時代の遺構はない。

第10次A区第3号土壌 (第41図)

M6-F・G5グリッドに位置する。平面形は不整形円で、断面形は墳底に丸味をもつ。規模は長径1.07m、短径0.98m、深さ0.26mである。長軸方位は東西方向を指す。

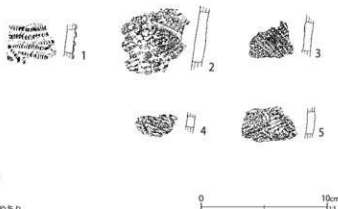
1は結節浮線文が施文される前期終末の土器で、

SK 3



SK 3

- 1 暗褐色土
2 にぶい黄褐色土
- ロームブロック (φ 5 ~ 10 mm) シルト しまりややあり
粘性弱い 遺物含む
- ロームブロック (φ 2 ~ 3 cm) シルト しまりややあり
粘性弱い



第41図 第10次A区第3号土壌・出土遺物

(2) グリッド出土遺物

グリッドから出土した縄文時代の遺物は、ほとんどが第10次調査A区からの出土で、土器はほぼ前期のものと思われる。石器は形状から中・後期のものも含まれている。

縄文土器 (第42図1~10)

9は前期中葉の、胎土に繊維を含む黒浜式土器である。

1~8・10は前期終末の十三菩提式土器である。

1は口縁部が折り返し状の先細り状を呈し、輪状の接合部から剥離しており、口唇部に細かな刻みが施され、口唇部直下に横位の結節浮線文が施

器壁も6mm前後と薄い土器である。集合結節浮線文が使用されることから、前期終末の十三菩提式土器に比定される。

2は雲母が少量含まれる破片で、LR縄文上に浅い角状沈線が施文されている。胎土に石英、長石粒子が多く含まれ、白色粒子が目立つ。

3はRL縄文、4はRL縄文上に縦位の結節浮線文が施文される。5はRLとLRの異原体による羽状縄文が施文される。いずれも、前期終末の十三菩提式土器である。

されている。

2は内湾する口縁部破片で、口縁部に横位3本の結節浮線文が施文されている。

3~5は地文LR縄文上に、縦位の結節浮線文を垂下させている。6は横位施文されている。

7・8はLR縄文を施文する破片で、7には原体の末端を結節した回転文が、8には部分的に異原体のRL縄文が施文され、羽状が構成される。

石器 (第42図11~19)

11は黒曜石製の石鏃で、ほぼ完形である。やや厚みがあるが、均整のとれた形である。

12は搔器で、13~16は打製石斧である。13・16は頭部、14は刃部の一部が欠損する。16は一

部礫表を残す調整剥離が施されている。13は頭部を欠損するが、頭部が三角形に尖る形状になる可能性もある。14はいわゆる分銅形石斧で、後期の所産と思われる。

17は欠損しているが、蔽石である。

18は細長い礫に蔽打が施され、磨きが施され

た石棒である。断面形がやや扁平であり、欠損している。

19は滑石製の垂飾である。柔らかい石材のせいか、穿孔部分で割れている。片側の側縁の穿孔部近くに挟りが入っており、勾玉状を意識しているものと考えられる。



第42図 第10次グリッド出土遺物

第12表 出土石器観察表

番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	図版
第42図11	石鏃	黒曜石	2.0	[1.4]	0.5	0.8	10次 E7	20-1
第42図12	石器	砂岩	7.1	[6.9]	1.8	87.5	10次 SD3	19-3
第42図13	打製石斧	ホルンフェルス	[5.4]	5.6	1.4	52.7	10次 SD1 剥片	19-3
第42図14	打製石斧	ホルンフェルス	[8.8]	[6.5]	2.8	162.4	10次 破3 剥片	19-3
第42図15	打製石斧	ホルンフェルス	8.4	4.8	2.1	90.3	10次 SD1 完形	19-3
第42図16	打製石斧	ホルンフェルス	[5.0]	4.9	1.4	40.5	10次 破3	19-3
第42図17	石器	ホルンフェルス	5.8	3.8	3.4	118.6	10次 SD1	19-3
第42図18	石棒	緑色岩	[7.2]	[3.1]	[2.1]	66.7	10次 F7 欠損	19-3
第42図19	垂飾	滑石	[2.9]	1.9	0.7	5.0	10次 F5 ほぼ完形	20-2

3. 近世の遺構と遺物

(1) 土壌

近世以降と考えられる土壌が、各調査区から合計19基検出された(第43～46図)。

その内訳は、第10次調査A区7基・B区5基、第11次調査区1基、第12次調査A区5基・B区1基である。

第10次調査A区で検出された7基の土壌は、第1～3号溝跡によって区画された東西約34m、南北約20mの範囲に散漫に分布する。その多くは直径0.6～0.8mの円形ないし楕円形の土壌である。ただし、第1号土壌は平面長方形で、長さ2.5mを超える比較的大型のものであり、人為的な埋戻しが想定される。

第10次A区第1号土壌 (第43図)

M6-F6グリッドに位置する。東西に平行するように延びる第2号溝跡と第6・7号溝跡によって区画された空間の西端にあたり、長軸方向は第6・7号溝跡の溝端部に概ね合致している。平面形は隅丸長方形で、深く掘り込まれている。規模は長軸2.55m、短軸1.18m、深さ0.31mである。長軸方位はN-23°-Wを指す。覆土は、暗褐色土による埋戻しである。

遺物が出土していないため、詳細な帰属時期は不明であるが、周辺の区画溝との有機的な関連が窺われる。

第10次A区第2号土壌 (第43図)

M6-E6グリッドに位置する。第12・13号

溝跡と重複し、第12号溝跡によって北壁の一部が壊されている。

平面形は楕円形で、規模は長径1.05m以上、短径0.84m、深さ0.16mである。長軸方位はN-18°-Wを指す。

遺物は出土していない。

第10次A区第4号土壌 (第43図)

M6-F5グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径0.68m、短径0.60m、深さ0.11mである。

遺物は出土していない。

第10次A区第5号土壌 (第43図)

M6-F5グリッドに位置する。東側に第6号土壌が近接し、2基一対で並んでいる。

平面形は楕円形で、断面形は皿状を呈する。規模は長径0.80m、短径0.70m、深さ0.24mである。長軸方位はN-71°-Wを指す。

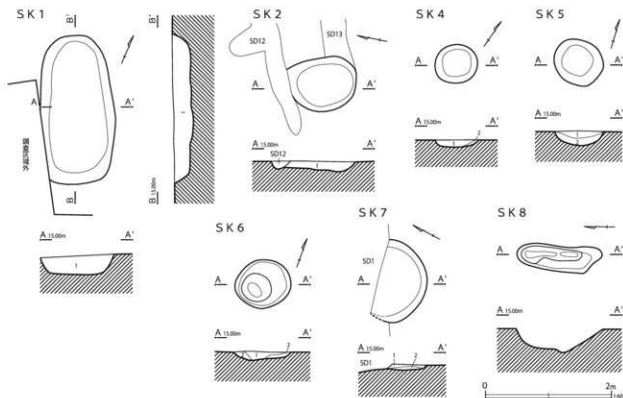
遺物は出土していない。

第10次A区第6号土壌 (第43図)

M6-F5グリッドに位置し、第5号土壌と並列した状態で検出された。両土壌は、同形・同規模であり、有機的な関連をもつ可能性がある。

平面形は楕円形で、墳底はピット状に浅く掘り込まれていた。規模は長径0.86m、短径0.76m、深さ0.14mである。長軸方位はN-37°-Wを指す。覆土はローム土を主体とする埋戻しである。

遺物は出土していない。



SK1
1 暗褐色土 ロームブロック(φ1~2cm)均等を含む シルト ローム粒子
シルト しまり・粘性弱い 埋戻し土

SK2
1 褐色土 ロームブロック(φ1~3cm) ローム粒子 シルト
しまり・粘性弱い

SK4
1 にぶい黄褐色土 ロームブロック・粒子多量 シルト しまりややあり 粘性強い
2 褐色土 ローム主体で暗褐色土混入 シルト しまりややあり 粘性弱い

SK5・6
1 にぶい黄褐色土 ロームブロック(φ1~2cm)・粒子 シルト
しまりややあり 粘性弱い
2 褐色土 ローム主体、暗褐色土混入 シルト しまりややあり
粘性弱い

SK7
1 褐色土 ロームブロック(φ3~5cm)少量 焼土粒子微量
シルト しまり 粘性ややあり
2 にぶい黄褐色土 ローム粒子多量 シルト しまりややあり 粘性弱い

第43図 第10次A区土壌

第13表 第10次A区土壌一覧表(第43図)

番号	グリッド	平面形	長軸方位	長径 / m	短径 / m	深さ / m	重複遺構		
							土壌より古	土壌より新	不明
1	M6-F6	隅丸長方形	N-23°-W	2.35	1.18	0.31			
2	M6-E6	楕円形	N-18°-W	1.05	0.84	0.16		SD12	SD13
4	M6-F5	円形	-	0.68	0.60	0.11			
5	M6-F5	楕円形	N-71°-W	0.80	0.70	0.24			
6	M6-F5	楕円形	N-37°-E	0.86	0.76	0.14			
7	M6-E5	円形	-	1.30	(0.80)	0.08		SD1	
8	M6-F4	不整形	N-0°	1.35	0.40	0.36			

第10次A区第7号土壌(第43図)

M6-E5グリッドに位置する。第1号溝跡によって北半部が大きく削平されている。そのため全容は不明であるが、平面形は円形と推定される。規模は長径1.30m、短径0.80m以上、深さ0.08mである。覆土は褐色土とにぶい黄褐色土に分

層される。

遺物は出土していない。

第10次A区第8号土壌(第43図)

M6-F4グリッドに位置する。平面形は不整形で、掘り込みは深く、墳底に凹凸が認められる。規模は長軸1.35m、短軸0.40m、深さ0.36mで

遺物は出土していない。

第10次B区第1号土壤 (第44图)

平面形は長方形で、掘り込みは浅い。規模は長軸1.46m、短軸0.73m、深さ0.08mである。長軸方位はN-51°-Eを指す。覆土は褐色土の単一層である。

遺物は、常滑焼胴部破片1・瓦質土器鉢破片が

時期は中世に遡る可能性がある。

N 6-A 5 グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は長軸1.67m、短軸0.80m、深さ0.20mである。長軸方位はN-79°-Eを指す。覆土は2層に分かれ、下層はローム土を主体とする。遺物は出土していない。

N6-B5グリッドに位置する。平面形は長方形で、掘り込みは浅い。規模は長軸1.52m、短軸0.67m、深さ0.04mである。長軸方位はN-33°-Eを指す。覆土は褐色土の単一層である。

遺物は出土していない。

N6-B5グリッドに位置し、東側に第3号土



第14表 第10次B区・第11次土壌一覧表(第44図)

番号	グリッド	平面形	長軸方位	長径 /m	短径 /m	深さ /m	重複遺構		
							土壌より古	土壌より新	不明
1	M6-J4・5	長方形	N-51°-E	1.46	0.73	0.08			
2	N6-A5	長方形	N-79°-E	1.67	0.80	0.20			
3	N6-B5	長方形	N-33°-E	1.52	0.67	0.04			
4	N6-B5	円形	—	0.54	0.52	0.12			
5	N6-A4	円形	—	0.48	0.46	0.25			
6	N6-B4	楕円形	N-30°-E	1.07	0.56	(0.25)		SD1	

墳が隣接する。平面形は円形である。規模は長径0.54m、短径0.52m、深さ0.12mの小規模なものである。覆土はローム粒子やローム土を主体とする黄褐色土・明黄褐色土が堆積していた。

遺物は出土していない。

第10次B区第5号土壌(第44図)

N6-A4グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は長径0.48m、短径0.46m、深さ0.25mの小規模なものである。覆土は黄褐色土の単一層である。

遺物には、瓦質土器焙烙(平底)口縁部破片1が出土している。

第11次調査区は第10次調査B区の西側に隣接しており、区画溝と考えられる第1号溝跡によって壊された第6号土壌が1基検出された。

第11次第6号土壌(第44図)

N6-B4グリッドに位置する。第1号溝跡によって上面が削平されている。

平面形は楕円形で、規模は長径1.07m、短径0.56m、深さ0.25m以上である。長軸方位はN-30°-Eを指す。

遺物は出土していない。

第12次調査A区では、溝跡や畝跡を避けるように散在した分布を示す土壌5基が検出された。

第12次A区第1号土壌(第45図)

N6-D4グリッドに位置し、第1号畝跡の北側に隣接する。平面形は円形である。規模は長径0.58m、短径0.54m、深さ0.20mである。覆土はにぶい黄褐色土を主体とする。

遺物は出土していない。

第12次A区第2号土壌(第45図)

N6-D4グリッドに位置する。第3号溝跡の西側に隣接する。平面形は円形である。規模は長径0.48m、短径0.46m、深さ0.26mである。覆土は暗褐色土の単一層である。

遺物は出土していない。

第12次A区第3号土壌(第45図)

N6-D4グリッドに位置する。平面形は不整形で、掘り込みは深く、墳底はピット状を呈する。規模は長軸1.16m、短軸0.78m、深さ0.52mである。長軸方位はN-36°-Wを指す。

覆土は5層に分層され、暗褐色土・褐色土・黒褐色土が互層をなしている。

遺物は出土していない。

第12次A区第4号土壌(第45図)

N6-C・D3・4グリッドにまたがる。平面形は楕円形で、東壁の一部が境乱によって壊されている。

規模は長径0.96m以上、短径0.82m、深さ0.30mである。長軸方位はN-85°-Eを指す。覆土は3層に分層される。

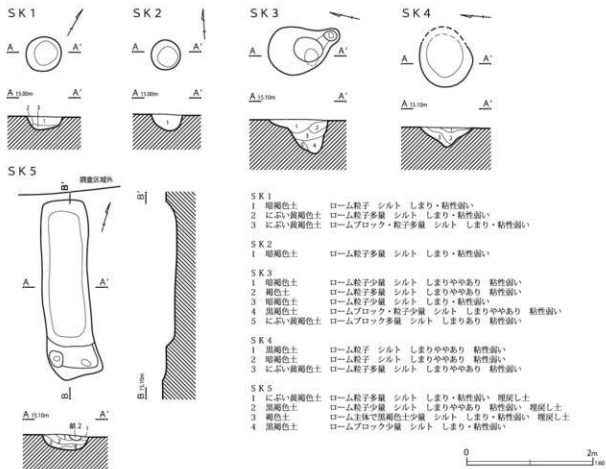
遺物は出土していない。

第12次A区第5号土壌(第45図)

N6-C4グリッドに位置する。第2号畝跡と重複し、壊されている。

平面形は長方形で、墳底に段差を造作する。規模は長軸2.80m、短軸0.70m、深さ0.24mである。長軸方位はN-20°-Wを指す。覆土は4層に分層される。

遺物は出土していない。



第45図 第12次A区土壌

第12次調査B区では、第1・2号溝跡によって区画された部分の中央に単独で長方形土壌が1基検出された。

第12次B区第1号土壌（第46図）

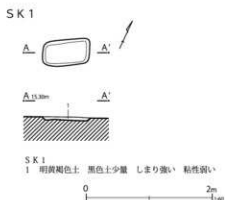
調査区のほぼ中央、M6-I 4グリッドに位置する。周囲にはピットが散在している。

平面形は長方形で、掘り込みは浅い。規模は長軸0.74m、短軸0.40m、深さ0.05mである。長軸方位はN-61°-Eを指す。覆土は明黄褐色土の単一層である。

遺物が出土していないため時期を特定することはできないが、形状や覆土の状態から近世以降に帰属するものと考えられる。

（2）溝跡

溝跡は、第10次調査A区14条、第10次調査



第46図 第12次B区土壌

B区・第11次調査区2条、第12次調査A区4条、第12次調査B区2条の計18条を検出した。

地境を直線的に延び、L字形に屈曲する溝が目立つ。

第15表 第12次A区土壌一覧表 (第45図)

番号	グリッド	平面形	長軸方位	長径 /m	短径 /m	深さ /m	重複遺構		
							土壌より古	土壌より新	不明
1	N6-D4	円形	—	0.58	0.54	0.20			
2	N6-D4	円形	—	0.48	0.46	0.26			
3	N6-D4	不整形	N-36°-W	1.16	0.78	0.52			
4	N6-C・D3・4	楕円形	N-85°-E (0.96)	0.82	0.30				
5	N6-C4	長方形	N-20°-W	2.80	0.70	0.24		畝2	

第16表 第12次B区土壌一覧表 (第46図)

番号	グリッド	平面形	長軸方位	長径 /m	短径 /m	深さ /m	重複遺構		
							土壌より古	土壌より新	不明
1	M6-I4	長方形	N-61°-E	0.74	0.40	0.05			

第10次A区第1号溝跡 (第47・48図1～6)

調査区西側に位置する。南北方向から東側へほぼ直角に曲がっている。土層断面の観察では水が流れた痕跡は見られず、地境などの区画を目的に掘削されたものと考えられる。また、橋脚状に対向するピットが検出されている。

第48図1は瀬戸美濃系陶器の鉢で、灰釉に緑釉を流し掛けする。所謂大平鉢である。断面を砥具に二次利用している。2は瀬戸美濃系陶器播鉢の口縁部破片で、17世紀前半の製品である。3は瀬戸美濃系陶器瓶類の破片で、外面に漆黒色の鉄釉を施す。4・5は陶器播鉢の体部破片である。4は16～17世紀代の瀬戸美濃系陶器である。5は胎土が珪石質で備前産の可能性が高い。6はかわかけの底部破片で胎土は粗雑である。

実測・図示できなかったが、瀬戸美濃系陶器長石釉皿口縁部細片1、御室碗体部細片1・瓦質土器焙烙体部片1・かわかけ片3が出土している。遺物の様相から17世紀から18世紀前半頃に機能していた可能性が高い。

第10次A区第2号溝跡 (第47・48図7・8)

調査区中央南寄りに位置する。東西方向に走行する直線的な区画溝である。調査区域外で、東端は第3号溝跡に、西端は第1号溝跡にそれぞれ交差するものと思われる。

第48図7は肥前系陶器の銅緑釉皿で、内面は蛇の目状釉剥がされる。17世紀後半～18世紀前

半の所産である。被熱しており、煤の付着も認められる。8は瀬戸美濃系陶器の播鉢体部片で16～17世紀代の製品である。破片を砥具として二次利用している。

実測・図示できなかったが、常滑焼胴部片1 (中世)・瀬戸美濃系陶器長石釉丸碗口縁部片1・土質土器焙烙 (丸底) 破片1・かわかけ片6が出土している。遺物は少ないが、第1号溝跡とほぼ同時期の様相を示している。

第10次A区第3号溝跡 (第47図)

調査区北東側に位置する。調査区を縦断するように南東方向から北西方向に延びる直線的な区画溝である。

第10次A区第4・5号溝跡 (第47図)

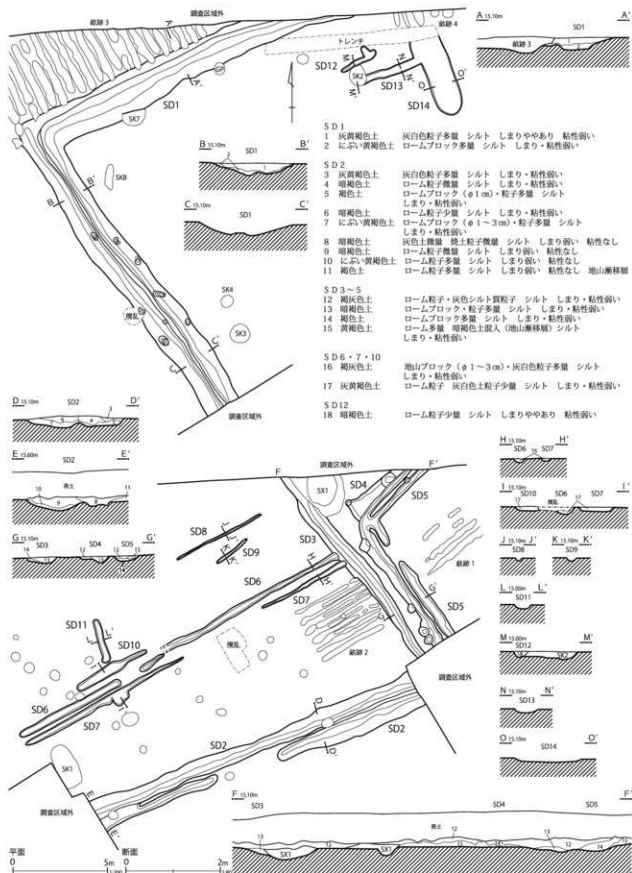
調査区北東側に位置する。第4号溝跡は、第3号溝跡に並行して北西方向に向かって走行した後、調査区内で北東方向に大きく屈曲しながら調査区域外に延びる。第4号溝跡の内側に接するように、第5号溝跡は走行し、一部途切れる。

第10次A区第6号溝跡 (第47図)

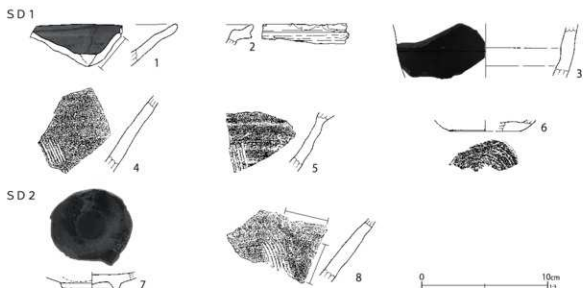
調査区中央から北東寄りに位置する。第7号溝跡と並走する直線的な溝跡で、溝の東端は第3号溝跡と交差する。

第10次A区第7号溝跡 (第47図)

調査区中央から北東寄りに位置する。第6号溝跡と平行して延びる幅の狭い溝跡である。溝の東端は第3号溝跡と交差する。



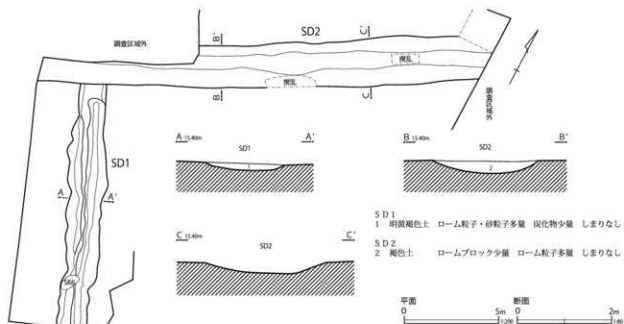
第47图 第10次A区第1~14号沟迹



第48图 第10次A区第1·2号溝跡出土遺物

第17表 第10次A区第1·2号溝跡出土遺物觀察表(第48圖)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	鉢	—	[3.3]	—	H I K	5	普通	淡黄	瀬戸美濃系 転用砥具 SD1	20-3
2	陶器	擂鉢	—	[1.6]	—	I K	5	普通	にがい黄	瀬戸美濃系 内外面輪軸 SD1・F5	20-3
3	陶器	瓶類	—	[4.2]	—	I K	20	良好	にがい黄	瀬戸美濃系 SD1・F5	20-3
4	陶器	擂鉢	—	[6.0]	—	E I K	5	普通	にがい黄	瀬戸美濃系 SD1・F5	20-3
5	陶器	擂鉢	—	[4.7]	—	E I K	5	普通	灰黄褐	備前系か SD1	20-3
6	かわらけ	皿	—	[0.9]	—	H I K	30	普通	にがい黄 SD1		20-3
7	陶器	皿	—	[1.3]	4.5	H I K	75	良好	灰オリーブ	肥前系 蛇の目状輪軸 内外面備付着 SB2	20-4
8	陶器	擂鉢	—	[6.0]	—	E H I K	5	普通	黄灰	瀬戸美濃系 転用砥具 SD2	20-3



第49图 第10次B区・第11次第1・2号溝跡

第10次A区第8・9号溝跡 (第47図)

調査区中央北寄りに位置する。第6号溝跡の北側を東西方向に走行する小規模な溝跡である。

第10次A区第10・11号溝跡 (第47図)

調査区中央北寄りに位置する。第10号溝跡は、第6号溝跡の北側を走行する。第11号溝跡は南北方向に走行し、第10号溝跡に交差する。

第10次A区第12・13・14号溝跡 (第47図)

調査区中央北寄りに位置する。南北方向に走行する第14号溝跡に、東西方向に走行する第13号溝跡が交差する。第12号溝跡は第13号溝跡の北側を並走する。

第10次B区・第11次第1号溝跡 (第49図)

調査区西側の壁寄りを南北方向に延びる。北側で第2号溝跡と交差し、土層断面の観察から本溝の方が古いことが判明した。

第10次B区・第11次第2号溝跡 (第49図)

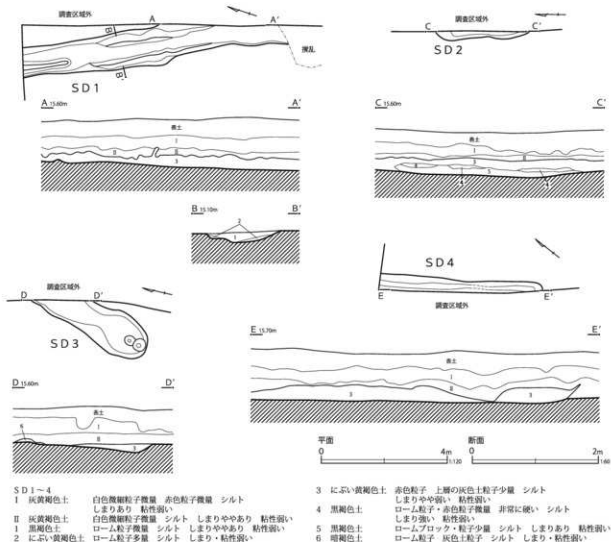
調査区北側を東西方向に横断し、西側で第1号溝跡と交差する区画溝である。

第12次A区第1号溝跡 (第50図)

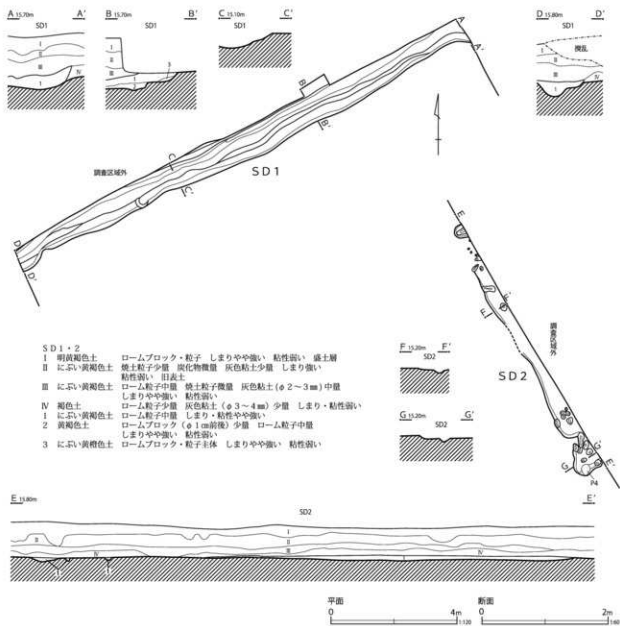
調査区北隅の壁際を南北方向に走行する。北側の第10次調査B区・第11次調査区で検出された第1号溝跡と同一のものである。

第12次A区第2～4号溝跡 (第50図)

第2号溝跡は調査区南端の東壁際に顔をのぞかせている。第3号溝跡は調査区東側中央に位置す



第50図 第12次A区第1～4号溝跡



第51図 第12次B区第1・2号溝跡

る土壌状の溝跡である。第4号溝跡は調査区の北西隅の壁際に沿って走行する幅の狭い溝である。

第12次B区第1・2号溝跡 (第51・52図)

第1号溝跡は調査区の北壁際を東西方向に延びている。遺物は、第52図1の擦痕のある緑泥片岩が出土した。第2号溝跡は調査区の東壁際を南北方向に延びる浅い溝である。



第52図 第12次B区第1号溝跡出土遺物

第18表 第12次B区第1号溝跡出土遺物観察表 (第52図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	石製品	砥石	長さ [5.6]	幅 [4.4]	厚さ 0.8	重さ 25.6 g				表裏面擦痕多数 緑泥片岩 SD1	20-5

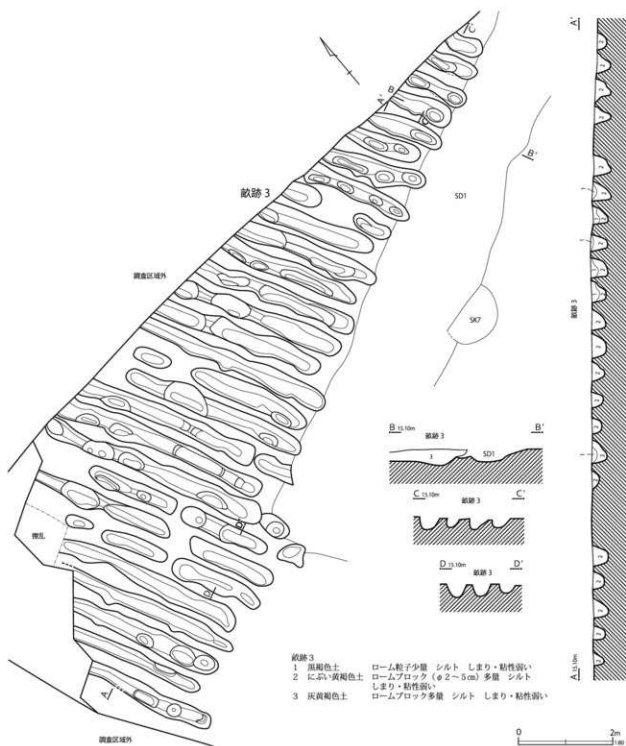
第10次A区第1号款跡 (第53回)

第10次A区第2号畝跡 (第53図)

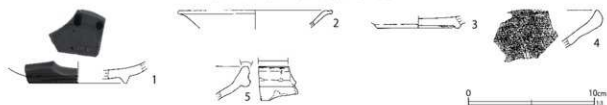
第10次A区第3号畝跡 (第54・55図)

第55図1は肥前系磁器の皿で、所謂くわんか手である。18世紀代の製品である。2は肥前系陶器の皿で、内外面とも透明釉を施軸する。3は瀬戸美濃系陶器の丸皿で、黄瀬戸釉に近い灰釉を施し、内面に緑釉を散らす。17世紀前半に位置づけられる。4・5は瀬戸美濃系陶器の播鉢で、いずれも大窯段階の所産である。この他に、常滑焼甕破片2・瀬戸美濃系陶器天目茶碗破片2・粗製の肥前磁器皿破片1・瀬戸美濃系磁器端反碗口縁破片1、型紙髹繪碗底面破片1・植木鉢破片1・かわかけ片1が出土している。





第54图 第10次A区第3号畝跡



第55图 第10次A区第3号畝跡出土遺物

第19表 第10次A区第3号畝跡出土遺物観察表 (第55図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	皿	—	[1.7]	(7.8)	K	15	良好	灰白	肥前系 畝3	20-6
2	陶器	皿	(12.0)	[1.4]	—	I K	10	普通	黄褐	肥前系 内外面施釉 畝3	20-6
3	陶器	皿	—	[1.0]	(6.4)	H I	20	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面施釉 重ね焼き痕 畝3	20-6
4	陶器	播鉢	—	[3.0]	—	H I	5	普通	浅黄	瀬戸美濃系 畝3	20-6
5	陶器	播鉢	—	[2.7]	—	H I K	5	普通	淡黄	瀬戸美濃系 転用磁具 畝3	20-6

17世紀以前の遺物が一定量認められるが、最新の遺物は19世紀以降のものである。

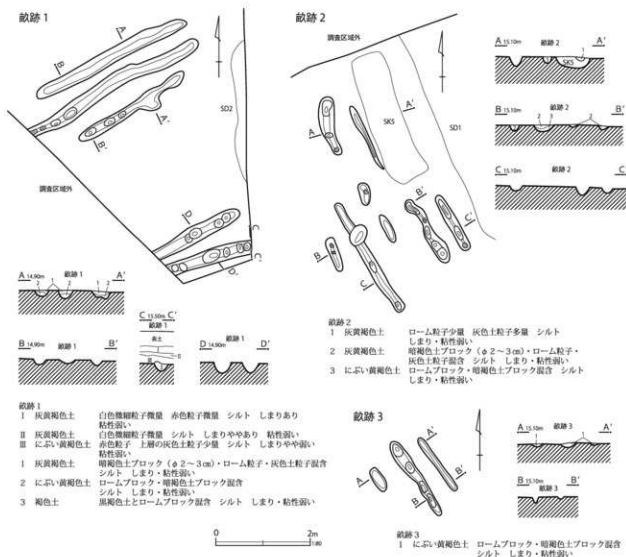
第10次A区第4号畝跡 (第53図)

M6-E6グリッドに位置する。調査区の北壁際に並ぶ4条の畝間溝が検出された。検出された範囲は東西長3.12mを測る。

第12次A区第1号畝跡 (第56図)

N6-D・E4・5グリッドに位置する。5条の畝間溝が検出された。検出範囲は東西長4.00m、南北長5.00mである。主軸方位はN-60°-Eを指す。

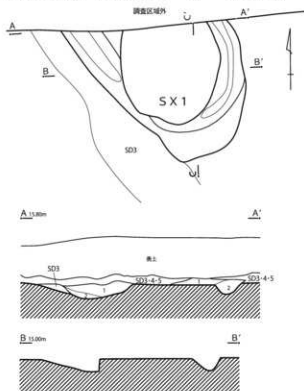
第12次A区第2号畝跡 (第56図)



N6-C4グリッドに位置する。5条の畝間溝が検出された。検出範囲は東西長2.70m、南北長4.80mである。主軸方位はN-26°-Wを指す。

第12次A区第3号畝跡（第56図）

N6-C4グリッドに位置する。3条の畝間溝が検出された。検出範囲は東西長1.40m、南北長1.80mである。主軸方位はN-34°-Wを指す。



第57図 第10次A区第1号性格不明遺構

(5) ビット

ビットは調査区全体から46基検出された（第58・59図）。その内訳は、第10次調査A区が25基、第12次調査A区が17基、同B区が4基である。平面形は、円形もしくは楕円形のものが大半を占めている。規模は直径26～86cmと幅があり、概ね径40～50cm、深さ20～30cmにまとまっている（第21・22表）。

覆土は暗褐色土や黒褐色土、灰褐色土が主体で、全体にしまりのないものが多い。

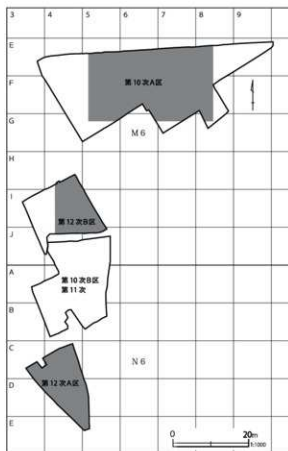
各調査区ともに分布は散漫であり、集中箇所は認められない。わずかに第10次調査A区で第1・

(4) 性格不明遺構

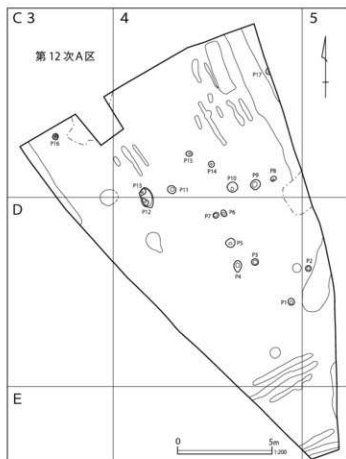
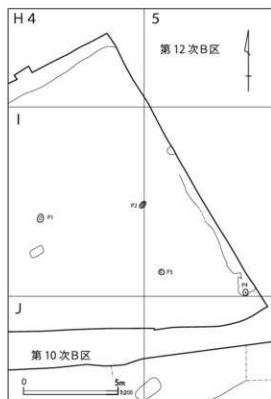
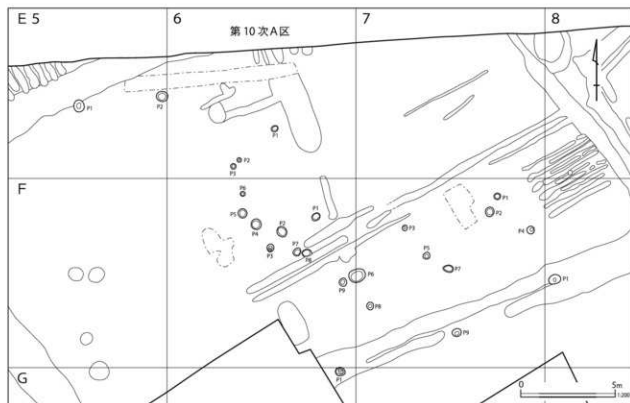
第10次A区第1号性格不明遺構（第57図）

M6-E7・8グリッドに位置する。直径約2.20mの環状に溝跡を巡らした遺構で、溝の深さは0.20mである。長軸方位はN-28°-Wを指す。

遺物が出土していないため、時期は特定できない。また、性格についても明確でない。



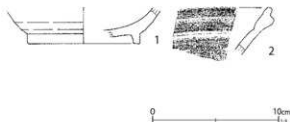
第58図 ビット分布図（1）



第59図 ビット分布図(2)

2号溝跡に囲まれた範囲内に小規模な集中が見られる程度で、建物跡や柵列等を想定することは難しい状況である。

遺物を出土するビットは少なく、わずかに第10次調査A区第1号溝跡と重複するM6-E5グリッドP1から第60図1の陶器片口鉢、2の陶器播鉢の破片が出土している。



第60図 第10次A区ビット出土遺物

第20表 第10次A区ビット出土遺物観察表 (第60図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	片口鉢	—	[2.9]	(8.8)	I K	25	良好	淡黄	瀬戸美濃系 E5-P1	20-7
2	陶器	播鉢	—	[3.7]	—	E H I K	5	普通	灰黄	瀬戸美濃系 E5-P1	20-7

第21表 第10次ビット一覧表

次数・区	グリッド	番号	長径 / cm	短径 / cm	深さ / cm
10次A区	M6-E5 (2)	1	64	54	33
		2	60	54	36
	M6-E6 (3)	1	36	32	25
		2	26	22	15
	M6-F6 (9)	3	30	30	12
		1	48	38	38
		2	58	50	10
		3	40	36	31
		4	55	55	17
		5	50	47	11
		6	27	26	16
		7	44	38	12
		8	50	(38)	14
		9	44	40	21
	M6-F7 (9)	1	36	34	15
		2	50	46	33
		3	30	27	19
		4	38	38	31
		5	36	36	23
		6	86	68	17
		7	55	38	18
		8	40	36	31
		9	50	40	19
	M6-F8	1	65	(44)	(13)
	M6-G6	1	50	46	(38)

(6) グリッド出土遺物

第10次調査区から、明確な遺構に伴わずに出土した中・近世の遺物を第61図に一括した。2が第10次調査B区で表採されているほかは、すべて第10次調査A区からの出土である。

第61図1は肥前系磁器の碗である。胎質の印象はやや粗製であるが、高台部は高く、シャープな

第22表 第12次ビット一覧表

次数・区	グリッド	番号	長径 / cm	短径 / cm	深さ / cm
12次A区	N6-C3	16	32	30	23
		8	30	22	14
	N6-C4 (8)	9	54	54	15
		10	56	54	15
		11	46	42	20
		13	62	(50)	25
		14	30	30	20
		15	35	26	18
		17	34	(17)	18
	N6-D4 (7)	1	35	33	18
		3	36	34	10
		4	60	42	20
		5	50	47	15
		6	36	28	13
		7	30	29	13
		12	62	(60)	35
	N6-D5	2	30	30	23
12次B区	M6-14 (2)	1	43	32	13
		2	43	24	15
	M6-15 (2)	3	29	29	13
		4	35	28	17

作りである。外面には花文を染付する。17世紀後半に位置づけられる。

2は古瀬戸系陶器の緑釉小皿で、口縁部に灰釉を施す。口縁部は大きく外反する。古瀬戸後IV新期に比定され、15世紀後葉の所産である。

3も古瀬戸系緑釉小皿で、底部破片である。遺存部分は露胎である。底面には糸切痕が認められる。

古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期頃、15世紀中葉～後葉の所産と考えられる。

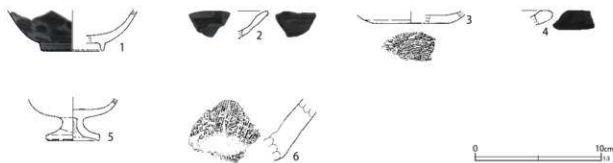
4は古瀬戸系陶器折縁深皿の口縁部小破片である。内外面ともに灰釉を施す。口縁端部は丸く収められる。古瀬戸後Ⅰ期段階、14世紀後葉に比定される。

5は陶器の仏飯器と考えられる。内外面に透明釉を施しており、灰白色の色調を呈する。京都信楽系陶器である可能性が考えられる。概ね18～19世紀代の所産であろう。

6は瀬戸美濃系陶器播鉢で、橙色系の胎土に錆釉を施すものである。内面にはやや密に摺目が認められる。

められる。16世紀前後の所産である可能性が高いが、内外面には後世の磨滅・傷が多く認められる。

この他に、細片のため掲載し得なかった遺物には、常滑焼甕胴部（中世）・刷毛目文を施す肥前系陶器片口鉢口縁部1（17世紀後葉～18世紀前葉）（以上第10次調査B区N6-A5グリッド）・瀬戸美濃系京焼風陶器色絵碗底部（18世紀）（第10次調査B区N6-G5グリッド）・肥前系磁器粗製皿（18世紀）・酸化コバルトを施す瀬戸美濃系磁器碗（19世紀）（以上第10次調査A区表採）が認められた。



第61図 第10次グリッド出土遺物

第23表 第10次A・B区グリッド出土遺物観察表（第61図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	—	[3.2]	(4.7)	K	30	良好	灰白	肥前系 A区 トレンチ11	20-8
2	陶器	縁軸小皿	—	[2.2]	—	H I	5	普通	灰白	古瀬戸 B区 表採	20-8
3	陶器	縁軸小皿	—	[0.9]	(6.0)	E H I	20	普通	灰白	古瀬戸 A区 F7	20-8
4	陶器	折縁深皿	—	[1.6]	—	I	5	良好	にぶい黄	古瀬戸 施釉灰白 A区 F7	20-8
5	陶器	仏飯器	—	[3.4]	4.0	E H I K	40	普通	灰白	京都信楽系か、絞目目 A区 F7	—
6	陶器	播鉢	—	[5.3]	—	I	5	良好	にぶい黄	瀬戸美濃系 A区 E7	20-8

VI 第13次調査

1. 概要

第13次調査の調査地点は、遺跡範囲の中央部北側から南西部にかけて点在し、国道16号西大宮バイパス線の北側と南側に分かれている。現道を境として、便宜的に東から西にA～D区の4地点に分けて調査を実施した。大グリッドではL・M6・7、M・N5・6グリッドにまたがる。

第13次調査で検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡1軒、土壌2基、集石土壌3基、近世の土壌21基、井戸跡1基、溝跡17条、畝跡2箇所、ピット60基である。

次に、各調査区の概要について見ていく。

A区は、遺跡範囲の中央部北側に位置し、国道16号西大宮バイパス線の北側にあたる。隣接して、既往調査区の第6次調査区が北側に、第6地点及び第21次調査A区が西側に所在している。

検出された遺構は、近世の土壌5基、溝跡6条、畝跡2箇所、ピット5基である。調査区の西半部は、住宅取り壊しの際の混乱が広がり、遺構は主に調査区の東半部で検出された。A区第1号溝跡は、クランク状に屈曲する溝で、北側の第6次調査区第1号溝跡から続くものである。A区第1号溝跡に合流するA区第3号溝跡は、覆土にヤドロを含んでいる。同じく、畝と考えられるA区第1号畝跡もA区第3号溝跡と同質の土質であり、検出された遺構の中では最も新しい時期のものと考えられる。遺物がほとんど出土していないため、時期を特定することはできないが、覆土がヤドロと呼ばれる土質であることから、近世以降と考えられる。

B～D区は、国道16号西大宮バイパス線の南側に位置し、第2地点と第3地点に挟まれた、遺跡範囲の西側部分にあたる。調査面積の広いD区を中心に、その東側にB区、南東側にC区が現道

を隔てて隣接する。

B区では、近世の土壌6基、溝跡1条、ピット1基が検出された。

溝跡は、調査区に沿ってL字状に屈曲しており、地割に沿うものであることから、土地の区画を目的に掘削されたものと考えられる。土壌は、長方形を呈するものが散漫に分布していた。

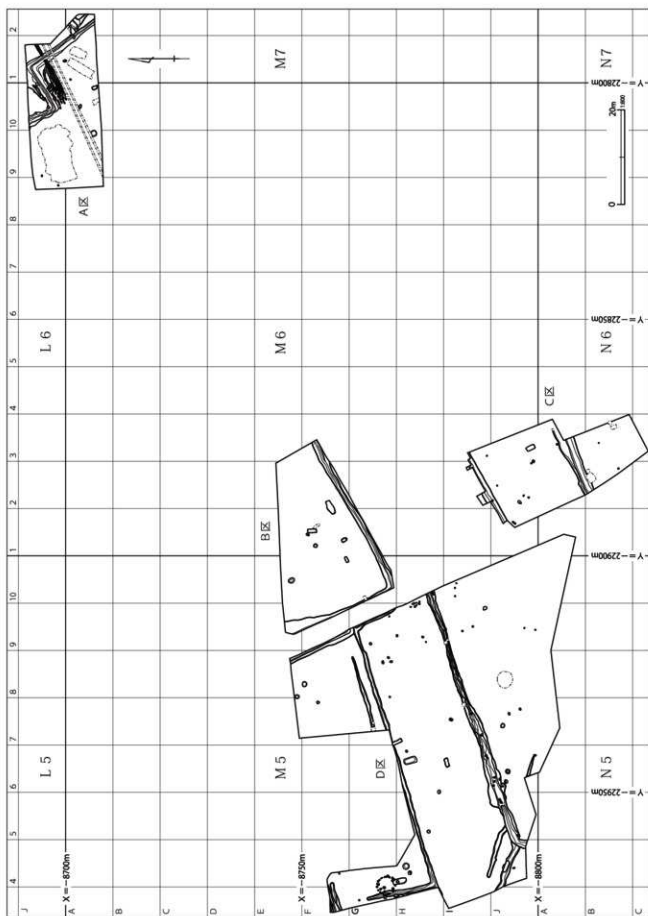
C区では、近世の土壌1基、溝跡2条、ピット13基を検出した。

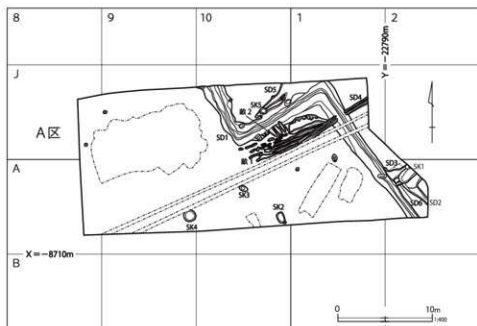
C区第1号溝跡は、第10次調査B区・第11次調査区で検出された第2号溝跡から続くものである。また、C区第2号溝跡は、東側に隣接する第12次調査B区第1号溝跡の続きである。土壌は、B区と同じく長方形を呈するものである。

D区では、縄文時代後期初頭の竪穴住居跡1軒、後期の土壌2基、中期中葉の集石土壌3基、近世の土壌9基、溝跡8条、井戸跡1基、ピット41基を検出した。

D区西端部から縄文時代後期初頭の柄杓形住居跡1軒を検出した。西側に隣接する第3地点でも3軒の柄杓形住居跡が検出されており、一つの単位住居群を構成するものと考えられる。大木戸遺跡における縄文時代後期の集落は、滝沼川を望む台地の西縁部を中心に形成されている様相が、これまでの調査により明らかにされてきた。同様に、分布状況は散漫であるが、台地の奥まった場所も、中期中葉の集石土壌や後期の土壌を伴う活動の場として土地が利用されていたことが判明した。

近世の溝跡は、主に東西方向と南北方向に直線的に延びている。断面形状や出土遺物から近世以降に帰属する。これらの溝跡は、畝作などの農業生産の場を区画するものと考えられ、屋敷地の周辺の土地利用のあり方を考える上で重要である。





第63図 第13次調査区分割図(1)

2. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

D区第1号住居跡(第66・67図)

調査区の北西隅、M5-G・H3・4グリッドにまたがって位置する。ほぼ床面まで削平されており、掘り込みのない住居跡である。柄杓形を呈する住居で、主体部は大きさが径約4.30mのほぼ円形で、長楕円形の張り出し部が付くものと思われる。張り出し部は長径2.90m、短径1.21m、深さ0.18mを測る。張り出し部までを入れた住居跡の全長は、6.67mを測る。また、張り出し部の中央部よりやや主体部寄り、第13号土壌と重複している。明瞭な付属施設は確認されず、25基のピットが円形に並び、P28は炉の可能性のあるものの明瞭な根拠はない。

住居跡と張り出し状の土壌とが別々の遺構である可能性もあるが、張り出し部から出土した土器から、住居跡は称名寺2式期の所産と考えられる。

第67図1～13は住居跡出土土器で、1～7は沈線区画内に列点文を施文する称名寺2式土器である。8は沈線区画内にLR縄文を充填施文する

もので、称名寺1式土器の可能性もある。

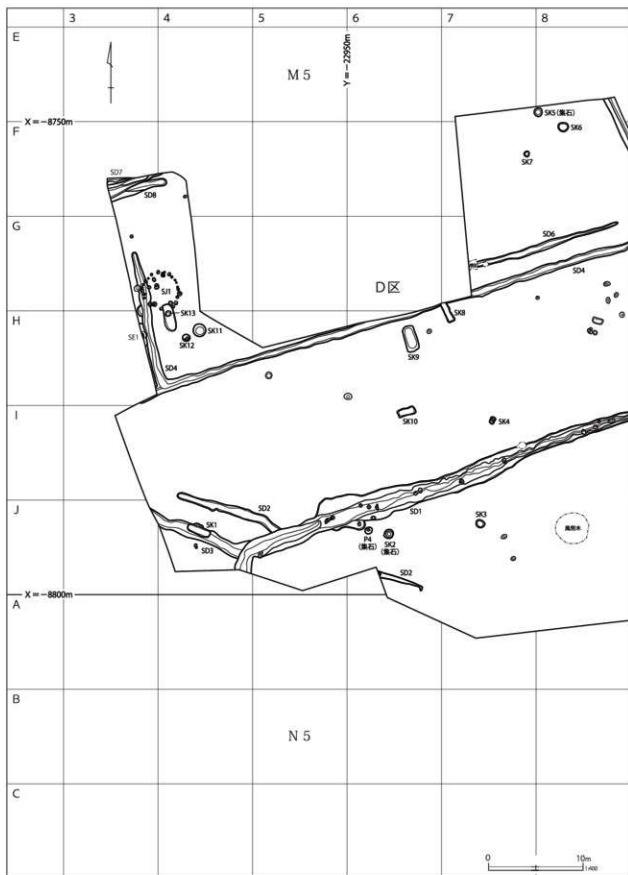
9は条線文を地文とするものである。10～13は無文の胴部破片である。

(2) 土壌

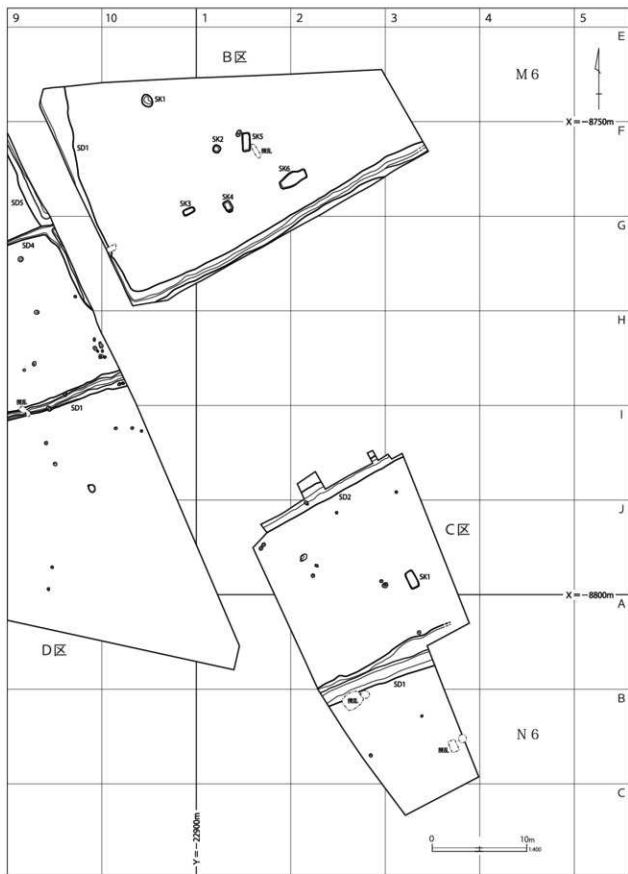
D区第11号土壌(第68～70図)

M5-H4グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、壙底は皿状を呈する。規模は長径1.36m、短径1.33m、深さ0.31mを測る。遺物はほぼ中央で、覆土の中層より還元個体3個体が一括出土した。

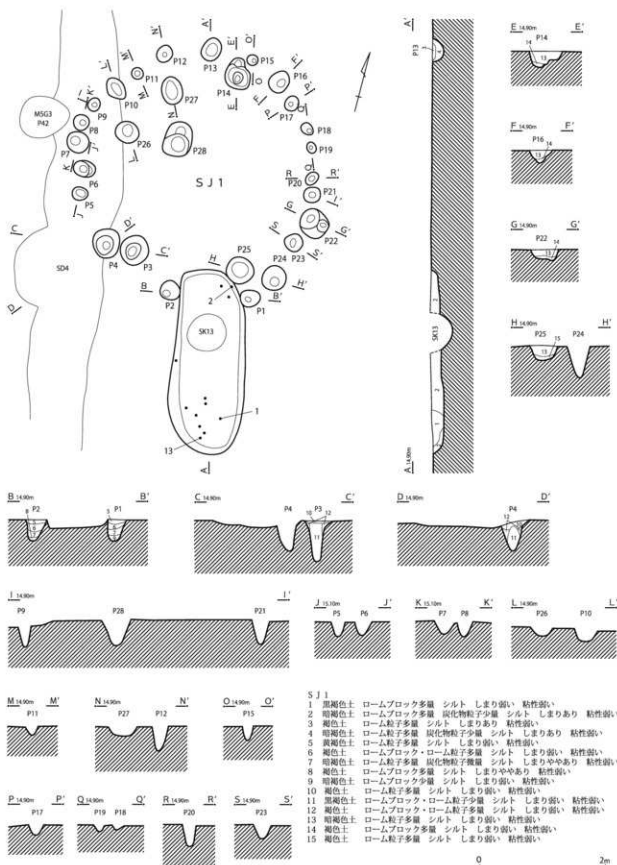
第70図1は胴部で括れ、短い口縁部が立ち、胴部が膨れる器形の深鉢で、推定口径31.4cm、現存高26.8cmを測る。口縁部には4箇所に把手が付き、内1個が大きな把手になるものと思われる。把手の中間にもそれぞれ耳状の突起が付くものと思われる、都合8個の突起が付く可能性が高い。把手周辺は盲孔をもつ円形突起が沈線で繋がるモチーフが付き、幅狭の口縁部には円形刺突列が施文されている。胴部の括れ部には橋状の把手が4箇所に付き、それぞれ盲孔をもつ円形貼付文で



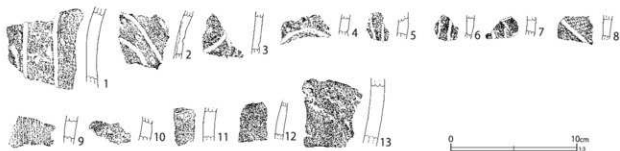
第 64 図 第 13 次調査区分割図 (2)



第 65 図 第 13 次調査区分割図 (3)



第 66 図 D区第1号住居跡



第67図 D区第1号住居跡出土遺物

飾られている。

胴部は刻みが施された隆帯で区画され、橋状把手下の区画隆帯部分から2本沈線でJ字状モチーフが垂下される。J字モチーフの先端部には盲孔をもつ円形貼付文が施文されている。橋状把手の中間部にも円形貼付文が施され、そこからもJ字状モチーフが垂下するものと思われる。J字状モチーフの下端は弧線で連結されているようである。

2は胴部で括れ直線的に平口縁が開き、膨らむ胴部へと移行する器形を呈し、推定口径22.8cm、現存高22.9cmを測る細長い器形の深鉢である。平行沈線でJ字状文やスベード状文の変形したモチーフを描き、区画を無文とする。

3は大型破片からの復元である。口縁が開き気味に立つやや寸胴の器形で、口縁部が沈線で区画されるだけの無文土器である。胴部には縦位の強い整形が施され、その上からやや間隔をあけな

がらナデ整形が縦位に施されている。推定口径29.4cm、現存高25.3cmを測る。

4は緩く内湾して開く口縁部破片で、沈線で口縁部破片の無文帯が区画されるものである。胴部には沈線で粗い格子目文が描かれているものと思われる。

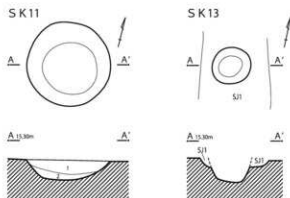
5は4と同様な器形で、口縁部の沈線区画下に列点文が施文される。

6は口縁部が内折する深鉢形土器で、口縁部に沈線が巡っている。

7は平行沈線で文様が描かれるもので、帯状の磨消縄文が縦位に施文されている。

8は口唇部がやや先細り状を呈し、直線的に立つ器形で、櫛歯状工具による条線文が、間隔をあけて縦位に施文されている。

9も条線文を縦位施文する破片であるが、条線が平行沈線状で粗いものになっている。

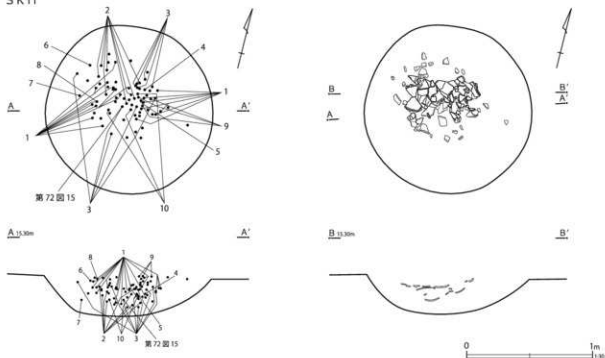


第68図 D区第11・13号土坑

- SK11
1 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物粒子微量 シルト
しまりややあり 粘性弱い
2 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子多量 焼土粒子微量 シルト
しまり強い 粘性弱い

0 2m
100

SK11



第69図 D区第11号土坑遺物出土状況

10は括れる胴部破片で、単沈線による粗い格子目文が描かれている。

以上、6の堀之内1式土器が混入するものの、D区第11号土坑出土の図化した土器群は、後期初頭の称名寺2式終末期に位置づけられる土器群である。本土坑と近接するD区第1号住居跡とは、出土土器群を比較すると、大きな時間差はなく、ほぼ同時期か、土坑の方が若干新しくなる可能性がある。本土坑出土の第70図1は東北南部の系統をひくものと思われ、2の文様内には列点文などが施文されない点がやや新しい要素と認識される。

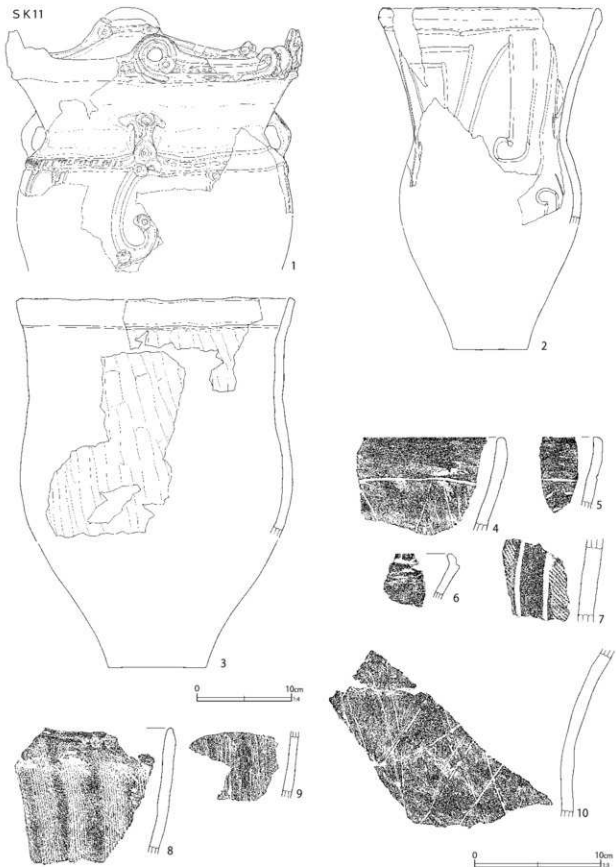
D区第13号土坑（第68・71～73図）

M5-G・H4グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長径0.63m、短径0.58m、深さ0.34m、確認面からの深さ0.42mを測る。規模の小さい土坑ではあるが、図上復元した3個体を含め、多くの土器群が出土した。

第72図11は胴部が緩く括れ、口縁部に直線の

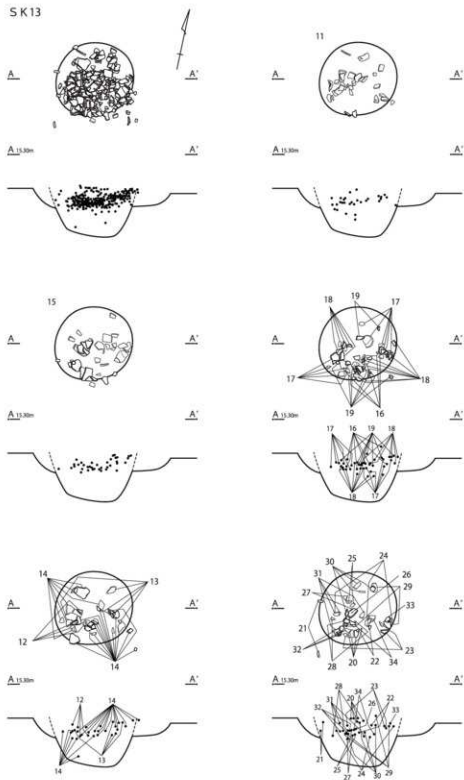
に開く深鉢で、沈線のみでモチーフが描かれる土器である。口縁部を無文とし、Y字状やR字状のモチーフを組み合わせた、やや左に流れる文様が4単位に施文されているものと思われる。胴下半部が欠損するため、文様の下端部の処理が不明瞭であるが、下から上に伸びる蕨手状のモチーフの2本沈線が、それぞれ上から下がるY字状文の一方の沈線と組み合せて閉塞し、上半部の文様と相似の構成をとるようになるものと思われる。従って、上下にY字状モチーフが入り組む文様構成になるものと思われる。区画内は、無文となる。推定口径25.9cm、現存高19.9cmを測る。底部を欠損するが、約70%が現存する。

12・13は同一個体になるものと思われる。12は口縁部が内折し、2個対で1単位の大きな把手が構成される口縁部をもち、胴部が大きく括れる器形を呈する。把手周りには盲孔をもつ円形貼付文が2本隆帯で弧状に繋がれており、突起間は波状を呈している。1つの突起の下から、括れる



第70図 D区第11号土坑出土遺物

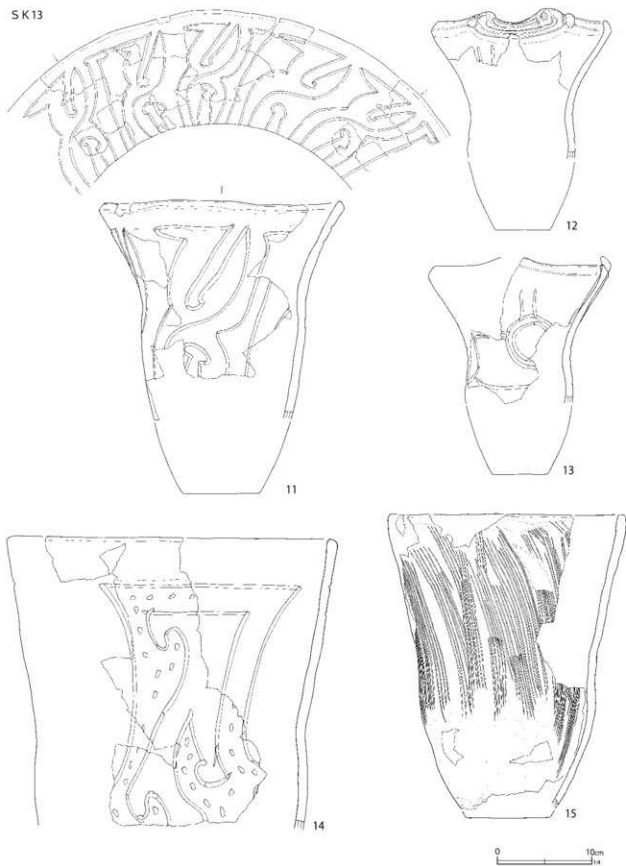
SK13



0 1m 1:30

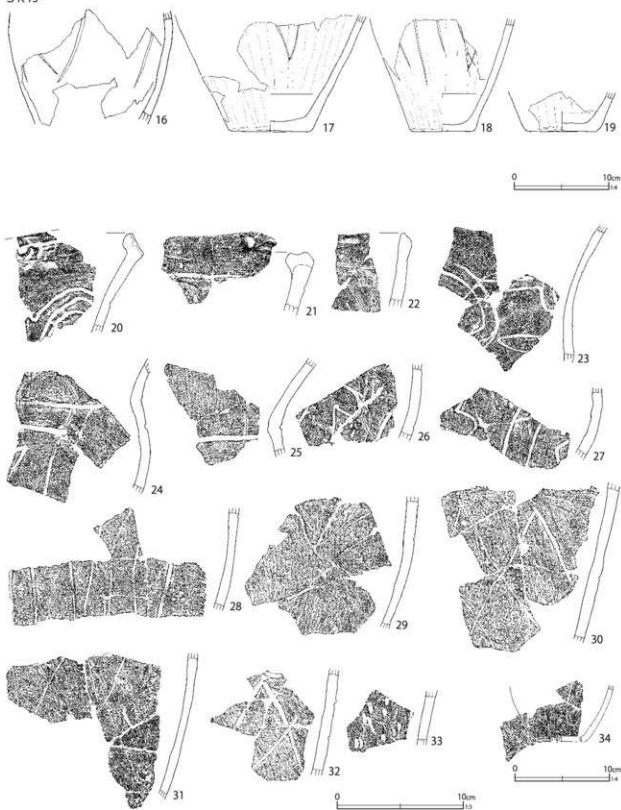
第71图 D区第13号土壕遗迹出土状况

SK13



第72図 D区第13号土坑出土遺物(1)

SK13



第73图 D区第13号土坑出土遗物(2)

胴部に向けて、2本の平行する沈線が垂下されている。

13は突起をもつ12の反対側にあたる破片と思われる、胴部に描かれる2本沈線の円形文を目指して、波頂部下からやや間隔を置いて2本沈線が垂下されている。胴部の円形モチーフの隣には同様の曲線文が描かれており、円形モチーフか、J字状のモチーフかは判断されないが、モチーフの上下が横位に連結されているようである。推定口径17.9cm、現存高15.8cmを測る。12・13を合わせると現存率は70%程になる。

14は胴部が緩く括れる大型の平縁土器で、R字状文や鉤状のモチーフが沈線で描かれ、区画内には1列を基本とした列点文が充填される。列点文はJ字状や鉤状文では枝分かれして施文されている。文様の下端は襷干されているものと思われる。推定口径34.8cm、現存高30.5cmを測る。

15は胴部が緩く括れ、口縁部が直線的に開く器形を呈し、口縁部にやや間隔をあけて、櫛歯状工具による条線文が施文されるものである。条線文は胴部括れ部のやや下の位置まで施文されており、底部付近までは施文されていない。多分に新しい要素と認識される。底部を欠損するが、口径24.4cm、現存高31.1cmを測り、全体の70%が現存している。

20は内折する口縁部が開く器形で、口唇部に沈線が巡っている。頸部の無文地に2本沈線で曲線モチーフを描く点で、12・13の同一個体となる可能性が高い。

21は口縁部に押圧を加えた突起が付く平縁土器と思われる、幅狭口縁部無文帯が沈線で区画される。

22は外削状の口唇部が直線的に開く器形で、櫛歯状工具の条線で幅狭な口縁部無文帯が区画される。胴部は同種の条線で大型の斜格子目文が描かれている。

23～33は胴部破片である。23は平行沈線で円

形モチーフを連結する13の同一個体である。

24・25は括れる胴部が沈線で区画されており、24は胴部に平行沈線の鉤状モチーフが施文されている。モチーフ内は無文となっている。

26・27は膨れる胴部下半の破片で、同一個体の可能性がある。平行沈線で描かれるR字状文が描かれ、26の区画内には部分的に列点文が施されている。

28は浅く弱い沈線が縦位に垂下されるもので、部分的に間隔が狭まったりはするが、交差はしないようである。

29は細く浅い斜行沈線が湾曲して施文されおり、31は同種の沈線で鋸歯状の下端が閉塞するモチーフが施文されている。

30・32はやや太い沈線で大型の斜格子目文が施文されるものである。32は破片上端に沈線で曲線が描かれており、他の文様と組になって格子目文が施文されているようである。

33は沈線区画内に複列の列点文を施文するが、列点が2個対で施文されているところもあることから、半截竹管状工具が使用されたものと思われる。

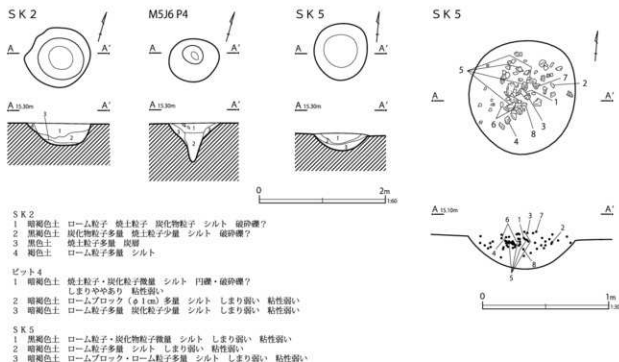
34は小型の深鉢の底部で、沈線懸垂文が垂下している。推定底径4.8cm、現存高6.0cmを測る。

16～19も底部破片で、16・17は垂下沈線が交差して閉塞のモチーフが描かれている。16は現存高12.2cm、最大径17.4cmを測る。17は底径8.8cm、現存高12.3cmを測る。

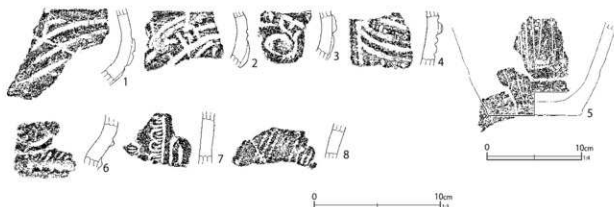
18は平行沈線が交差せずに垂下されているもので、一部交差する部分もある。底径6.8cm、現存高11.9cmを測る。

19は底部で、底径7.4cm、現存高4.2cmである。これらの底部のいずれかが、実測図に示した土器と組み合わせると思われる。

本土城出土土器群は、後期初頭の称名寺2式の終末期の様相をもつもので、第11号土壘とほぼ同時期と考えられる。



第74図 D区集石土壌



第75図 D区集石土壌出土遺物

(3) 集石土壌

D区第2号土壌 (第74図)

M5-J 6 グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長径1.00m、短径0.94m、深さ0.35mを測る。墳底は浅く、皿状を呈している。

D区M5-J 6 グリッドP 4 (第74図)

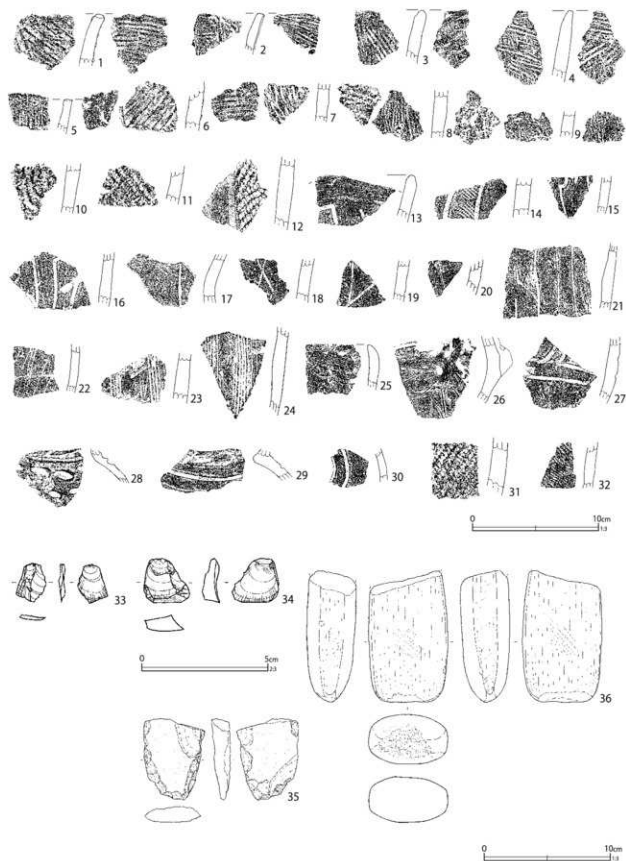
M5-J 6 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長径0.81m、短径0.70m、深さ0.61mである。中央部がビット状に窪む楕円形で、

長軸方位はN-60° -Eを指す。

D区第5号土壌 (第74・75図)

M5-E 8 グリッドに位置する。平面形は円形で、墳底は皿状を呈する。規模は長径0.89m、短径0.85m、深さ0.28mを測る。土壌の中央部の中層から上層にかけて、礫とともに中期中葉の土器群が出土した。

第75図1~3は同一個体で、1~3・6は口縁部破片である。1~3は口縁部に背割れ状隆帯で



第 77 図 D区グリッド出土遺物

第24表 出土石器観察表

番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	図版
第76図22	打製石斧	黒色頁岩	11.3	7.0	2.3	191.3	13次 A区 SD1 完形	39-5
第76図23	打製石斧	ホルンフェルス	[9.4]	4.9	2.6	131.8	13次 A区 SD1	39-5
第77図33	剥片	黒曜石	1.5	1.2	0.3	0.3	13次 D区 SD7	39-2
第77図34	剥片	黒曜石	1.8	1.8	0.7	1.9	13次 D区 MSB9	39-3
第77図35	搔器	砂岩	6.5	4.9	1.5	49.6	13次 D区 MSB9	39-4
第77図36	蔽石	緑色岩	[10.5]	6.3	3.9	493.6	13次 D区 MSF7 欠損	39-5

5～8は磨消縄文帯が垂下する中期末葉の加曽利EⅢ式土器である。8は小型の壺形土器の可能性があり。9～11は背の低い隆帯でモチーフが描かれるもので、12・13は縄文のみ、14～18は条線文が施文される土器群で、16～18は両耳壺もしくは浅鉢の胴部と思われる。

19はやや薄い器壁で、浅くて細い3本の沈線が垂下され堀之内2式と思われる。

20は無文土器で、後期の所産と思われる。

21は底部が張り出す器形の底部で、堀之内2式のものと思われる。底径9.6cm、現存高2.5cmを測る。

石器 (第76図22・23)

22・23とも打製石斧である。22は頭部を欠損する撥形打製石斧で、刃部に最大幅をもつ。23は短冊形打製石斧で、やはり頭部を欠損する。いずれも縄文時代中期の打製石斧と思われる。

D区グリッド

縄文土器 (第77図1～32)

1～9は胎土に繊維を少量含む、早期後葉の条痕文系土器群である。1は条痕地文上に集合細隆起線で鋸歯状のモチーフが施文される。2は口唇部直下から2本対の細隆起線が垂下されて文様帯が縦位区画される。3・4は口縁部破片で、内外面とも条痕整形が行われている。5は口唇部に押圧状の刻みが施される。6～9は胴部破片で、6

には細隆起線の集合鋸歯状文が施文されている。

10・11は繊維を含む前期の羽状縄文系土器群で、0段多条縄文が施文される花積下層式土器である。

12は磨消懸垂文が垂下する加曽利EⅢ式土器である。LR縄文を施文する。

13～24は後期初頭の称名寺式土器であり、13・14は磨消縄文でモチーフが描かれる称名寺1式、15・16は沈線でモチーフが描かれる称名寺2式土器である。17・21・22には平行沈線が垂下される。

18・19は沈線の斜格子目文が描かれるもので、23・24はやや間隔をあけた条線文が縦位に施文されており、いずれも称名寺2式に比定される。

25は無文の口縁が内湾する鉢と思われ、26は屈曲する口縁部破片である。26の隆帯上には盲孔を繋ぐ沈線が施文されていることから、堀之内1式土器と思われる。27は胴部に平行沈線でモチーフが描かれる堀之内1式土器であろう。

28～30は壺もしくは注口土器と思われ、28には押し状の列点文が施文される。

31・32は縄文のみ施文される破片で、31はLR縄文、32は無節Rが施される。

石器 (第77図33～36)

33・34は黒曜石製の剥片である。35は砂岩製の搔器で、欠損している。

36は緑色岩製の頭部を欠損する磨製石斧で、摩耗した刃部を蔽石として再利用している。

3. 近世の遺構と遺物

(1) 土壌

近世の土壌は、調査区全体から21基が検出された(第78・80～82図)。

A区からは近世の土壌が5基検出された。調査区の西半部に攪乱が広がっているため、主に東半部に分布している。調査区内をクランク状に走行する第1号溝跡の西側に3基(A区第2～4号土壌)、東側に隣接するように2基(A区第1・5号土壌)が検出された。平面形態は円形・楕円形・長方形・不整形が見られる。

A区第1号土壌(第78・79図)

調査区東端のM7-A2グリッドに位置する。

第2・3・6号溝跡と重複している。

平面形は不整形である。規模は長軸1.83m以上、

短軸1.15m、深さ0.56mである。長軸方位はN-50°-Eを指す。覆土は暗褐色土が主体である。

第79図1は瓦質土器焙烙の破片である。概ね17世紀後半頃に位置づけられる。

A区第2号土壌(第78図)

調査区南側のM6-A10グリッドに位置する。

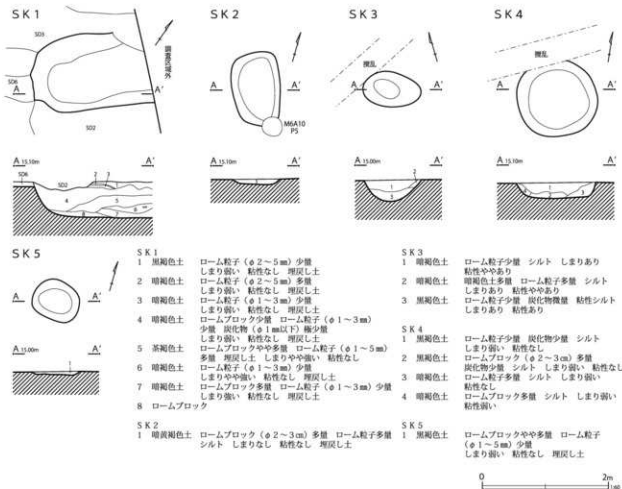
平面形は長方形である。規模は長軸1.17m、短軸0.76m、深さ0.09mである。長軸方位はN-22°-Wを指す。覆土は、ロームブロックを多量に含んだ暗黄褐色土で、人為的な埋戻しである。

遺物は出土していない。

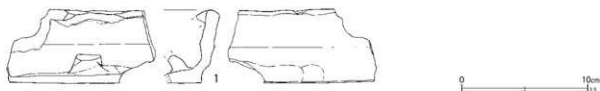
A区第3号土壌(第78図)

調査区南側のM6-A10グリッドに位置する。

平面形は楕円形である。規模は長径0.91m、短径



第78図 A区第1～5号土壌



第79図 A区第1号土坑出土遺物

第25表 A区第1号土坑出土遺物観察表(第79図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	瓦質土器	焙塔	—	[5.8]	—	H I K	5	普通	浅黄	内側灰黄 SK1	40-1

第26表 A区土坑一覧表(第78図)

番号	グリッド	平面形	長軸方位	長径 /m	短径 /m	深さ /m	重複遺構		
							土壌より古	土壌より新	不明
1	M7-A2	不整形	N-50°-E	(1.83)	1.15	0.56	SD6	SD2	SD3
2	M6-A10	長方形	N-22°-W	1.17	0.76	0.09			P5
3	M6-A10	楕円形	N-64°-W	0.91	0.55	0.34			
4	M6-A9	円形	—	1.30	(1.22)	0.25			
5	L6-J10	楕円形	N-70°-W	0.74	0.61	0.06			SD1・5

0.55m、深さ0.34mである。長軸方位はN-64°-Wを指す。

遺物は出土していない。

A区第4号土坑(第78図)

調査区南側のM6-A9グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は長径1.30m、短径1.22m以上、深さ0.25mである。覆土に炭化物粒子の混入が見られる。

遺物は出土していない。

A区第5号土坑(第78図)

調査区北側のL6-J10グリッドに位置する。第1・5号溝跡と重複しているが、土壌の掘り込みが浅く、前後関係は不明である。

平面形は楕円形である。規模は長径0.74m、短径0.61m、深さ0.06mである。長軸方位はN-70°-Wを指す。覆土は黒褐色土で、埋戻しと考えられる。遺物は出土していない。

B区からは近世の土壌が6基検出された。調査区の南壁際から西壁際に沿って、L字状に屈曲するB区第1号溝跡に区画された範囲に、長方形土

坑を主体に分布が見られた。長軸方位は、東西方向と南北方向の二者に分かれる。

B区第1号土坑(第80図)

調査区北西部のM5-E10グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長径1.36m、短径1.04m、深さ0.52mである。長軸方位はN-22°-Wを指す。

遺物は出土していない。

B区第2号土坑(第80図)

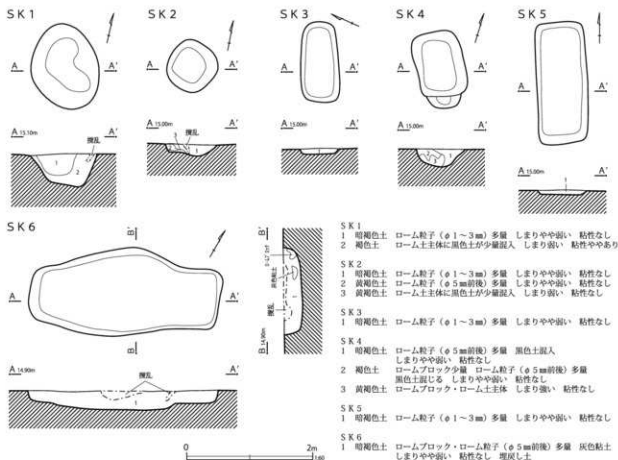
調査区中央のM6-F1グリッドに位置する。平面形は隅丸方形である。規模は長軸0.84m、短軸0.80m、深さ0.16mである。長軸方位はN-14°-Wを指す。

遺物は出土していない。

B区第3号土坑(第80図)

調査区南側のM5-F10グリッドに位置する。平面形は長方形である。規模は長軸1.28m、短軸0.60m、深さ0.09mである。長軸方位はN-65°-Eを指す。

遺物は出土していない。



第80図 B区第1～6号土壌

第27表 B区土壌一覧表 (第80図)

番号	グリッド	平面形	長軸方位	長径 / m	短径 / m	深さ / m	重複遺構		
							土壌より古	土壌より新	不明
1	M5-E10	楕円形	N-22°-W	1.36	1.04	0.52			
2	M6-F1	隅丸方形	N-14°-W	0.84	0.80	0.16			
3	M5-F10	長方形	N-65°-E	1.28	0.60	0.09			
4	M6-F1	不整形	N-26°-W	1.22	0.75	0.27			
5	M6-F1	長方形	N-3°-W	1.92	0.80	0.06			
6	M6-F1・2	不整形	N-64°-E	3.00	1.38	0.30			

B区第4号土壌 (第80図)

調査区南側のM6-F1グリッドに位置する。平面形は不整形であるが、長方形を基調としている。規模は長軸1.22m、短軸0.75m、深さ0.06mである。長軸方位はN-26°-Wを指す。

遺物は出土していない。

B区第5号土壌 (第80図)

調査区中央のM6-F1グリッドに位置する。平面形は長方形である。規模は長軸1.92m、短軸

0.80m、深さ0.06mである。長軸方位はN-3°-Wを指す。

遺物は出土していない。

B区第6号土壌 (第80図)

調査区南側のM6-F1・2グリッドに位置する。平面形は不整形である。規模は長軸3.00m、短軸1.38m、深さ0.30mである。長軸方位はN-64°-Eを指す。覆土は灰色粘土ブロックを含む埋め戻し土である。遺物は出土していない。

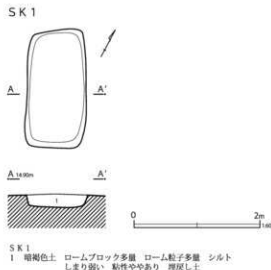
C区からは近世の土壌が1基検出された。

C区第1号土壌 (第81図)

調査区中央東寄りのM6-J3グリッドに位置する。第1号溝跡と第2号溝跡に区画された空間に所在する。

平面形は長方形で、断面形は箱形に近い。規模は長軸1.85m、短軸0.93m、深さ0.22mである。長軸方位はN-25°-Wを指す。覆土はロームブロックを多量に含む暗褐色土による埋戻しである。

遺物が出土していないため、時期は明確でないが、長方形土壌であり、覆土の状態から近世以降と考えられる。



第81図 C区第1号土壌

第28表 C区土壌一覧表 (第81図)

番号	グリッド	平面形	長軸方位	長径 / m	短径 / m	深さ / m	重複遺構		
							土壌より古	土壌より新	不明
1	M6-J3	長方形	N-25°-W	1.85	0.93	0.22			

D区からは近世の土壌が9基検出された。調査区内に散漫に分布しており、D区第1・4号溝跡などの区画溝との関連性については希薄と考えられる。

平面形態は長方形を基調とするもの（D区第1・4・8・9・10号土壌）と、円形を基調とするもの（D区第3・6・7・12号土壌）に大きく二分される。

D区第1号土壌 (第82・83図1)

調査区西端のM5-J4グリッドに位置し、D区第3号溝跡と重複する。

平面形は不整形である。規模は長軸2.49m、短軸1.06m、深さ0.28mである。長軸方位はN-67°-Wを指す。

第83図1は瀬戸美濃系陶器の天目茶碗で16世紀末〜17世紀初頭の所産である。

D区第3号土壌 (第82図)

調査区中央のM5-J7グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長径0.93m、短径0.81m、深さ0.26mである。長軸方位はN-50°

-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

D区第4号土壌 (第82図)

調査区中央のM5-I7グリッドに位置する。平面形は長方形である。規模は長軸0.72m、短軸0.50m、深さ0.33mである。長軸方位はN-29°-Eを指す。墳底にはピット状の落ち込みが認められた。

遺物は出土していない。

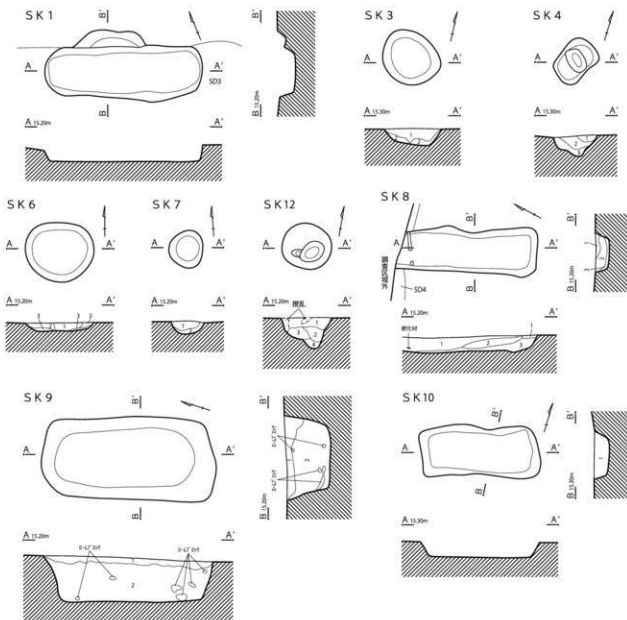
D区第6号土壌 (第82・83図2)

調査区北側の東側張出部のM5-F8グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.09m、短径0.93mである。掘り込みは浅く、深さ0.12mである。長軸方位はN-90°を指す。

第83図2は瀬戸美濃系陶器の鉢で、全面に長石釉を施す。17世紀代の所産である。

D区第7号土壌 (第82図)

調査区北側の東側張出部のM5-F7グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長径0.59m、短径0.54m、深さ0.20mである。



- SK 3
- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量 シルト しまり弱い 粘性弱い
- 2 褐色土 ロームブロック (φ 1~3 cm) 少量 シルト しまり弱い 粘性弱い
- SK 4
- 1 褐色土 ローム粒子多量 シルト しまりややあり 粘性弱い
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量 シルト しまりややあり 粘性ややあり
- 3 黄褐色土 ロームブロック少量 シルト しまりややあり 粘性弱い
- SK 6
- 1 灰色土 耕作土 (ヤドロ)
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子微量 シルト しまり弱い 粘性弱い
- 3 褐色土 ロームブロック少量 ローム粒子多量 シルト しまり弱い 粘性弱い
- SK 7
- 1 黒褐色土 ロームブロック (φ 3 cm) 少量 シルト しまり弱い 粘性弱い
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量 シルト しまり弱い 粘性弱い

- SK 8
- 1 黒褐色土 ローム粒子少量 しまり弱い 粘性なし 埋戻し土
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量 しまり弱い 粘性なし 埋戻し土
- 3 黒褐色土 ローム粒子少量 炭化物少量 しまり弱い 粘性なし 埋戻し土
- SK 9
- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量 しまり弱い 粘性なし 埋戻し土
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量 しまり弱い 粘性なし 埋戻し土
- SK 10
- 1 暗褐色土 ロームブロック (φ 1~3 cm) 少量 ローム粒子多量 しまりやや弱い 粘性なし 埋戻し土
- SK 12
- 1 黄褐色土 ローム粒子・炭化物少量 しまりやや弱い 粘性弱なし
- 2 黄褐色土 ロームブロック (φ 1~2 cm)・ローム粒子・炭化物少量 しまりやや強い 粘性なし
- 3 黄褐色土 ローム主体 炭化物少量 しまりやや弱い 粘性なし
- 4 黄褐色土 ロームブロック主体に褐色土混入 しまりやや強い 粘性なし

0 2m

第 82 図 D 区第 1・3・4・6~10・12 号土坑

遺物は出土していない。

D区第8号土壌 (第82図)

調査区北側中央のM5-G6・7、H7グリッドに位置し、第4号溝跡と重複する。北西端部は調査区域外にかかる。

平面形は長方形である。規模は長軸2.16m以上、短軸0.65m、深さ0.24mである。覆土中に炭化材の混入が見られる。覆土の状態は、人為的な埋戻しと考えられる。

遺物は出土していない。

D区第9号土壌 (第82図)

調査区北側中央のM5-H6グリッドに位置する。平面形は長方形である。規模は長軸2.70m、短軸1.32m、深さ0.70mである。長軸方位はN-18°-Wを指す。覆土は暗褐色土を主体とし、

ロームブロックを多量に混入することから人為的な埋戻しと考えられる。

遺物は出土していない。

D区第10号土壌 (第82・83図)

調査区中央のM5-16グリッドに位置する。

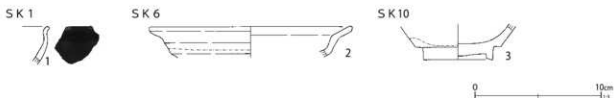
平面形はやや歪んだ長方形である。規模は長軸1.85m、短軸0.71m、深さ0.24mである。長軸方位はN-73°-Wを指す。

第83図3は瀬戸美濃系陶器の天目茶碗で、17世紀前半の所産である。

D区第12号土壌 (第82図)

調査区北西部の西側掘出部のM5-H4グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長径0.77m、短径0.75m、深さ0.49mである。

遺物は出土していない。



第83図 D区第1・6・10号土壌出土遺物

第29表 D区第1・6・10号土壌出土遺物観察表 (第83図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	天目茶碗	—	[3.0]	—	I K	5	良好	浅黄	瀬戸美濃系 SK1	40-2
2	陶器	鉢	(16.0)	[2.5]	—	I K	10	良好	浅黄	瀬戸美濃系 長石釉 SK6	40-2
3	陶器	天目茶碗	—	[2.8]	5.4	E I	70	普通	灰黄	瀬戸美濃系 内面全面施釉 削り出し高台 SK10	40-2

第30表 D区土壌一覧表 (第82図)

番号	グリッド	平面形	長軸方位	長径 / m	短径 / m	深さ / m	重複遺構		
							土壌より古	土壌より新	不明
1	M5-J4	不整形	N-67°-W	2.49	1.06	0.28			SD3
3	M5-J7	楕円形	N-50°-W	0.93	0.81	0.26			
4	M5-17	長方形	N-29°-E	0.72	0.50	0.33			
6	M5-F8	楕円形	N-90°	1.09	0.93	0.12			
7	M5-F7	円形	—	0.59	0.54	0.20			
8	M5-G6・7、H7	長方形	N-28°-W	(2.16)	0.65	0.24			SD4
9	M5-H6	長方形	N-18°-W	2.70	1.32	0.70			
10	M5-16	長方形	N-73°-W	1.85	0.71	0.24			
12	M5-H4	円形	—	0.77	0.75	0.49			

(2) 井戸跡

D区第1号井戸跡 (第84図)

調査区北西端のM5-H3グリッドに位置する。D区第4号溝跡と調査区西壁に挟まれた狭小な場所から検出され、溝跡に壊されている。

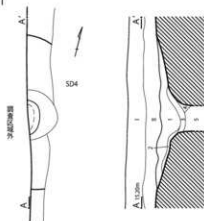
調査区の制約から半截した状態で調査を行った。平面形は円形と推定され、断面形は上端部が漏斗状に開いた円筒形の素掘り井戸である。規模は上

端部で長径2.44mを測るが、井戸の内部は径0.45mと小さく、深さ0.69mまで掘り下げた。

覆土は埋戻しと考えられる黒褐色土(第5層)を主体としている。

遺物が出土していないため、時期は特定できないが、重複するD区第4号溝跡から17世紀前半に遡る遺物が出土しており、近世前半に掘削されたものと考えられる

SE 1



SE 1

- | | | | |
|----|------|----------------------|---------------------|
| 1 | 水田層 | しまりやや強い | 粘性やや強い |
| II | 暗褐色土 | ローム粒子・白色粒子多量 | しまりやや弱い 粘性なし 耕作土層 |
| 1 | 黒褐色土 | ロームブロック (φ1~2cm) 少量 | しまり弱い 粘性なし 埋戻し土 |
| 2 | 褐色土 | ロームブロック多量 | しまりやや弱い 粘性なし 埋戻し土 |
| 3 | 褐色土 | ロームブロック・ローム粒子多量 | しまり弱い 粘性なし 埋戻し土 |
| 4 | 黄褐色土 | ロームブロックを含む中に黒褐色土がまじる | しまり弱い 粘性なし 埋戻し土 |
| 5 | 黒褐色土 | ローム粒子多量 | ロームブロック (φ1~2cm) 少量 |
| | | しまり弱い 粘性なし 埋戻し土 | |

0 2m 1:100

第84図 D区第1号井戸跡

(3) 溝跡

第13次調査で検出された近世の溝跡は17条である。内訳は、A区6条、B区1条、C区2条、D区8条、計17条である。

台地奥に掘削された溝跡の傾向は、『大木戸遺跡I』の報告書で指摘されているように、以下の特徴が見られる。

- ①南西から北東へ走るもの(N-23°-E~N-63°-E)と南東から北西に走るもの(N-8°-W~N-60°-E)が大多数を占めている。
- ②直線的に走行するものを基調し、L字状に屈曲するもの(A区第1号溝跡、B区第1号溝跡、D区第1・4号溝跡)が一定量含まれている。
- ③比較的重複するものが少ない。
- ④湾曲・蛇行する溝跡(D区第2・3号溝跡)が若干含まれる。

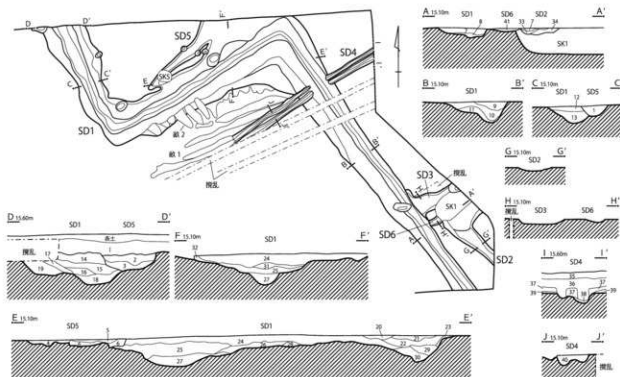
A区第1号溝跡 (第85・86図)

北側に隣接する第6次調査区から南に延びる溝跡(第6次調査第1号溝跡)が、クランク状に屈曲する。調査区の北側から南東側のL6-J9・10、L7-J1、M7-A2グリッドに位置する。第3~6号溝跡、第2号畝跡と重複しているが、前後関係は明確でない。規模は検出長33.2m、幅0.90~3.85m、深さ0.20~0.64mである。

第86図1は肥前系陶器の碗で、所謂呉器手である。17世紀代の製品である。2は瀬戸美濃系陶器の播鉢破片で17~18世紀代の製品と考えられる。

実測・図示した遺物のほかに、肥前系磁器碗体部片(17世紀後葉~18世紀前葉)1・瀬戸美濃系陶器鉄軸舟徳利肩部片1・瓦質土器鉢(中世)、焙烙(平底)底部1が出土している。

遺物の様相から18世紀前半には廃絶したと考えられる。



1 灰色土

SD5

- 1 黒褐色土 ロームブロック(φ2~3cm)シルト
しまり強い 粘性なし 埋戻し土
2 黒褐色土 灰色土ブロック(φ5cm)少量 ローム粒子 シルト
埋戻し しまり強い 粘性強い
3 暗褐色土 ロームブロック(φ3~5cm)・ローム粒子極多量 シルト
埋戻し しまり強い 粘性強い
4 黄褐色土 ローム粒子(φ1~5mm)多量
しまりやや強い 粘性なし 埋戻し土
5 茶褐色土 ローム粒子(φ1~5mm)多量
しまりやや強い 粘性なし 埋戻し土
6 茶褐色土 ロームブロック少量 ローム粒子(φ1~5mm)多量
しまりやや強い 粘性なし 埋戻し土

SD1

- 7 暗褐色土 ローム粒子(φ1~2mm)少量 しまり強い 粘性なし 埋戻し土
8 暗褐色土 ロームブロック少量 ローム粒子(φ1~2mm)少量
しまりやや強い 粘性なし 埋戻し土
9 黒褐色土 ローム粒子極少量 シルト しまり強い 粘性なし
10 暗褐色土 ローム粒子少量 シルト しまり強い 粘性なし
11 暗褐色土 ロームブロック(φ3~5mm)少量 ローム粒子少量 シルト
しまり強い 粘性なし
12 褐色土 ロームブロック(φ1~2cm)多量 シルト
しまり強い 粘性なし
13 暗褐色土 ロームブロック(φ1~5cm)少量 シルト
しまり強い 粘性なし
14 黒褐色土 ローム粒子少量 灰色土粒子少量 シルト しまり強い 粘性強い
15 褐色土 黒褐色土にロームブロック(φ1~5mm)多量 シルト 埋戻し土
しまり強い 粘性強い
16 褐色土 灰色土ブロック(φ1~3cm) ローム粒子 シルト
しまり強い 粘性強い 埋戻し土
17 暗褐色土 ロームブロック(φ1~3cm)多量 シルト
しまり強い 粘性強い 埋戻し土
18 暗褐色土 ロームブロック(φ3cm)少量 シルト
しまり強い 粘性強い 埋戻し土
19 褐色土 ロームブロック(φ3~10cm)多量 シルト
しまり強い 粘性強い
20 暗褐色土 ロームブロック極少量 ローム粒子(φ1~5mm)多量
しまり強い 粘性なし 埋戻し土

- 21 黒褐色土 ローム粒子(φ1~3mm)少量 しまり強い 粘性なし 埋戻し土
22 暗褐色土 ロームブロック多量 ローム粒子(φ1~3mm)少量
しまり強い 粘性なし 埋戻し土
23 褐色土 ローム土主体 しまり強い 粘性なし
24 暗褐色土 ロームブロック少量 ローム粒子(φ1~5mm)多量
しまり強い 粘性なし 埋戻し土
25 黄褐色土 ロームブロック多量 ローム粒子(φ1~5mm)多量
しまり強い 粘性なし 埋戻し土
26 暗褐色土 ロームブロック少量 ローム粒子(φ1~5mm)多量
しまり強い 粘性なし 埋戻し土
27 暗褐色土 ローム粒子(φ1~5mm)多量 しまり強い 粘性なし 埋戻し土
28 黄褐色土 ローム土主体 埋戻し土 しまり強い 粘性強い
29 暗褐色土 ロームブロック少量 ローム粒子(φ1~5mm)少量
しまり強い 粘性強い 埋戻し土
30 暗褐色土 ロームブロック少量 ローム粒子(φ5mm前後)多量
しまり強い 粘性強い 埋戻し土
31 褐色土 ロームブロックやや多量 ローム粒子(φ5mm前後)多量
しまり強い 粘性なし 埋戻し土
32 褐色土 ローム土主体 しまりやや強い 粘性なし

SD2

- 33 暗褐色土 ロームブロック少量 ローム粒子(φ3~5mm)多量
しまり強い 粘性なし 埋戻し土
34 黄褐色土 ロームブロック主体 ローム土多量
しまり強い 粘性なし 埋戻し土

SD4

- 35 灰褐色土 砂質シルト 頁土耕作土 しまり強い 粘性ややあり
36 灰褐色土 粘土粒子極多量 灰色土粒子(ヤドロ)多量 シルト
しまりややあり 粘性ややあり
37 暗褐色土 灰色土粒子(ヤドロ)少量 シルト しまり強い 粘性強い
38 暗褐色土 ロームブロック多量 粘土粒子少量 シルト しまり強い 粘性強い
39 暗褐色土 ローム粒子多量 シルト しまりややあり 粘性強い
40 黒褐色土 ローム粒子(φ1~5mm)少量 白色土(φ5~7mm)少量
しまりやや強い 粘性なし 埋戻し土

SD6

- 41 暗褐色土 ローム粒子多量 シルト しまり強い 粘性なし



第85図 A区第1~6号溝跡

A区第2号溝跡 (第85図)

調査区南東端のM7-A2グリッドに位置する。A区第1号溝跡の東側に隣接するL字状に屈曲した溝跡である。第1号土壌を壊している。規模は検出長4.00m、幅0.50～1.66m、深さ0.06～0.14mである。

A区第3号溝跡 (第85図)

調査区南東端のM7-A1・2グリッドに位置する。第1号溝跡、第1号土壌を重複する。規模は検出長2.50m、幅0.34～1.50m、深さ0.06～0.12mである。

A区第4号溝跡 (第85図)

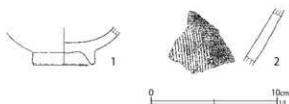
調査区北東側のL7-J1グリッドに位置する。第1号溝跡に直交する2条一對からなる溝跡である。第1号畝跡とも重複しているが、前後関係は明確でない。規模は検出長7.60m、幅0.52～0.70m、深さ0.14～0.20mである。

A区第5号溝跡 (第85図)

調査区北側のL6-J10、L7-J1グリッドに位置する。第1号溝跡に並行する、やや不整形な溝跡である。規模は検出長12.40m、幅0.42～2.00m、深さ0.02～0.21mである。

A区第6号溝跡 (第85図)

調査区南東側のM7-A2グリッドに位置する。第1号溝跡と第1号土壌の間を東西に延びる、小規模な溝跡である。規模は検出長0.53m、幅0.33～0.42m、深さ0.04～0.06mである。



第86図 A区第1号溝跡出土遺物

第31表 A区第1号溝跡出土遺物観察表 (第86図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	碗	—	[3.0]	4.7	K	80	良好	浅黄	肥前系 SD1 (L7J1)	40-3
2	陶器	播鉢	—	[4.5]	—	E I	5	普通	灰黄	瀬戸美濃系 SD1 (L7J1)	40-3

B区は、D区北半部の東隣に現道を隔てて対峙しており、北側は国道16号西大宮バイパス線に面している。既調査区は、南側に第2地点の西区画が接し、東側には第10調査A区が現道を隔てて隣接している。

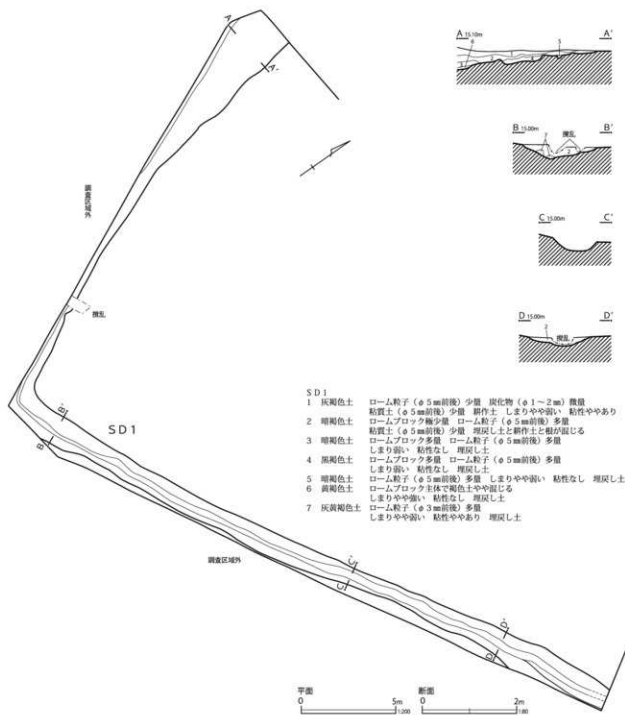
このような調査区の制約により、本来同一の溝と考えられるものが、分断された状態の調査を余儀なくされている。

B区では、調査区際をL字状に縁取るように走行する溝跡が1条検出された。隣接する調査区の成果と照合すると、第2地点西区画の調査区北壁際で検出された第2-16号溝跡と走行方向が一致しており、関連性が窺われる。

B区第1号溝跡 (第87・88図)

調査区の西壁沿いを南北に延び、東にはほぼ直角に折れ曲がり、南壁を東西に直線的に延びている。M5-E～G9・G10、M6-F2・3、G1・2グリッドに位置する。規模は検出長59.50m、幅0.80～1.52m、深さ0.06～0.41mである。南側では掘り込みが浅く、断面皿形から逆台形を呈する。西側では調査区域外に大半がかかるため、不明確であるが、北端部では幅を広げ、緩やかな斜面部を造り出していた。走行方位はN-23°-WからN-63°-Eに大きく屈曲している。

第88図1は瀬戸美濃系磁器端反碗の底部破片である。19世紀前葉に位置づけられる。2は産地不詳の陶器底部破片である。器種も不詳だが、壺甕



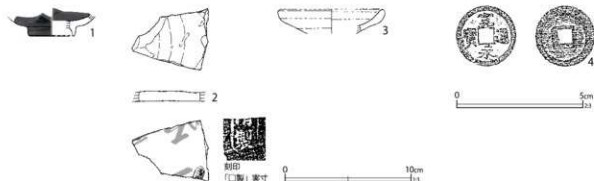
第87図 B区第1号溝跡

類のような袋物と考えられる。胎土は緻密で硬質である。内面には一部緑釉が掛かり、外面には刻印と墨書が認められる。3はかわらけで、胎土は粗雑である。4は寛永通寶（新寛永）である。

実測・図示した遺物以外に、肥前系磁器碗破片 3・瓶類胴部片 1・瀬戸美濃系陶器播鉢体部片

1・京都信楽系陶器坏破片 1・瓦質土器焙烙（平底）12・かわらけ口縁部片 1が出土している。かわらけは所謂「江戸在地系がかわらけ」と同じタイプと考えられる。

遺物の様相から18世紀～19世紀前葉に主たる機能時期が求められる。



第88図 B区第1号溝跡出土遺物

第32表 B区第1号溝跡出土遺物観察表 (第88図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	—	[1.7]	(3.5)	K	20	普通	白	瀬戸美濃系 SD1 (M5G10)	40-4
2	陶器	瓶類か	—	[0.8]	—	I K	5	普通	浅黄橙	刻印 墨書 SD1 (M6F2)	40-4
3	かわらけ	小皿	(8.0)	[1.9]	—	I K	20	普通	に黒・黄墨	SD1 (M6F2)	40-4
4	銅製品	銭貨	縦 2.44	横 2.44	厚さ 0.14	重さ 3.8 g				寛永通寶 SD1 (M5F9)	40-5

C区では、調査区の北壁際と調査区の中央を横断する溝跡が2条検出された。

周囲の既調査区の成果と照合すると、中央のC区第1号溝跡は、東側に隣接する第10次調査B区・第11次調査第2号溝跡と同一と考えられる。また、調査区北壁際のC区第2号溝跡は、第12調査B区第2号溝跡と同一であろう。

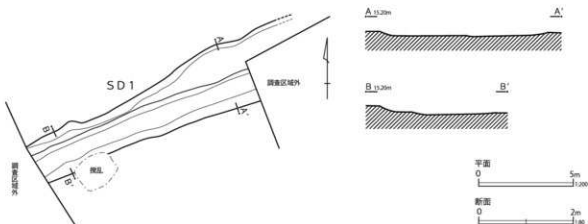
C区第1号溝跡 (第89図)

調査区中央のN6-A2・3、B2グリッドに

位置する。規模は検出長14.70m、幅2.00~3.50m、深さ0.08~0.18mである。底面の北側にわずかな段差を造り出している。

C区第2号溝跡 (第90・91図)

調査区北壁際を東西に走行する直線的な溝跡で、M6-J1・2、I2・3グリッドに位置する。規模は検出長16.60m、幅1.50~1.96m、深さ0.10~0.33mである。覆土は暗褐色土を主体とし、土層断面の観察から掘り直しが行われている。



第89図 C区第1号溝跡



第90図 C区第2号溝跡

第91図1・2は肥前系磁器碗で、所謂くわんか手の粗製碗である。18世紀代の製品である。3は常滑焼甕の胴部破片で13～14世紀の所産と考えられる。この他に肥前系陶器の京焼風碗口縁部1・瓦質土器焙烙細片2や、須恵器甕破片が出土している。

遺物の様相から、18世紀代を中心に機能したものと考えられる。



第91図 C区第2号溝跡出土遺物

第33表 C区第2号溝跡出土遺物観察表(第91図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	—	[2.8]	(2.0)	H K	30	普通	灰白	肥前系 SD2 No.3	40-6
2	磁器	碗	—	[2.3]	(2.8)	K	35	普通	灰白	肥前系 SD2 No.1	40-6
3	陶器	甕	—	[3.1]	—	H I K	5	普通	黄灰	常滑 SD2 No.2	40-6

D区からは、8条の溝跡が検出されている。

D区第1号溝跡(第92・93・94図1・2)

調査区中央を東西に走る直線的な溝跡である。西端部で南に屈曲し、調査区域外に延びる。南に隣接する第3地点では、この溝跡の続きは検出されていない。

M5-H9・10、I5-9、M5-J4-6グリッドに位置する。規模は検出長57.10m、幅0.80-3.70m、深さ0.11-0.24mである。

第94図1は肥前系陶器の皿である。口縁部が折縁状である。17世紀前半に帰属する。2は瀬戸美濃系陶器丸皿で黄瀬戸に近い灰釉を施す。やはり

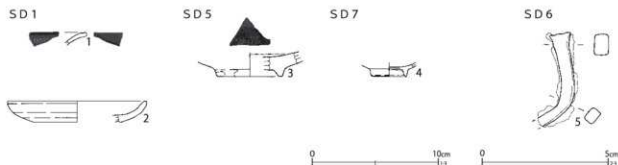
17世紀前半に帰属する。

この他に長石釉志野皿細片1・瀬戸美濃系陶器天目茶碗底部片1、菊皿底部片1、灰釉鉢類底部片1、挿鉢底部片1・常滑焼甕底部片1・瓦質土器焙烙口縁部片1、底部片1が出土している。

全体的に17世紀以前の陶磁器が多い傾向を示すが、瓦質土器焙烙の口縁部は丸みが強く、埋没時期は18世紀代に降る可能性がある。

D区第2・3号溝跡(第92・93図)

調査区南西側のM5-I4、J4-6グリッドに位置する。D区第1号溝跡の西側屈曲部に合流する、並走するやや蛇行した2条の溝跡である。



第94図 D区第1・5～7号溝跡出土遺物

第34表 D区溝跡出土遺物観察表 (第94図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	皿	—	[1.0]	—	I K	5	普通	灰黄	肥前系 SD1 (M519)	40-7
2	陶器	皿	(11.0)	[1.7]	—	I	20	良好	にぶい黄	瀬戸美濃系 SD1 (M519)	40-7
3	磁器	碗	—	[1.5]	(4.0)	K	15	良好	灰白	肥前系 蛇の目状釉剥ぎ SD5	40-7
4	陶器	坏	—	[1.1]	2.6	E H	80	普通	灰白	京都信楽系 内面灰釉 SD7	40-7
5	鉄製品	釘	長さ [3.8] 幅 0.8 × 0.6 重さ 5.4 g							SD6	40-7

D区第4号溝跡 (第92・93図)

調査区北側を東西方向に延びる溝跡で、東端部では調査区東壁沿いに南に屈曲し、西端部は北に屈曲する。M5-G3、G6～9、H3～6グリッドに位置する。規模は検出長74.30m、幅0.40～1.20m、深さ0.10～0.18mである。

実測・図示できなかったが、かわらけ口縁部破片4、底部破片1、体部破片1・瓦質土器焙烙(平底)体部破片1が出土している。かわらけは、胎土が軟質で混入物が少ないものがほとんどで、17世紀後半以前の所産と考えられる。瓦質土器焙烙も体部内面中位に稜線をもつタイプで、17世紀半ば以前に遡る様相を示す。

D区第5号溝跡 (第92・93・94図3)

調査区東壁に沿って南北に延びる溝跡で、南端はD区第4号溝跡に合流する。M5-E・F8、F・G9グリッドに位置する。規模は検出長25.00mである。

第94図3は肥前系磁器碗である。高台部を露胎、内面を蛇の目状釉剥ぎする。17世紀半ば～後半に帰属する。その他に長石釉志野皿底部細片1・瀬戸美濃系陶器播鉢体部片1・瓦質土器焙烙

(平底)底部片2・土師質土器焙烙(丸底)底部片1・須恵器甕口縁部片1が出土している。廃絶時期は18世紀以降と考えられる。

D区第6号溝跡 (第92・93・94図5)

調査区北東部の東側張出部のM5-G7・8グリッドに位置する。D区第4号溝跡の北側に並行する直線的な溝跡である。規模は検出長15.40m、幅0.30～0.80m、深さ0.05～0.80mである。

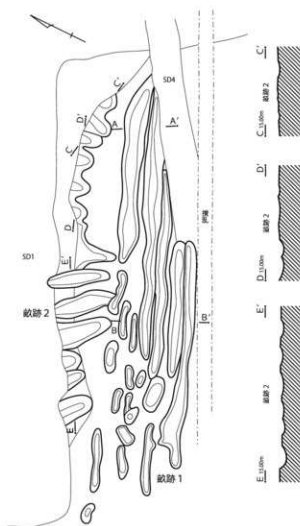
第94図5は鉄釘である。

D区第7・8号溝跡 (第92・93・94図4)

調査区北西部の西側張出部北端、M5-F3・4グリッドに位置する。重複する2条の溝跡が検出された。土層断面の観察から、D区第7号溝跡の埋没後に、D区第8号溝跡が掘削されていることが判明した。

D区第7号溝跡からは、第94図4の京都信楽系陶器の灰釉坏が出土したほか、瓦質土器焙烙(平底)底部片2・土師質土器焙烙(丸底)底部片1が出土している。京都信楽系陶器から18世紀以降の廃絶と推定される。

D区第8号溝跡からは、17世紀代の瀬戸美濃系陶器天目茶碗体部片1が出土している。



- 竅跡 1
- 1 黒褐色土 ローム粒子 (φ1~3mm) 少量
しまりやや強い 粘性なし 埋戻し土
- 2 暗褐色土 ローム粒子 (φ3mm) 少量 白色粒子 (φ2mm) 少量
しまり強い 粘性なし 埋戻し土
- 3 暗灰褐色土 ローム粒子 (φ1~3mm) 少量 白色粒子 (φ1~3mm) 少量
しまりやや強い 粘性ややあり 埋戻し土
- 4 灰褐色土 ロームブロック (φ5mm前後) 多量 ローム粒子 (φ1~3mm) 少量
- 5 灰褐色土 白色粒子 (シルト) (φ3~5mm) 少量 埋戻し土
ロームブロック (φ5mm) やや多量 ローム粒子 (φ1~3mm) 少量
しまりやや強い 粘性なし 埋戻し土

第95図 A区第1・2号竅跡

(4) 竅跡

竅跡は、国道16号西大宮バイパス線の北側に位置するA区において2箇所検出された。この他に第10次調査A区で4箇所、第12次調査A区で3箇所の竅跡が検出されている。

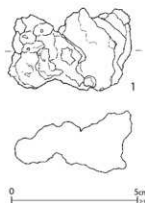
A区第1号竅跡 (第95・96図)

調査区中央、L6-J10、L7-J1グリッドに位置する。竅の方向は、ほぼ東西方向を向く。第4号溝跡、第2号竅跡と重複する。規模は東西長9.60m、南北長1.92mである。接するように竅間溝が17条延びる。部分的に途切れており、深さは0.08~0.20mと浅い。覆土には灰褐色土のヤドロが見られる。

第96図1は鍛冶滓である。表面に付着物が見られる。

A区第2号竅跡 (第95図)

調査区中央、L6-J10、L7-J1グリッドに位置する。第1号溝跡によって北側が大きく削平されているため、全容は不明である。竅の方向は、南北方向を基調としている。規模は東西長7.12mである。竅間溝は13条で、深さは0.03~0.07mと浅く、接するように並んでいる。



第96図 A区第1号竅跡出土遺物

第35表 A区第1号竅跡出土遺物観察表 (第96図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	鉄製品	滓	長さ 4.9	幅 3.3	厚さ 2.3	重さ 33.9 g				竅 1	40-8

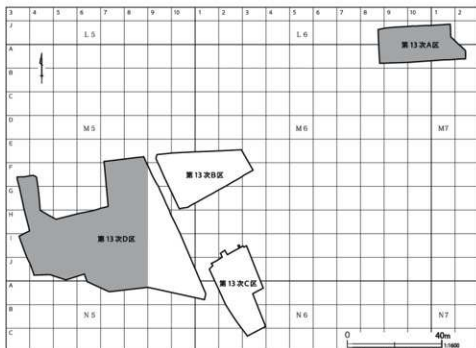
(5) ビット

ビットは調査区全体で60基を検出した（第97～100図）。その内訳は、A区5基、B区1基、C区13基、D区41基である。ビットの位置や規模については第36表に一覧をまとめた。

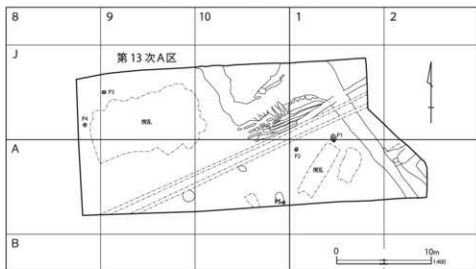
A区では撓乱範囲が広いこともあるが、分布はやや散漫である。B区では1基と少ない。C区では第1・2溝跡によって区画された空間に散在する程度である。D区では調査区東側中央のM5－

G・H8グリッドとM5－H9・10グリッドに小規模なまとまりが認められるにすぎない。

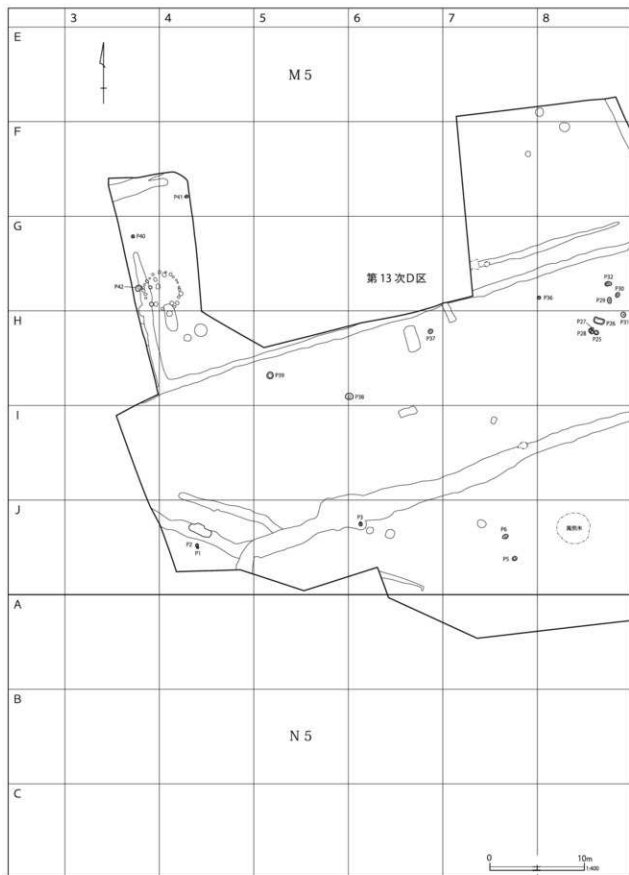
ビットの平面形は、円形もしくは楕円形を基調とし、規模は径20～112cm、深さ10～100cmと幅があり一様でないが、径20～50cm、深さ20～40cmのものが大半を占める。覆土は暗褐色土・黒褐色土を主体としている。遺物を出土するものも少なく、時期を特定することはできないが、覆土の状態から近世以降に帰属するものと判断した。



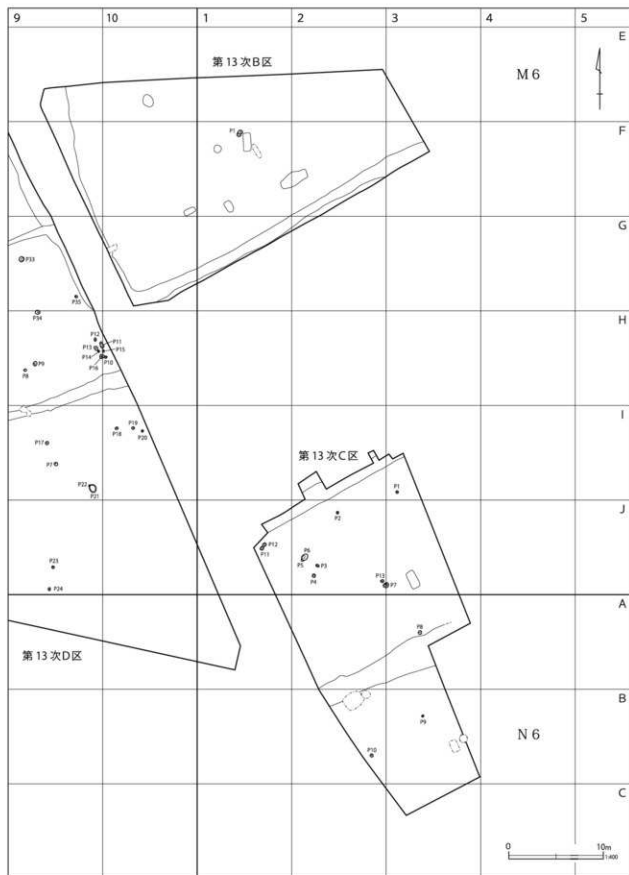
第97図 ビット分布図(1)



第98図 ビット分布図(2)



第99図 ビット分布図(3)



第100図 ビット分布図(4)

第36表 ビット一覧表

次数・区	グリッド	番号	長径 / cm	短径 / cm	深さ / cm
13次A区	L 6-J 8	4	34	33	32
	L 6-J 9	3	42	35	12
	M 6-A 10	5	30	30	94
	L 7-J 1	1	80	50	45
	M 7-A 1				
	M 7-A 1				
	M 6-F 1	1	70	46	29
13次B区	M 6-I 3	1	24	24	17
13次C区	M 6-J 1	11	50	38	22
		(2)	12	44	32
	M 6-J 2	2	32	25	13
		3	32	22	15
		4	34	32	14
		5	(27)	(10)	-
		6	72	55	100
		7	56	50	18
		13	30	28	18
	N 6-A 3	8	34	30	74
	N 6-B 2	10	34	34	48
	N 6-B 3	9	27	19	36
	M 5-F 4	41	34	28	50
	M 5-G 3	40	28	28	56
		(2)	42	80	68
	M 5-G 8	29	64	40	15
		(4)	30	46	36
		32	75	49	19
		36	33	31	19
13次D区	M 5-G 9	33	60	58	31
		(3)	34	50	41
		35	25	25	49
	M 5-H 5	38	72	67	21

次数・区	グリッド	番号	長径 / cm	短径 / cm	深さ / cm
13次D区	(2)	39	58	58	11
	M 5-H 6	37	38	36	58
		25	50	46	17
	(5)	26	112	60	14
		27	62	(35)	22
		28	30	(26)	16
		31	55	50	25
	M 5-H 9	8	34	26	36
		9	52	44	31
		11	68	37	24
		12	34	31	49
		13	53	34	64
		14	28	22	16
	M 5-H 10	16	48	44	64
		10	30	26	28
	(2)	15	36	25	30
		7	40	34	13
	M 5-I 9	17	34	30	38
		21	(20)	(10)	14
		22	94	73	27
		18	32	20	12
	M 5-I 10	19	30	29	55
		(3)	20	27	24
	M 5-J 4	1	26	26	13
		(2)	2	35	(25)
	M 5-J 6	3	37	32	35
	M 5-J 7	5	50	36	22
		(2)	6	60	40
	M 5-J 9	23	26	24	26
		(2)	24	32	30

(6) グリッド出土遺物

第101図に遺構に伴わずに取り上げられた中・近世の遺物を図示した。1～3がB区、4～7がD区から出土している。

1は肥前系磁器碗の口縁部破片で、やや直立ぎみに立ち上がる。内外面とも施軸され、口縁部内面にはやや厚く軸が掛かっている。外面には染付が施される。17世紀半ば～後葉に位置づけられる。

2も肥前系磁器碗の口縁部破片で、内外面ともに施軸され、外面には一重の網目文を染付する。17世紀後葉頃に位置づけられる。

3は金属製品で、煙管の雁首部分である。火皿直下の脂反し部はほとんど湾曲せず、頸部は強く屈曲する。肩部はやや太くなり、断面八角形に成形されている。特徴的な形態から19世紀代のものと考えられる。

4は中国産磁器皿の底部小破片である。内外面とも施軸され、内面に二重圏線、外面に圏線と花文が染付される。景德鎮窯系と考えられるが、軸調・胎質ともやや粗製である。15世紀後葉～16世紀前葉頃の所産と考えられる。

5は肥前系磁器の青磁皿である。全体に器壁が厚く、粗製である。内面の軸下には片切彫りで葉文が施されている。高台疊付部（露胎部）は比較的幅広く平坦に成形され、内側に砂の付着が認められる。所謂波佐見系の製品で、17世紀代のものと考えられる。

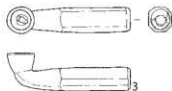
6は瀬戸美濃系陶器の皿である。高台端部を含め長石軸が全面施軸されており、特に体部内面は厚く軸葉が掛かっている。内面に縦の稜を入れ、菊花皿状に成形している。17世紀初頭頃に位置づけられる。

7は瀬戸美濃系陶器の播鉢で、内外面ともに若干光沢のある鉄釉が施される。口縁部は折り返しており、明瞭な縁帯を作り出す。大窯第3段階、16世紀中葉頃に位置づけられる。

以上のように第13次調査区には15～17世紀代の

遺物が散見される。この他にB区から中世の瓦質土器鉢破片1（M5-F9グリッド）・17世紀後葉～18世紀前葉の志戸呂系陶器灯明皿（M6-E2グリッド）が、C区から中世の常滑甕片（C区一括）が出土している。

B区



0 5cm

D区



0 10cm

第101図 B・D区グリッド出土遺物

第37表 B・D区グリッド出土遺物観察表（第101図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	—	[4.8]	—	H I K	5	良好	白	肥前系 B区 M5P9	—
2	磁器	碗	—	[2.6]	—	I	5	良好	灰白	肥前系 B区 M5P9	—
3	陶製品	煙管	雁首 長さ [4.9]		火皿 径 1.1	重さ 12.4 g				B区 M5G10	—
4	磁器	皿	—	[1.3]	—	H I	5	普通	浅黄	中国産 D区 M5H	—
5	磁器	皿	—	[3.1]	(7.0)	I K	25	良好	灰白	肥前系 青磁 D区 M5H6	—
6	陶器	皿	—	[1.4]	(7.6)	E H I	15	普通	灰白	瀬戸美濃系 長石釉 内外面施釉 D区 M5H	—
7	陶器	播鉢	—	[3.0]	—	I K	5	良好	に高い光澤	瀬戸美濃系 D区 M5H 9	—

VII 第14次調査

1. 概要

第14次調査の調査地点は、遺跡範囲の北西部に位置し、国道16号西大宮バイパス線の北側に当たる。駱駝の瘤のように北に張り出した西側張出部の平坦地に立地する。調査区は、南側に第6地点、西側に第4地点、北西側に第13地点、東側に第21次調査B区がそれぞれ隣接する。調査面積は398㎡である。

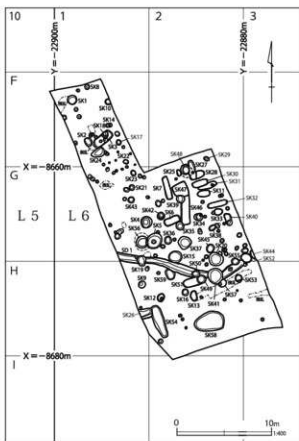
検出された遺構は、縄文時代後期の土壌10基、平安時代の土壌1基、近世の土壌48基、溝跡1条、ビット87基である。

縄文時代後期の土壌は、調査区の中央部にまとまって分布している。このうち第4・5・48・56号土壌は、直径1.1～2.2m、深さ約2.2mで、貯蔵穴と考えられる。いずれの土壌も覆土上層から多量の土器片が出土しているが、下層からの遺物の出土はわずかであった。

平安時代の土壌が1基検出された。ロクロ土師器の高台付杯や土師器甕、砥石が出土した。大木戸遺跡では平安時代の遺構が検出されたのは唯一である。

近世の遺構は調査区全体に密に分布し、特に第1号溝跡の北側に土壌やビットが集中している。

土壌は円形のものが多く、長方形のものは調査区北東部にややまとまっている。全体に出土遺物は少ないが、第38・54号土壌からは陶磁器類がや



第102図 第14次調査区全体図

やまとまって出土した。

第1号溝跡は、第4地点第6号溝跡から続くもので、屋敷地の周辺を区画する溝と考えられる。肥前系や瀬戸美濃系の陶磁器類が出土し、18世紀後半の様相を示す。

2. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 土壌

第4号土壌 (第103・105図1～9)

L6～G1グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、筒形に深い土壌である。規模は長径1.20m、短径1.17m、深さ2.14mである。遺物は土壌の開口部付近から出土しており、土壌が埋まる最終過程に流れ込んだものと判断される。

出土遺物は第105図1～9の土器片である。1は垂下する3本沈線と斜行する3本沈線、曲線的に垂下する2本沈線が組み合わされる、堀之内1式土器である。

2・3は磨消縄文でモチーフが描かれる堀之内2式土器で、2はジグザグな、3は楕円区画を囲むモチーフが施文されている。

4・5は胴部に施文された1帯構成の縄文帯と思われる。区画内にL R縄文施文されている。

6はL R縄文の地文上に角状平行沈線が施文されているもので、加曽利B式になる可能性もある。

7は内文をもつ加曽利B 1式の浅鉢であり、内文の楕円区画文の上部に、「の」字状文が施文されており、R L縄文が充填施文されている。

8・9は底部に網代圧痕のある破片で、8は底部が突出する場之内2式の底部と思われる。

第5号土壌 (第104・105図10～31)

L 6-G 2 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、墳底の中央部に径0.42m、深さ0.36mの子ピットをもっている。規模は長径1.73m、短径1.15m以上、深さ1.33mである。長軸方位はN-30°-Eを指す。L 6-G 2 グリッドP 27、第56号土壌と重複するが、本土壌の方が新しい。

出土遺物は第105図10～31である。10～16は堀之内1式土器の深鉢の口縁部破片である。10はやや内湾する口縁部に円形刺突列を施文するもので、刺突文列は、口縁部上の沈線で繋がれているものと思われる。11は口縁部の内折が強く、口唇部が内削状となり、口縁外端部との間に、盲孔を繋ぐ太い凹線状の沈線が巡らされる。

12は強く括れて屈曲する胴部に、「8」字状貼付文が付き、貼付文を起点として平行沈線の胴部区画、貼付文から垂下するモチーフが展開する。一見すると口縁部のようなすが、擬口縁である。

13は口縁部に隆帯を貼付し、2本沈線で区画することによって、沈線に挟まれた部分が1本の隆帯となっている。この中央部の隆帯には斜位の浅い刻みが施されている。

14も同様に幅広い隆帯が口縁部に貼付されて肥厚口縁部が形成されており、斜位の刻みが施されている。

15は口縁部に横位の沈線が施文され、地文にL R縄文が施文されている。

16は角頭状の口唇部が幅広となり、2本沈線が

巡らされている。

17・18は胴部で括れる器形で、括れ部の盲孔を持つ貼付文を起点としてモチーフが描かれるものである。

19は胴部で括れて、波状口縁が外反する器形で、波頂部から指頭状の押圧を施した隆帯が胴部まで垂下されるものである。

20は胴部の沈線区画から、複数の蛇行沈線が垂下される。21・22は沈線が施文されている。

23は口縁部が内折する浅鉢で、肩部の文様帯内に2本沈線の鋸歯状文が施文され、中央部にJ字文が施文されている。

24は平行沈線が施文されている。

25～27は堀之内2式の深鉢の口縁部破片で、25は口縁部に刻みを施す隆帯が巡らされる。26は平行沈線が、27は口縁部が無文となる。

29・30は無文の胴部破片で、28は底部である。

31はホルンフェルス製の分銅形打製石斧で、頭部を欠損する。

第15号土壌 (第103・106図32)

L 6-G 2 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、墳底は平坦である。規模は長径1.39m、短径1.20m、深さ0.37mである。長軸方位はN-83°-Wを指す。第1号溝跡と重複する。

遺物は、第106図32の土器が出土した。32は三角柱状に突出した突起で、横位の沈線が突起を囲むように施文されている。把手の付け根には「8」字状の貼付文が施されている。堀之内1式土器である。

第21号土壌 (第103・106図33)

L 6-G 1 グリッドに位置する。平面形は円形のピット状である。規模は長径0.59m、短径0.59m、深さ0.44mである。

遺物は第106図33が出土した。33は堀之内2式の深鉢の胴部破片で、沈線の円形モチーフが施文されている。

第36号土壌 (第103図)

L 6-G 2 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、城底は皿状を呈する。規模は長径0.84m、短径0.70m、深さ0.20mである。長軸方位はN-25°-Wを指す。

遺物は出土していない。

第42号土坑 (第103・106図34~37)

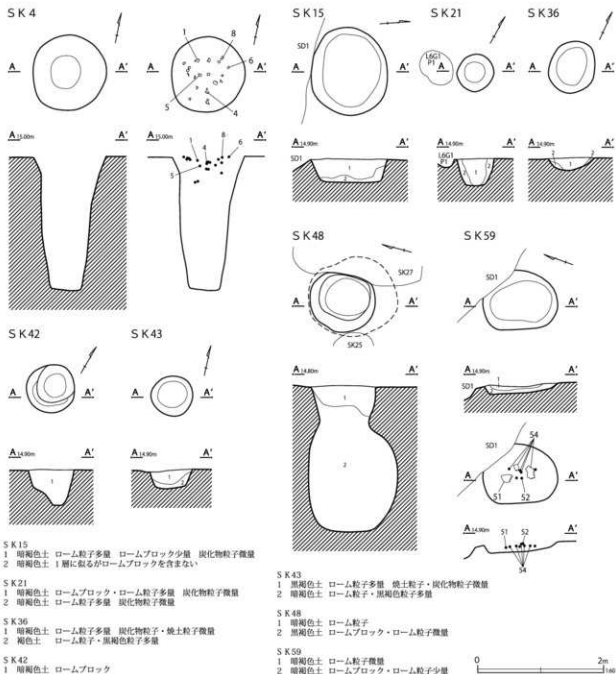
L 6-G 2 グリッドに位置する。平面形は円形

で、ビット状の落ち込みがある。規模は長径0.76m、短径0.75m、深さ0.56mである。

遺物は第106図34~37が出土した。34~37は堀之内2式の深鉢で、34・35は口縁部に隆帯が巡らされる。34は2本の隆帯が施文されている。

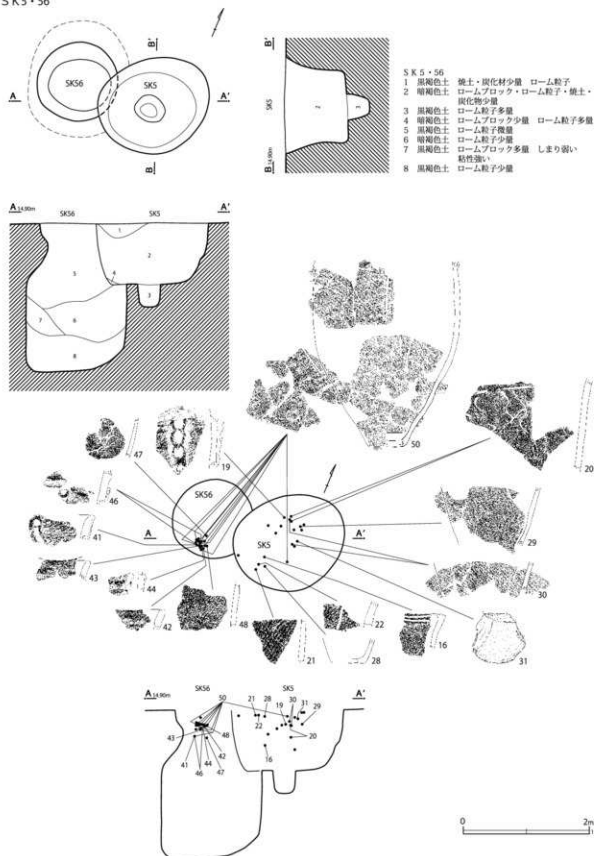
第43号土坑 (第103図)

L 6-G 1 グリッドに位置する。平面形は円形



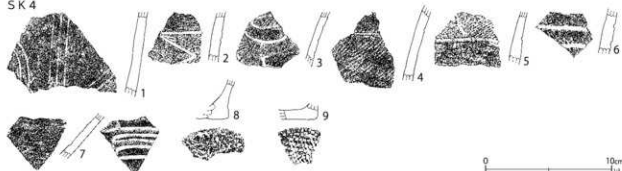
第103図 土坑 (1)

SK5・56

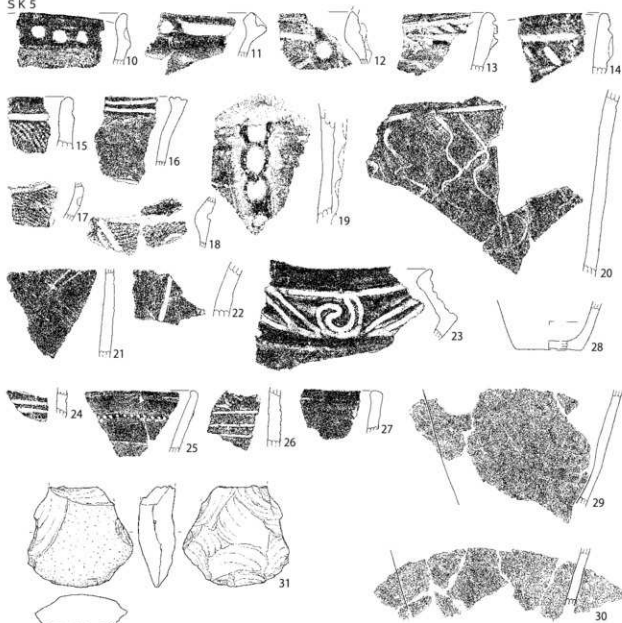


第104図 土壌(2)

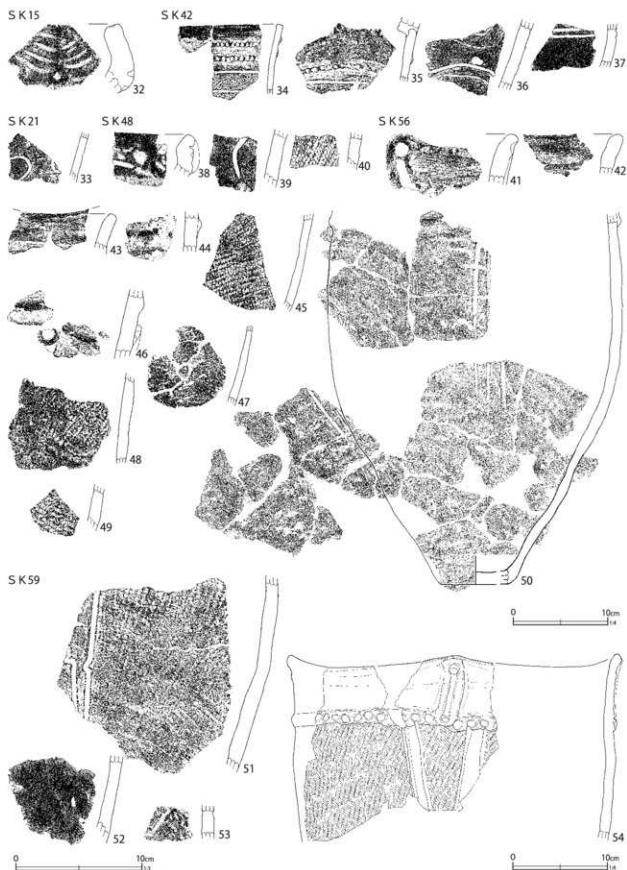
SK4



SK5



第105図 土坑出土遺物(1)



第106图 土城出土遗物(2)

で、墳底は平坦である。規模は長径0.65m、短径0.63m、深さ0.28mである。

遺物は出土していない。

第48号土墳（第103・106図38～40）

L 6-G 2 グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は長径1.06m、短径0.88m以上、深さ2.30mである。第27号土墳と重複する。

遺物は第106図38～40が出土した。38は内折する口縁部が開く器形で、盲孔を繋ぐ沈線で挟まれた隆帯が口縁部に巡らされ、刻みが施される。39は無地文上に蛇行沈線が施文され、40はLR縄文が施文されている。いずれも堀之内1式に比定されよう。

第56号土墳（第104・106図41～50）

L 6-G 1 グリッドに位置する。開口部はほぼ円形で、墳底の広がる袋状土墳である。規模は推定長径1.45m、短径1.35m、深さ2.30mである。長軸方位はN-85°-Eを指す。第5号土墳と重複するが、本土墳が切られている。

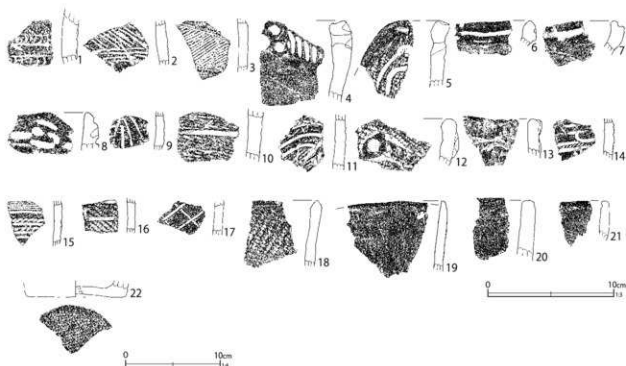
遺物は第106図41～50が出土した。41～43は無文の口縁部が外反する器形で、41は緩い波状口縁を呈し、波頂部の盲孔から低い隆帯上に凹線状の沈線が弧状に垂下される。44・46は横位の隆帯が施文され、46は隆帯上に盲孔をもつ貼付文が施されている。

50は大型破片から復元したもので、上下破片は接合しないが、口縁部を隆帯で区画し、3本の沈線懸垂文が垂下される。推定底径7.0cm、現存高39.3cmを測る。45・47～49は縄文が施文される破片で、地文はLR縄文である。

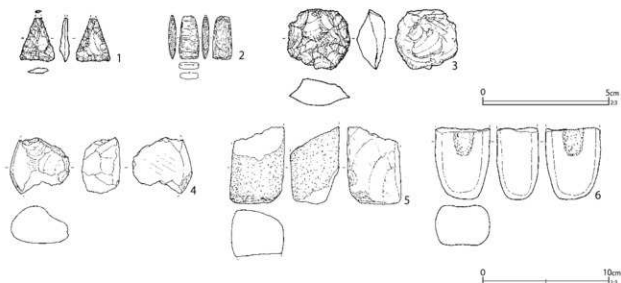
第59号土墳（第103・106図51～54）

L 6-H 2 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、浅い皿状の土墳である。規模は長径1.18m、短径0.93m、深さ0.14mである。長軸方位はN-19°-Wを指す。第1号溝跡と重複する。

出土遺物は、第106図51～54が出土した。54は無文の口縁部が緩く開く器形で、押圧状の刻みを加えた隆帯で口縁部が区画されている。口縁は緩



第107図 グリッド出土遺物（1）



第108図 グリッド出土遺物(2)

第38表 出土石器観察表

番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	図版
第105図31	打製石斧	ホルンフェルス	[8.0]	8.4	2.9	221.6	14次 SK5 №8 胴部不明	49-4
第108図1	石鏃	チャート	[1.8]	1.3	0.4	0.6	14次 表採 欠損	49-7
第108図2	小型磨製石斧	頁岩	3.5	1.5	0.6	5.4	14次 L6H2	49-8
第108図3	礮器	黒曜石	2.4	2.5	1.0	5.7	14次 SK12	—
第108図4	蔽石	安山岩	[4.5]	[4.7]	3.0	64.7	14次 SK54	—
第108図5	蔽石	砂岩	[6.1]	4.3	3.9	132.9	14次 SK54	—
第108図6	凹石	安山岩	[5.7]	4.4	3.3	127.1	14次 SD1	—

い波状を呈し、波頂部から盲孔を繋ぐ沈線が施された低い隆帯が弧状に垂下され、胴部に磨消縄文でV字状モチーフが描かれている。地文にLR縄文が施文されている。推定口径34.6cm、現存高19.8cmを測る堀之内1式的大型土器である。

51は54の同一個体と思われ、LR縄文地文上に磨消縄文のH状モチーフが垂下されている。

52は無文土器、53は斜行沈線が施文されている。

(2) グリッド出土遺物

縄文土器 (第107図1～22)

1は爪形文が施され、2は平行沈線が施文される諸磯b式土器である。

4～8は堀之内1式土器の口縁部で、4・5は波状口縁、6～8は緩い波状口縁を呈する。4は波頂部の円孔を囲むように刺突文が施され、さらに弧状沈線が囲むように施文される。6・7は口縁部に沈線が施文され、8は口縁の突起下の盲孔

を繋ぐように、沈線が巡らされている。

9～11は堀之内2式の深鉢の胴部破片である。

9は沈線の弧線文が垂下され、10は横位沈線で区画され、11は地文縄文上に曲線文が描かれる。

12～17は加曾目B1式土器で、12・13は紐縄文系土器、14は鉢、15は注口土器の可能性はある。12は縄文地文上に隆帯を貼付している。16は平行沈線を施文する縄文帯をもち、17は格子目文が描かれる。18はLR縄文が施文される口縁部、19～21は無文土器の口縁部、22は底部である。

石器 (第108図1～6)

1はチャート製の石鏃で、先端部を欠損する。

2は小型磨製石斧で、表裏、両側面とも良く研磨されている。3は黒曜石製のサムスクレイパーである。4・5は蔽石で、6は凹石である。いずれも欠損しているが、磨石との兼用が再利用と思われる。

3. 平安時代の遺構と遺物

(1) 土壌

第33号土壌 (第109・110図)

調査区中央東寄り、L6-G2グリッドに位置する。ビットによって西壁の一部が壊される。平面形は楕円形で、規模は長径0.80m、短径0.70m、深さ0.12mである。長軸方位はN-80°-Eを指す。遺物は北壁寄りから、ロクロ土師器の高台付坏、土師器甕、砥石が出土した。

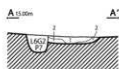
第110図1は坏の口縁部片である。2は器壁が

厚く、粘土紐を貼り付けただけの粗雑な高台をもつ。1・2とも酸化塩焼成である。3～6は土師器甕である。口縁部は緩やかにくの字に立ち上がる。胴部外面に横方向の回転力の強い調整痕を残す。6は胴部外面に塊状をなす鉄分が付着している。3・5は還元塩焼成に近い焼き上がりである。

7は流紋岩製の砥石である。両側面に丸ノミ状工具痕を残す。

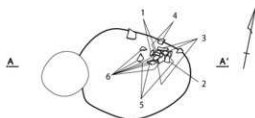
遺物の時期は、10世紀前葉と考えられる。

SK33

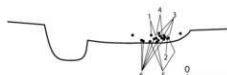


SK33

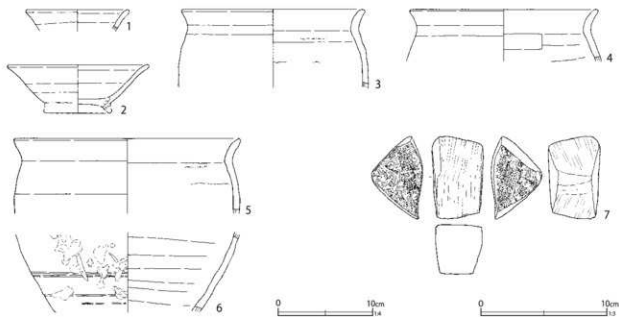
1 黒褐色土 ローム粒子・白色粒子多量
2 褐色土 ロームブロック・黒褐色粒子多量



A 11.00m



第109図 第33号土壌



第110図 第33号土壌出土遺物

第39表 第33号土曜出土遺物観察表(第110図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	ロクロ土師器	坪	(10.6)	[2.3]	—	E G H	30	良好	に染・黄褐色	№4・7	53-1
2	ロクロ土師器	高台付坪	(14.8)	[4.8]	—	E G H I	10	普通	橙	№6・8	53-1
3	土師器	甕	(19.0)	[8.3]	—	E H I	10	良好	褐灰	№15	53-2
4	土師器	甕	(19.6)	[5.5]	—	E H I	10	普通	に染・黄褐色	№5・9・10	53-3
5	土師器	甕	(23.6)	[8.0]	—	E I	15	普通	褐灰	№14・17・18	53-2
6	土師器	甕	—	[8.5]	—	A E H I	20	普通	灰黄褐	外面塊状鉄分付着 №2・3・12・16～18	53-3
7	石製品	砥石	長さ 6.5	幅 3.9	厚さ 4.1	重さ 112.8 g				波紋岩 両側面に丸ノミ状工具痕	53-4

4. 近世の遺構と遺物

(1) 土壌

近世の土壌は、調査区内から48基検出された(第111～114図・第41表)。

第1号土壌(第111図)

L6-F1グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は鍋底形である。

第2号土壌(第111図)

L6-F1グリッドに位置する。平面形は楕円形で、攪乱により一部壊されている。

第3・18号土壌(第111図)

L6-F1グリッドに位置する。長方形を呈する第3号土壌の墳底面を掘り込む平面楕円形の第18号土壌が検出された。底面に焼土が見られた。

第6号土壌(第111図)

L6-G2グリッドに位置する。平面形は長方形である。

第7号土壌(第111図)

L6-G2グリッドに位置する。平面形は狭長な長方形で、掘り込みは浅い。

第8号土壌(第111図)

L6-F1グリッドに位置する。平面形は円形で、小規模な土壌である。

第9号土壌(第111図)

L6-H1グリッドに位置する。平面形は円形である。覆土は暗褐色土の単一層である。

第10号土壌(第111図)

L6-F1グリッドに位置し、東側は調査区域外にかかる。平面形は円形と考えられる。

第11号土壌(第111図)

L6-G2グリッドに位置する。平面形は楕円形で、掘り込みは浅い。

第12号土壌(第111図)

L6-G2グリッドに位置する。平面形は楕円形で、掘り込みが浅く、ビットと重複する。

第13・16号土壌(第111図)

L6-H2グリッドに位置し、東西に並列している。第13号土壌の平面形はやや不整な楕円形、第16号土壌の平面形は円形である。

第14号土壌(第111図)

L6-G1・2グリッドに位置する。平面形は楕円形で、墳底面は二段掘りになっている。

第17号土壌(第111図)

L6-F1グリッドに位置する。平面形は楕円形で、掘り込みが深い。

第19号土壌(第111図)

L6-G・H1グリッドに位置する。平面形は不整形で、断面形は逆台形である。

第20・45号土壌(第112図)

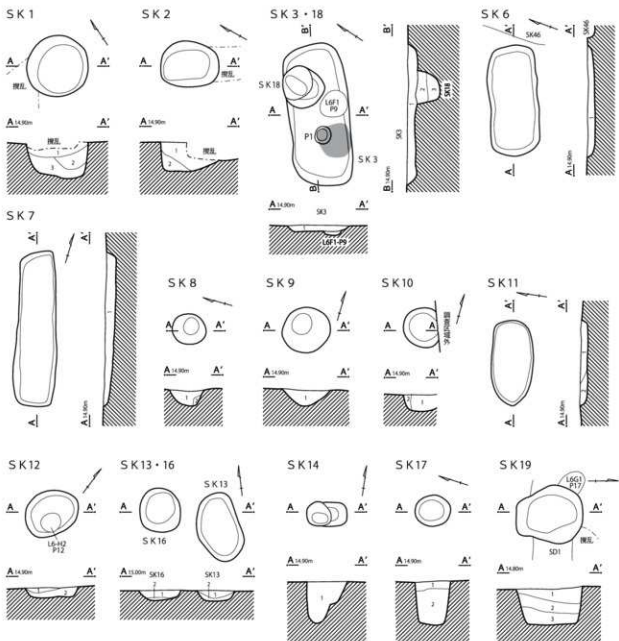
L6-G・H2グリッドに位置し、やや大型の第20号土壌の北西側に、第45号土壌が近接する。

第22号土壌(第112図)

L6-F1グリッドに位置する。平面形は楕円形で、掘り込みが深い。断面形は筒形に近い。

第23号土壌(第112図)

L6-G1グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は箱形である。



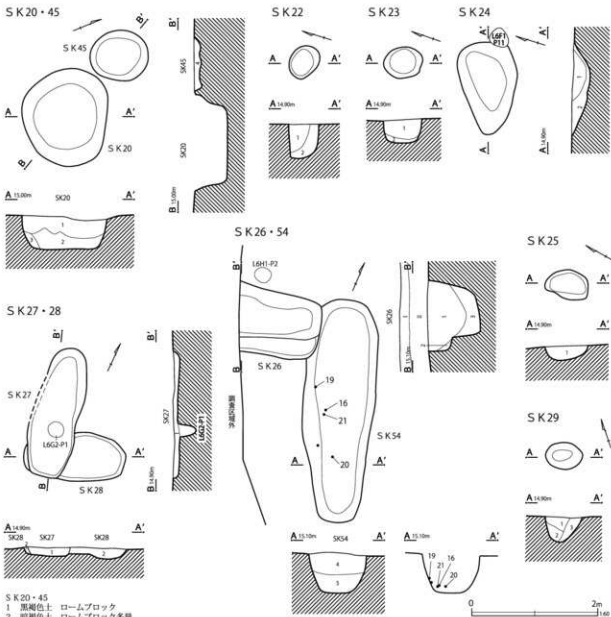
- SK 1
1 黒褐色土 ローム粒子
2 黒褐色土 ローム粒子 粘性あり
3 褐色土 ロームブロック多量
- SK 2
1 黒褐色土 ローム粒子
2 暗褐色土 ロームブロック少量 ローム粒子多量 粘性あり
- SK 3・18
1 黒褐色土 ロームブロック少量 焼土微量
2 黒褐色土 ローム粒子
3 黒褐色土 ロームブロック少量 ローム粒子多量
- SK 6
1 暗褐色土 ローム粒子 ローム粒子少量
- SK 7
1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子・
灰褐色土多量

- SK 8
1 黒褐色土
2 暗褐色土
- SK 9
1 暗褐色土 ローム粒子少量
- SK 10
1 暗褐色土 ロームブロック少量
2 暗褐色土 ローム粒子多量
ローム粒子・焼土少量
- SK 11
1 黒褐色土 ローム粒子少量
2 暗褐色土 ローム粒子
- SK 12
1 にぶい黄褐色土 ローム粒子多量
2 黒褐色土 ローム粒子

- SK 13・16
1 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子
2 暗褐色土 ロームブロック少量 ローム粒子
- SK 14
1 暗褐色土 ローム粒子
- SK 17
1 暗褐色土 ローム粒子多量
2 黒褐色土 ローム粒子
- SK 19
1 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
灰褐色土少量
2 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
3 黒褐色土 ロームブロック少量 ローム粒子多量

0 2m 100

第111図 土壌(1)



- S K20・45
- 1 黒褐色土 ロームブロック
 - 2 暗褐色土 ロームブロック多量
 - 3 黒褐色土 ローム粒子少量 粘性あり
 - 4 黒褐色土 ローム粒子

- S K22
- 1 黒褐色土 ローム粒子少量
 - 2 黒褐色土 ロームブロック少量

- S K23
- 1 暗褐色土 ローム粒子多量
 - 2 暗褐色土 ロームブロック ローム粒子多量

- S K24
- 1 黒褐色土 ローム粒子
 - 2 暗褐色土 ローム粒子 炭化材微量

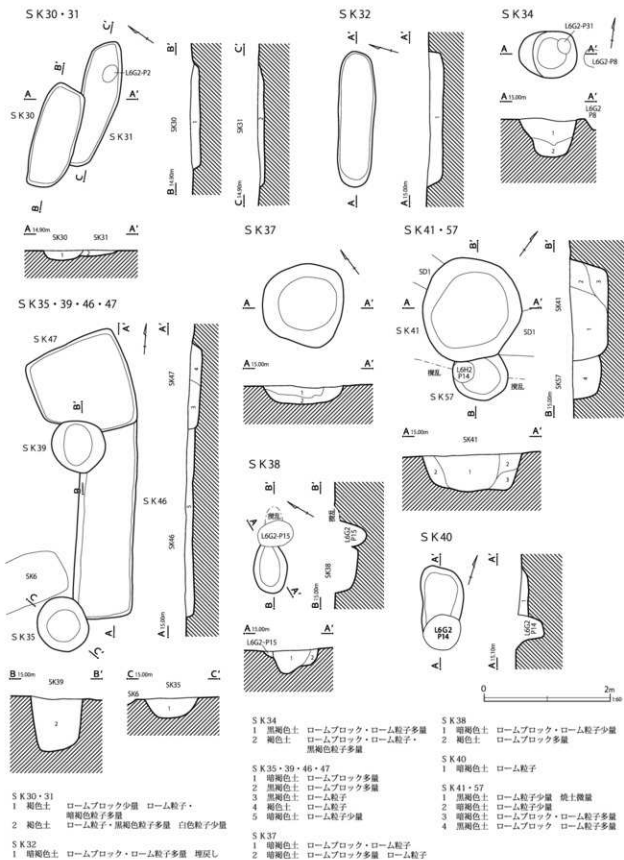
- S K25
- 1 暗褐色土 ロームブロック多量
 - 2 暗褐色土 ローム粒子・灰褐色粒子

- S K26・54
- 1 灰黄褐色土 新作土
 - II にぶい・黄褐色土 新作土
 - 1 暗褐色土 ローム粒子少量
 - 2 黒褐色土 ローム粒子多量
 - 3 暗褐色土 ロームブロック多量 崩落土
 - 4 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量
 - 5 黒褐色土 ロームブロック

- S K27・28
- 1 暗褐色土 ローム粒子・黒褐色粒子多量
 - 2 暗褐色土 ローム粒子多量

- S K29
- 1 暗褐色土 ローム粒子多量
 - 2 暗褐色土 ローム粒子 粘性強い
 - 3 褐色土 ロームブロック

第112図 土壌(2)



第113図 土壌(3)

第24号土壌 (第112図)

L 6-F 1 グリッドに位置する。平面形は不整形で、断面形は鍋底形である。

第25号土壌 (第112図)

L 6-G 2 グリッドに位置する。平面形は不整形で、掘り込みは浅い。

第26・54号土壌 (第112・116図16～21)

L 6-H 1・2 グリッドに位置する。第54号土壌を壊して、第26号土壌が構築されている。

第26号土壌は、西側は第4地点で調査された第4-12号土壌と同一のものである。平面形は不整形で、南壁に段差を造り出している。

第54号土壌は平面形が隅丸長方形で、掘り込みも深い。長さ3.52mの大型の土壌である。

第116図16～18は肥前系磁器の碗である。16は粗製碗で、18世紀代の製品である。17はやや薄手の体部片である。18は高台部をやや薄く作る梅樹文碗で、18世紀前半頃の所産と考えられる。19は瀬戸美濃系陶器の香炉で、外面に半菊文を陰刻する。17世紀後半～18世紀前半の所産である。20・21は瀬戸美濃系陶器の描鉢である。20は口縁部を長く折り返しており、18世紀前半の所産と考えられる。

その他に肥前系磁器粗製碗破片4 (18世紀頃)、高台部露胎の皿体部片1 (17世紀後半)、瓶類頸部片1 (18世紀)、肥前系陶器刷毛目碗細片1・瀬戸美濃系陶器天目茶碗口縁部片1、灰釉香炉底部片1、鉄釉杯1・瓦質土器焙烙 (平底) 破片9が出土している。18世紀前半～半ばに帰属する遺構と考えられる。

第27・28号土壌 (第112図)

L 6-F・G 2 グリッドに位置する。第27号土壌によって、第28号土壌が壊されている。両土壌とも平面形は隅丸長方形で、掘り込みが浅い。

第29号土壌 (第112図)

L 6-F 2 グリッドに位置する。平面形が楕円形を呈するピット状の小規模な土壌である。

第30・31号土壌 (第113図)

L 6-G 2 グリッドに位置する。第31号土壌を壊して、第30号土壌が構築されている。長軸方向を同じくする、平面形が長方形を呈する土壌である。掘り込みは浅い。

第32号土壌 (第113・115図1)

L 6-G 2 グリッドに位置する。平面形は狭長な隅丸長方形で、覆土は埋戻しと考えられる。

第115図1は瀬戸美濃系陶器で内外面ともに鉄釉 (柿釉) が施される。器種は不明であるが、瓶類のように上方が開くものと考えられる。

第34号土壌 (第113図)

L 6-G 2 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形である。

第35・39・46・47号土壌 (第113図)

L 6-G 2 グリッドに位置する。第46号土壌を、第35・39・47号土壌が壊している。第35号土壌は円形で、断面形は逆台形である。第39号土壌は平面形は円形で、筒形に深く掘り込む。第46号土壌は平面形が長方形で、掘り込みが浅い。第47号土壌は平面形が不整形で、掘り込みが浅い。

第37号土壌 (第113・115図2)

L 6-G 2 グリッドに位置する。平面形は円形である。覆土は暗褐色土を主体とする。

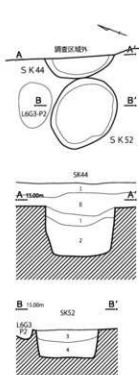
第115図2は肥前系磁器の坏である。器壁は薄手に作られ、絵付けも丁寧である。17世紀後半～18世紀前半に比定される。

第38号土壌 (第113・115図3～9)

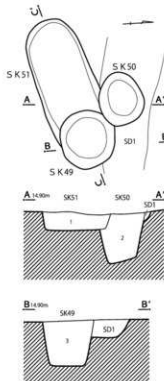
L 6-G 2 グリッドに位置し、ピットによって北東壁が壊される。平面形は不整形である。

第115図3は中国南部産の白磁皿である。高台部は露胎とする。15世紀代の所産と考えられる。4は瀬戸美濃系陶器で内外面とも長石釉を施す。17世紀前葉の所産である。5は瓦質土器焙烙の破片で15～16世紀の所産、6は瓦質土器焙烙で17世紀前半の所産である。7は丸瓦の破片であり、本遺構に帰属するものならば、17世紀代の瓦と位置づけられる。8・9は砥石で、9には二側面に

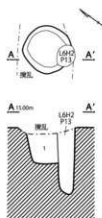
S K 44・52



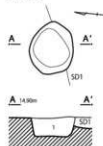
S K 49・50・51



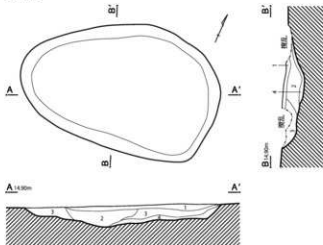
S K 53



S K 55



S K 58



S K 44・52

- 1 灰褐色土 耕作土
2 に近い黄褐色土 耕作土
3 暗褐色土 ロームブロック微量 ローム粒子少量
4 灰褐色土 ローム粒子少量
5 暗褐色土 ロームブロック多量
6 褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量

S K 49・50・51

- 1 灰褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子・黒褐色粒子多量

S K 53

- 1 灰褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量

S K 55

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量 ローム粒子多量

S K 58

- 1 灰褐色土 ローム粒子微量
2 暗褐色土 ローム粒子少量
3 暗褐色土 ロームブロック多量
4 褐色土 ロームブロック多量



第114図 土壌(4)

丸ノミ状工具痕が残る。その他に瀬戸美濃系陶器長石軸皿(志野丸皿)細片2・瓦質土器焙烙(平底)破片8が出土している。肥前系磁器は含まれず、17世紀前葉に帰属する遺構と考えられる。

第40号土壌 (第113図)

L 6-G 2 グリッドに位置する。南壁がピットによって壊されている。平面形は不整形である。

第41・57号土壌 (第113図)

L 6-H 2 グリッドに位置する。第57号土壌を第41号土壌が壊す。第41号土壌はやや大型の円形土壌、第57号土壌は小型の円形土壌である。

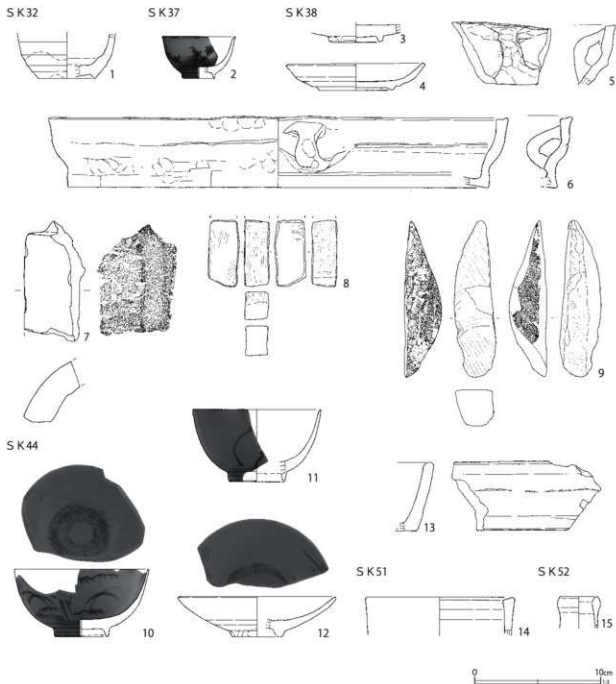
第44・52号土壌 (第114・115図10～13・15)

L 6-G 2・3 グリッドに位置する。第52号土壌の東側に第44号土壌が近接する。第44号土壌は

東半分が調査区域外にかかるため、全容は明確でないが、筒形に深く掘り込まれている。第115図10・11は肥前系磁器の粗製碗で、10の内面は蛇の目状釉刺ぎされる。いずれも18世紀代の製品である。12は肥前系磁器の皿で、高台部を露胎、内面を蛇の目状釉刺ぎする。17世紀半ば～後半の製品である。13は瓦質土器焙烙の体部破片で、外面下

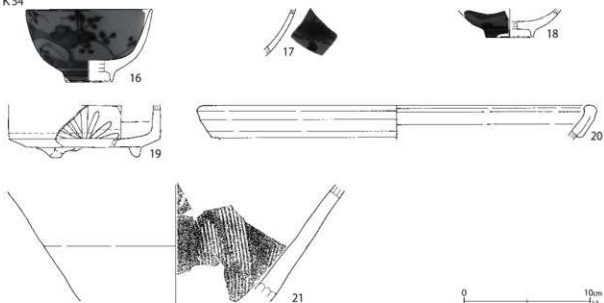
位は全体的にヘラナデ調整される。18世紀代の所産と考えられる。その他に肥前系磁器碗破片2・土師質土器火鉢口縁部片1が出土している。肥前系磁器碗は梅樹文を染付けする粗製の碗である。18世紀代に帰属する遺構と考えられる。

第52号土坑は、平面形が楕円形を呈し、断面形は箱形である。第115図15は志戸呂系陶器の瓶で



第115図 土坑出土遺物(1)

SK54



第116図 土壌出土遺物(2)

第40表 土壌出土遺物観察表(第115・116図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	瓶類か	—	[3.7]	(4.6)	H I	45	良好	浅黄	瀬戸美濃系 SK32	54-1
2	磁器	坏	(5.6)	3.3	(2.6)	K	25	良好	白	肥前系 SK37	54-1
3	磁器(白磁)	皿	—	[1.4]	(4.2)	K	25	良好	浅黄	中国産 SK38	54-1
4	陶器	皿	(10.7)	2.1	(5.8)	H	25	普通	灰白	瀬戸美濃系 総軸 SK38	54-1
5	瓦質土器	焙烙	—	[4.7]	—	H I K	5	普通	にい黄褐	外面煤付着 SK38	54-1
6	瓦質土器	焙烙	(36.0)	5.6	(33.0)	H I K	15	良好	明黄褐	中心部 褐灰色 SK38	54-1
7	瓦	丸瓦	長さ 3.5 幅 1.8 高さ 1.6	—	—	D I K	—	良好	灰白	SK38	54-1
8	石製品	砥石	長さ [5.2]	幅 2.0	厚さ 2.4	重さ 42.2 g	流紋岩 使用のため加工痕不明 SK38			SK38	54-1
9	石製品	砥石	長さ 12.5	幅 3.3	厚さ 3.0	重さ 109.9 g	流紋岩 側面丸ノミ状工具痕 SK38			SK38	54-1
10	磁器	碗	(10.6)	5.3	4.0	K	65	普通	灰白	肥前系 蛇の目状軸刺ぎ SK44	53-5
11	磁器	碗	(10.0)	[5.7]	(4.2)	K	25	普通	灰白	肥前系 SK44	54-1
12	磁器	皿	(12.2)	3.2	(4.0)	H K	30	良好	灰白	肥前系 蛇の目状軸刺ぎ SK44	54-1
13	瓦質土器	焙烙	—	[5.4]	—	H I	5	普通	灰黄	SK44	54-1
14	陶器	香炉	(11.6)	[3.0]	—	H I	15	普通	淡黄	瀬戸美濃系 内外面灰軸 SK51	54-1
15	陶器	瓶	(3.0)	[3.0]	—	I	25	普通	灰褐	志戸呂系 内外面鉄軸 SK52	54-1
16	磁器	碗	(9.8)	5.7	(3.8)	K	30	普通	灰白	肥前系 SK54 No.2	53-6
17	磁器	碗	—	[3.7]	—	K	5	普通	白	肥前系 内外面鉄軸 SK54	54-2
18	磁器	碗	—	[2.3]	(3.8)	H	20	普通	灰白	肥前系 SK54	54-2
19	陶器	香炉	—	[4.2]	(9.0)	H I	20	良好	淡黄	瀬戸美濃系 外面灰軸 SK54 No.1	54-2
20	陶器	揉鉢	(30.0)	[2.7]	—	E H I	15	普通	にい黄褐	瀬戸美濃系 SK54 No.4	54-2
21	陶器	揉鉢	—	[9.2]	—	I K	15	良好	暗赤褐	瀬戸美濃系 SK54 No.3	54-2

ある。17世紀後半～18世紀前半の所産である。その他に瀬戸美濃系陶器天目茶碗底部片1、灰軸香炉底部片1・瓦質土器焙烙(平底)1が出土している。天目茶碗は、第1号溝跡から出土しているものと同一個体のものが認められた。香炉は体部

に半菊状のしのぎを有するタイプと見られ、遺構の所属時期は18世紀前半以降と考えられる。

第49・50・51号土壌(第114・115図14)

L6-H2グリッドに位置する。第1号溝跡を掘り込んで構築されている。各土壌の新旧関係は

第41表 土壌一覧表 (第111・114図)

番号	グリッド	平面形	長軸方位	長径 /m	短径 /m	深さ /m	重複遺構		
							土壌より古	土壌より新	不明
1	L6-F1	円形	—	0.98	0.86	0.56			
2	L6-F1	楕円形	N-30°-W	0.92	0.70	0.43			
3	L6-F1	長方形	N-54°-E	2.23	0.95	0.12	SK18・P9		
6	L6-G2	長方形	N-72°-E	1.75	0.76	0.12			
7	L6-G2	長方形	N-16°-W	2.44	0.62	0.16			
8	L6-F1	円形	—	0.54	0.47	0.24			
9	L6-H1	円形	—	0.75	0.73	0.25			
10	L6-F1	円形	—	0.62	(0.55)	0.26			
11	L6-G2	楕円形	N-82°-E	1.34	0.66	0.11			
12	L6-G2	楕円形	N-27°-E	0.88	0.70	0.16			P12
13	L6-H2	楕円形	N-7°-W	1.11	0.69	0.18			
14	L6-G1・2	楕円形	N-82°-E	0.64	0.37	0.66			
16	L6-H2	円形	—	0.70	0.65	0.17			
17	L6-F1	楕円形	N-17°-W	0.55	0.48	0.68			
18	L6-F1	楕円形	N-0°	0.66	0.65	(0.29)	SK3		
19	L6-G・H1	不整形	N-0°	1.04	0.90	0.58	SD1		P17
20	L6-G・H2	楕円形	N-59°-W	1.53	1.31	0.51			
22	L6-F1	楕円形	N-64°-W	0.55	0.43	0.54			
23	L6-G1	楕円形	N-20°-W	0.60	0.50	0.32			
24	L6-F1	不整形	N-66°-E	1.48	0.91	0.26			P11
25	L6-G2	不整形	N-28°-W	0.70	0.46	0.23			
26	L6-H1・2	不整形	N-70°-E	(1.30)	1.00	0.84			SK54
27	L6-F・G2	隅丸長方形	N-11°-W	2.10	0.74	0.10	SK28・P1		
28	L6-G2	隅丸長方形	N-70°-E	1.80	0.80	0.16	SK27		
29	L6-F2	楕円形	N-70°-W	0.58	0.44	0.40			
30	L6-G2	長方形	N-73°-E	1.65	0.65	0.15	SK31		
31	L6-G2	長方形	N-67°-E	2.00	0.60	0.10		SK30	P2
32	L6-G2	隅丸長方形	N-74°-E	2.02	0.54	0.21			
34	L6-G2	楕円形	N-83°-E	0.92	0.72	0.60			P31
35	L6-G2	円形	—	0.87	0.84	0.30			SK46
37	L6-G2	円形	—	1.30	1.30	0.28			
38	L6-G2	不整形	N-54°-E	(0.72)	0.52	0.34	P15		
39	L6-G2	円形	—	0.85	0.82	0.80			SK46・47
40	L6-G2	不整形	N-25°-W	(0.75)	0.65	0.12		P14	
41	L6-H2	円形	—	1.58	1.58	0.58	SK57		SD1・P14
44	L6-G3	不整形	N-20°-W	(1.12)	(0.34)	0.78			SK52
45	L6-G2	楕円形	N-23°-E	0.95	0.79	0.12			
46	L6-G2	長方形	N-8°-W	2.90	0.90	0.12		SK47	SK35・39
47	L6-G2	不整形	N-25°-W	1.55	1.55	0.19	SK46		SK39
49	L6-H2	円形	—	0.93	0.88	0.70	SK51・SD1		SK50
50	L6-H2	円形	—	0.85	0.70	0.78	SD1	SK51	SK49
51	L6-H2	隅丸長方形	N-74°-E	(1.55)	0.90	0.30	SK50	SK49・SD1	
52	L6-G2・3	楕円形	N-74°-W	1.16	0.95	0.44			SK44
53	L6-H2	円形	—	0.77	(0.56)	0.48		P13	
54	L6-H2	隅丸長方形	N-22°-W	3.52	1.15	0.64			SK26
55	L6-H・G2	楕円形	N-87°-E	0.83	0.68	0.28	SD1		
57	L6-H2	円形	—	0.82	(0.68)	0.45		SK41	SD1
58	L6-H2	楕円形	N-72°-E	3.15	2.04	0.32			

明確でないが、第51号土壌を壊して、第49・50号土壌が構築されていると考えられる。

遺物は第51号土壌から出土した。第115図14は瀬戸美濃系陶器の香炉で、菊花文が施されるタイプと考えられる。17世紀後半～18世紀前半の所産である。

第53号土壌 (第114図)

L 6-H 2 グリッドに位置する。ビットと重複し、南壁の一部が壊される。平面形は円形である。

第55号土壌 (第114図)

L 6-G・H 2 グリッドに位置する。第1号溝跡を壊して構築される。平面形は楕円形である。

第58号土壌 (第114図)

調査区南端のL 6-H 2 グリッドに位置する。長さ3.15m、幅2.04mを測る大型の土壌である。覆土は人為的な埋戻しと考えられる。

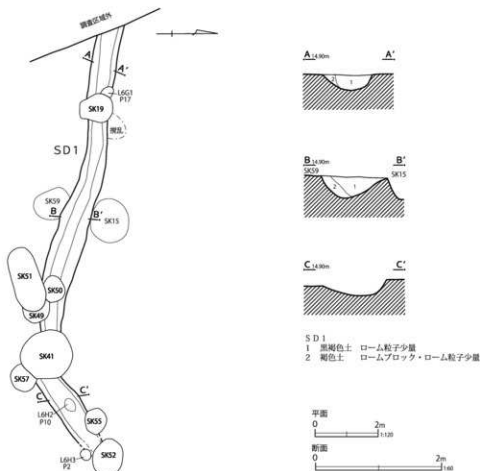
(2) 溝跡

第1号溝跡 (第117・118図 1～11)

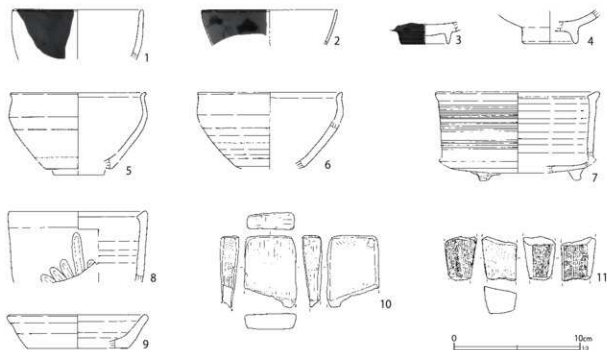
調査区中央南寄りのL 6-G・H 1・2 グリッドに位置する。第15・19・41・49～52・55・57・59号土壌と重複している。

西側に隣接する第4地点から延びる第4-6号溝跡と同一のものである。緩やかにカーブしながら南東に走行した後、重複する第41号土壌を境に北東に向きを変え、第52号土壌と重複し、端部が浅くなり途切れてしまう。規模は検出長13.80m、幅0.60～1.00m、深さ0.23～0.33mである。

第118図1～3は肥前系磁器碗である。1は一重の網目文を施す17世紀半ば頃の製品である。2は器壁が薄手の碗で17世紀後半～18世紀前半の製品である。3は粗製碗で18世紀代の製品である。4は肥前系陶器の碗で所謂呉器手である。17世紀



第117図 第1号溝跡



第118図 第1号溝跡出土遺物

第42表 第1号溝跡出土遺物観察表 (第118図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考		図版		
1	磁器	碗	(10.2)	[4.0]	—	K	10	普通	灰白	肥前系	内外面施釉 SD1a	54-3		
2	磁器	碗	(10.6)	[2.8]	—	K	15	普通	白	肥前系	内外面施釉 SD1c	54-3		
3	磁器	碗	—	[1.7]	3.6	K	80	良好	灰白	肥前系	SD1c	54-3		
4	陶器	碗	—	[2.7]	(4.2)	H I	20	普通	灰黄	肥前系	内外面灰釉 SD1c	54-3		
5	陶器	天目茶碗	(10.5)	[6.0]	—	E H	20	普通	浅黄	瀬戸美濃系	内外面施釉 SD1 Na1-330-332 同一個体	54-3		
6	陶器	天目茶碗	(11.3)	[3.4]	—	I K	20	普通	灰黄	瀬戸美濃系	SD1c SD4-6 から同一個体出土	54-3		
7	陶器	香炉	(12.8)	[7.0]	(12.5)	H I	20	良好	淡黄	瀬戸美濃系	外面灰釉 SD1c	54-3		
8	陶器	香炉	(10.8)	[5.6]	—	I K	20	良好	にがい黄	瀬戸美濃系	内外面灰釉 SD1c	54-3		
9	かわらけ	小皿	(10.6)	2.6	(8.0)	H K	20	良好	浅黄橙	SD1a		54-3		
10	石製品	砥石	長さ [5.6]	幅 4.1	厚さ 1.5	重さ 43.8 g							流紋岩 側面に櫛歯状工具痕 SD1	54-3
11	石製品	砥石	長さ [3.5]	幅 2.8	厚さ 2.5	重さ 27.5 g							流紋岩 両側・裏面に櫛歯状工具痕 SD1	54-3

代の製品である。5・6は瀬戸美濃系陶器の天目茶碗である。7・8は瀬戸美濃系陶器の香炉で、いずれも灰釉を施す。9はかわらけで、胎土は粗雑である。10・11は砥石で、櫛歯状工具痕が認められる。

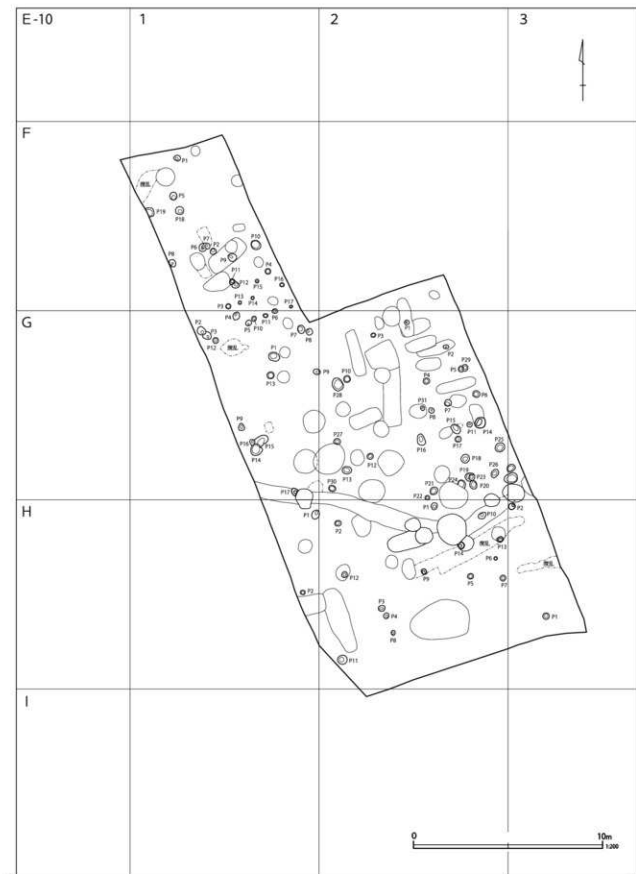
この他に肥前系磁器粗製碗破片2、薄手半球碗口縁破片1、御神酒徳利体部片1・瀬戸美濃系磁器小碗口縁破片1・瀬戸美濃系陶器灰釉香炉底部片1、菊皿底部片1・京都信楽系陶器平碗底部片1・土師質土器火鉢底部片1・瓦質土器焙烙(平

底)破片5・かわらけ口縁部片3・スサ入り粘土塊6・鉄製品(釘)1が出土している。全体としては18世紀代の遺物が目立つことから、18世紀後半には埋没した可能性が高い。

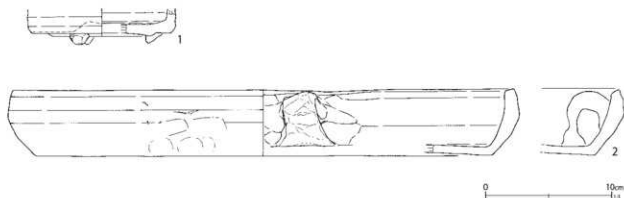
(3) ビット

ビットは87基が検出された(第119図)。分布は、第1号溝跡の北側を中心に広がり、特にL6ーG2グリッドに31基が集中している。

平面形は、円形もしくは楕円形のもののが大半を占める。中には、隣接して掘り込まれているビッ



第119図 ビット分布図



第120図 ビット出土遺物

第43表 ビット出土遺物観察表（第120図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	香炉	—	[2.8]	(11.0)	H I	15	普通	灰黄	瀬戸美濃系 L6R2-P5	53-7
2	瓦質土器	焙烙	(39.4)	5.2	(36.0)	H I K	15	普通	に白・黄	L6G2-P3	53-7

第44表 ビット一覧表

次数・区	グリッド	番号	長径/cm	短径/cm	深さ/cm
14次	L 6-F 1 (19)	1	36	32	24
		2	32	32	41
		3	27	27	10
		4	30	30	49
		5	41	39	41
		6	40	35	61
		7	35	(23)	43
		8	40	32	60
		9	45	40	40
		10	54	47	31
		11	32	25	22
		12	34	(32)	76
		13	19	16	11
		14	18	16	8
		15	20	17	9
		16	25	23	10
		17	18	14	9
		18	43	43	31
		19	55	(35)	20
	L 6-G 1 (17)	1	60	46	29
		2	49	40	73
		3	40	(38)	35
		4	45	36	71
		5	33	30	26
		6	30	(19)	33
		7	44	37	55
		8	32	32	66
		9	37	30	17
		10	28	24	15
		11	26	20	13
		12	32	31	10
		13	38	36	20
		14	62	61	22

次数・区	グリッド	番号	長径/cm	短径/cm	深さ/cm
14次	L 6-G 2 (31)	15	(78)	48	24
		16	(30)	26	14
		17	(32)	34	41
		1	26	25	(25)
		2	30	20	(65)
		3	26	24	27
		4	35	31	74
		5	32	27	54
		6	37	35	20
		7	35	34	36
		8	30	28	16
		9	38	30	73
		10	37	36	25
		11	28	26	28
		12	33	32	20
		13	48	40	43
		14	60	52	44
		15	49	40	51
		16	58	40	40
		17	33	33	38
		18	46	44	45
		19	41	(20)	30
		20	(43)	37	41
		21	45	38	38
		22	25	22	15
		23	31	30	43
		24	(34)	43	33
		25	50	46	17
		26	47	34	34
		27	35	30	27
		28	68	55	19
		29	36	(34)	40
		30	37	33	46

次数・区	グリッド	番号	長径/cm	短径/cm	深さ/cm
14次	L 6-G 3	31	25	20	96
		1	46	37	9
		(2)	2	72	51
	L 6-H 1	1	50	40	40
		(2)	2	26	24
	L 6-H 2 (14)	1	36	34	13
		2	33	30	13
		3	36	30	33
		4	33	30	23
		5	43	40	9
		6	19	19	18

次数・区	グリッド	番号	長径/cm	短径/cm	深さ/cm
14次		7	32	30	40
		8	26	23	37
		9	31	25	70
		10	45	33	(26)
		11	52	49	19
		12	30	29	60
		13	38	30	104
		14	35	(34)	90
		1	35	34	29
		(2)	2	25	26
	L 6-H 3				

トも見られるが、覆土の土層断面の観察では柱痕跡などを確認できたものは少なく、建物跡や柵列等を想定することは難しい。規模は、直径14～78cm、深さ8～104cmと幅があるが、概ね直径30～40cm、深さ40cmにまとまっている（第44表）。

遺物を出土するものは少ない。L 6-H 2 グリッドP 5から第120図1の瀬戸美濃系陶器の香炉が出土しているほか、L 6-G 2 グリッドP 31から2の瓦質土器の焙烙が出土した。

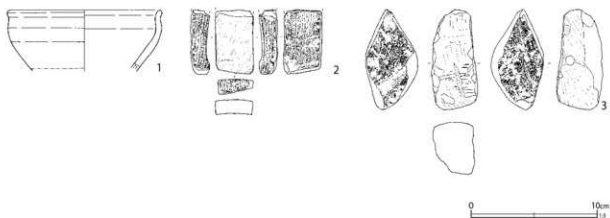
この他に実測・図示しなかったが、L 6-G 1 グリッドP 8から、かわらけの口縁部細片1が出

土している。胎土・形態の特徴から中世に遡る可能性はある。

（4）グリッド出土遺物

グリッド出土遺物を第121図に掲載した。いずれも表採遺物である。

1は瀬戸美濃系陶器の天目茶碗である。鉄釉を施釉する。2・3は流紋岩製の砥石である。2は上半部を折損している。両側面及び裏面に櫛歯状工具痕を顕著に残し、被熱を受けている。3は両側面に丸ノミ状工具痕を残している。砥面には刀物痕が多数認められる。



第121図 グリッド出土遺物

第45表 グリッド出土遺物観察表（第121図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	天目茶碗	(12.0)	[4.8]	—	H I	10	良好	にぶい黄	瀬戸美濃系 表採	53-8
2	石製品	砥石	長さ [5.1] 幅 3.1 厚さ 1.5 重さ 32.0 g				流紋岩 両側・裏面に櫛歯状工具痕 被熱 表採				53-8
3	石製品	砥石	長さ 8.0 幅 3.8 厚さ 4.2 重さ 125.0 g				流紋岩 両側面丸ノミ状工具痕 刀物痕多数 表採				53-8